津山市埋蔵文化財発掘調査報告第24集

柳谷古墳

—津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告１—

1988．3

津山市土地開発公社
津山市教育委員会

題字：永礼達造津山市長

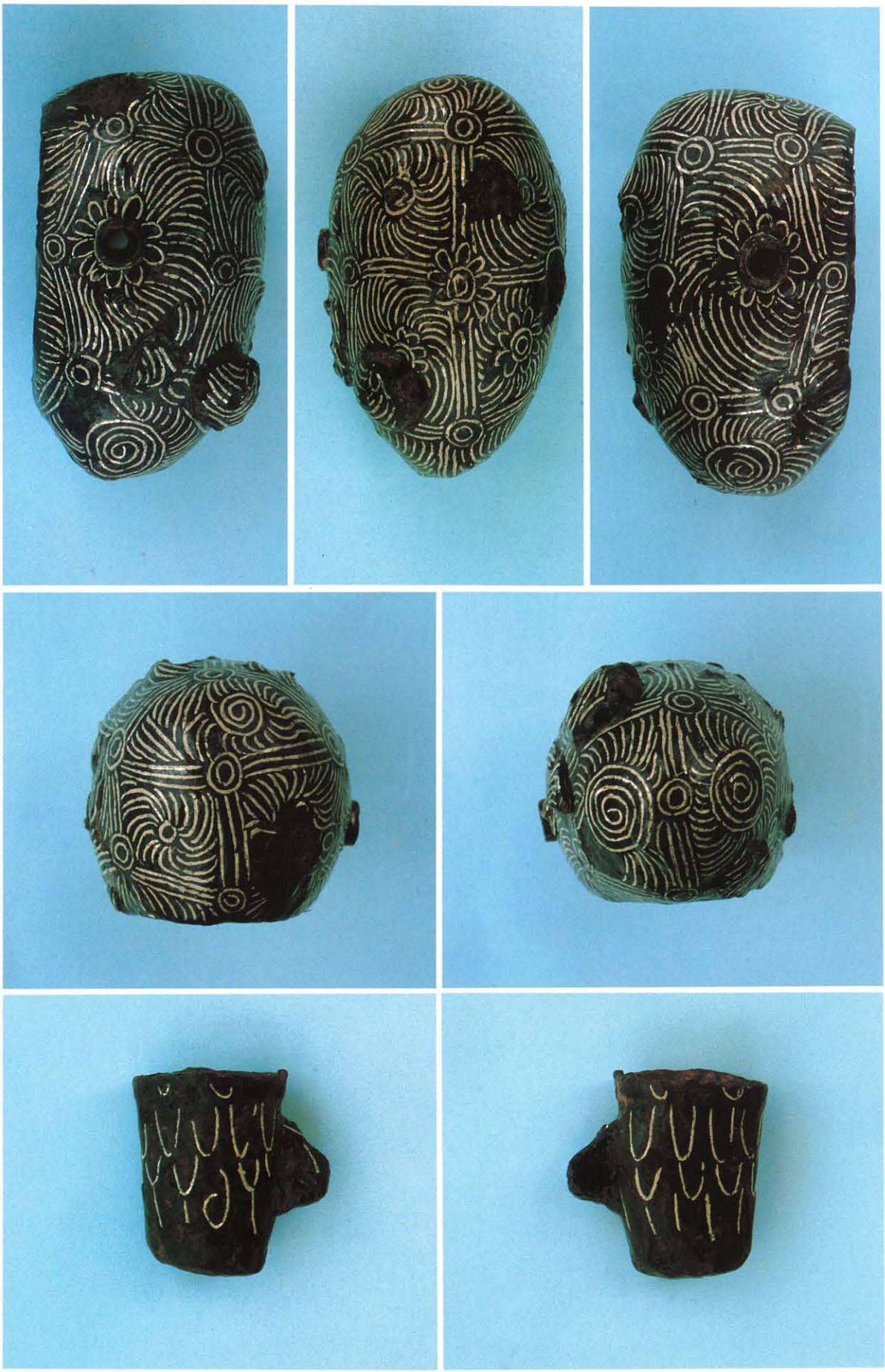
津山市埋蔵文化財発掘調査報告第24集

柳谷古墳

—津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告１—

１９８８．３

津山市土地開発公社
津山市教育委員会



銀象嵌頭椎大刀把頭(上・中)と鞘尾金具(下)

序

柳谷古墳は津山中核工業団地造成により発掘調査された古墳であります。

開発と文化財保護の問題は古くて新しい問題であり、常に表裏一体のものであります。幸い原因者である津山市土地開発公社の御配慮により、唯一の前方後円墳（一貫東１号墳）は緑地公園に取り入れ、現状保存措置を講ずることができました。しかし、54*ha*という広大な津山中核工業団地内には10ヶ所の遺跡があり、再三にわたって保存の協議がなされました。しかし、最終的に遺跡の保存をすると造成ができないという結論に達し、記録保存を余儀なくされたのであります。本書はその第１集にあたる報告書であります。

さて、柳谷古墳は墳丘の高まりもなく、全く周知されていない古墳でありました。たまたま確認調査のトレンチで発見されたものであります。径８ｍ足らずの小円墳でありながら、全国でも数例しか発見されていない銀象嵌頭椎大刀をもっておりました。改めて〝文化財の価値とは何か〟というものを考えさせられたような気がしております。発掘調査は現在も継続中ではありますが、最新の情報をいち早く公表したいとの立場から、ささやかではございますが、ここに報告書を刊行することにいたしました。各位の御活用をいただければ幸いです。

末筆ではございますが、発掘調査から報告書作成にいたるまで多大の御協力をいただいた津山市土地開発公社、並びに関係者各位に対し厚く御礼申し上げる次第であります。

昭和63年３月31日

津山市教育委員会

教育長　福島祐一

例　言

1．本書は津山中核工業団地造成に伴う柳谷古墳の発掘調査報告書である。

1．津山中核工業団地内には10ケ所の遺跡がある。本書は津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告１とし、以下刊行順に２～10の番号を付してゆく。

1．発掘調査経費はすべて原因者である津山市土地開発公社の負担によるものである。

1．発掘調査は津山市教育委員会文化課主事行田裕美の協力を得て、埋蔵文化財発掘調査員保田義治が担当した。

1．本書に用いたレベル高は海抜高である。また方位は平面直角座標系第Ⅴ系の北である。

1．本書第８図に使用した「津山中核工業団地内遺跡と周辺主要遺跡分布図」は建設省国土地理院発行５万分の１（津山市東部）を複製したものである。

1．頭椎大刀把頭及び鞘尾金具のクリーニングには奈良大学文学部文化財学科保存科学研究室西山要一助教授に依頼し、「柳谷古墳出土銀象嵌柄頭の保存処理と材質分析」の玉稿を賜った。記して謝意を表します。

1．本書では原則として敬称を省略した。御容赦願いたい。

1．本書の執筆はⅠ・Ⅱを行田が、Ⅲを保田が担当し、編集は保田が担当した。

1．遺物整理には杉山紀子、飯田和江、野上恭子、光永純子の協力を得た。

1．出土遺物のうち頭椎大刀把頭と鞘尾金具は津山市郷土博物館に展示し、他の出土遺物と図面は津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査事務所に保管している。

本 文 目 次

Ⅰ　津山中核工業団地造成と発掘調査に至る経過 1
1　津山中核工業団地造成に至る経過 1
2　発掘調査に至る経過 2
Ⅱ　津山中核工業団地内の遺跡と周辺の遺跡 4
1　津山中核工業団地内の遺跡 4
2　周辺の遺跡 7
Ⅲ　柳谷古墳 11
1　位置と立地 11
2　調査の経過 11
(1) 調査に至る経過 11
(2) 調査経過 11
3　調査体制 12
4　調査の記録 14
(1) 調査前の状況 14
(2) 墳丘と周溝 14
(3) 横穴式石室 15
(4) 遺物出土状況 18
(5) 出土遺物 20
5　まとめ 31
(1) 柳谷古墳の諸問題 31
柳谷古墳の立地の問題 31
柳谷古墳の築造時期 32
陶棺と鉄滓 35
(2) 銀象嵌頭椎大刀把頭について 37
全国の類例 37
出土古墳の特徴 42
銀象嵌頭椎大刀把頭の特徴 44
まとめ―今後の課題 46
参考文献 47
6　柳谷古墳出土銀象嵌柄頭の保存処理と材質分析 西山要一 49

挿 図 目 次

第１図　津山市位置図---- 1
第２図　津山中核工業団地位置図---- 2
第３図　第Ⅰ・Ⅱ期工事区分図---- 2
第４図　周知の遺跡分布図---- 2
第５図　調査前の航空写真（北から）---- 3
第６図　トレンチ設定状況航空写真（南から）---- 3
第７図　津山中核工業団地内遺跡分布図（Ｓ＝1：10000）---- 4
第８図　津山中核工業団地内遺跡と周辺主要遺跡分布図（Ｓ＝1：25000）---- 8
第９図　頭椎大刀把頭・鞘尾金具のレントゲン写真（Ｓ＝1：1）----10
第10図　遺物の出土状況写真----13
第11図　調査指導風景----13
第12図　柳谷古墳全体図（Ｓ＝1：100）----14
第13図　周溝断面図（Ｓ＝1：40）----14
第14図　石室床礫平面図（Ｓ＝1：40）----16
第15図　石室実測図（Ｓ＝1：40）----17
第16図　石室内遺物出土状況図（Ｓ＝1：20）----19
第17図　墳裾部遺物出土状況図（Ｓ＝1：20）----20
第18図　出土遺物実測図〔１〕（Ｓ＝1：3）----22
第19図　出土遺物実測図〔２〕（Ｓ＝1：3）----24
第20図　出土遺物実測図〔３〕（Ｓ＝1：3）----25
第21図　出土遺物実測図〔４〕（Ｓ＝2：3）----25
第22図　出土遺物実測図〔５〕（Ｓ＝1：6）----26
第24図　出土遺物実測図〔７〕（Ｓ＝2：3）----28
第25図　二子御堂奥古窯址　第Ⅰ期須恵器（Ｓ＝1：3）----34
第26図　寒風古窯址群　Ａ類須恵器（Ｓ＝1：3）----34
第27図　寒田古窯址群　Ａ類須恵器（Ｓ＝1：3）----34
第28図　銀象嵌頭椎大刀把頭出土類例（Ｓ＝1：3）----37
第29図　兵庫県中井２号墳出土頭椎大刀把頭実測図（Ｓ＝1：2）----38
第30図　兵庫県中井２号墳出土遺物（Ｓ＝1：4）----38

第31図　埼玉県塚本山19号墳出土遺物（S＝1：4）----40
第32図　静岡県風呂ヶ谷5号墳出土頭椎大刀把頭----41
第33図　銀象嵌頭椎大刀把頭出土分布図----43
第34図　金銅装頭椎大刀出土分布図----44
第35図　円頭大刀把頭の銀象嵌文様----45
第36図　精密加工グラインダーによる象嵌上の錆の削除---- 51
第37図　エアーブラシによる象嵌の表出---- 51
第38図　頭椎柄頭象嵌断面の定性分析(X線マイクロアナライザーによる原素分析
上：面分析　下：点分析) ---- 53
第39図　頭椎柄頭象嵌断面の定性分析(X線マイクロアナライザーによる原素分布分析)-- 54
第40図　円頭柄頭象嵌断面の定性分析(X線マイクロアナライザーによる原素分析
上：面分析　下：点分析) ----55
第41図　円頭柄頭象嵌断面の定性分析(X線マイクロアナライザーによる原素分布分析)-- 56
第42図　象嵌線の定量分析(X線マイクロアナライザーによる　上：頭椎柄頭象嵌線
下：円頭柄頭の象嵌線) ---- 57

表　目　次

第1表　津山中核工業団地内遺跡調査一覧表（昭和63年3月現在） ---- 6
第2表　津山中核工業団地内遺跡と周辺主要遺跡分布図対象表---- 9
第3表　出土遺物観察表----29～30
第4表　銀象嵌頭椎大刀把頭出土地名表----39

図　版　目　次

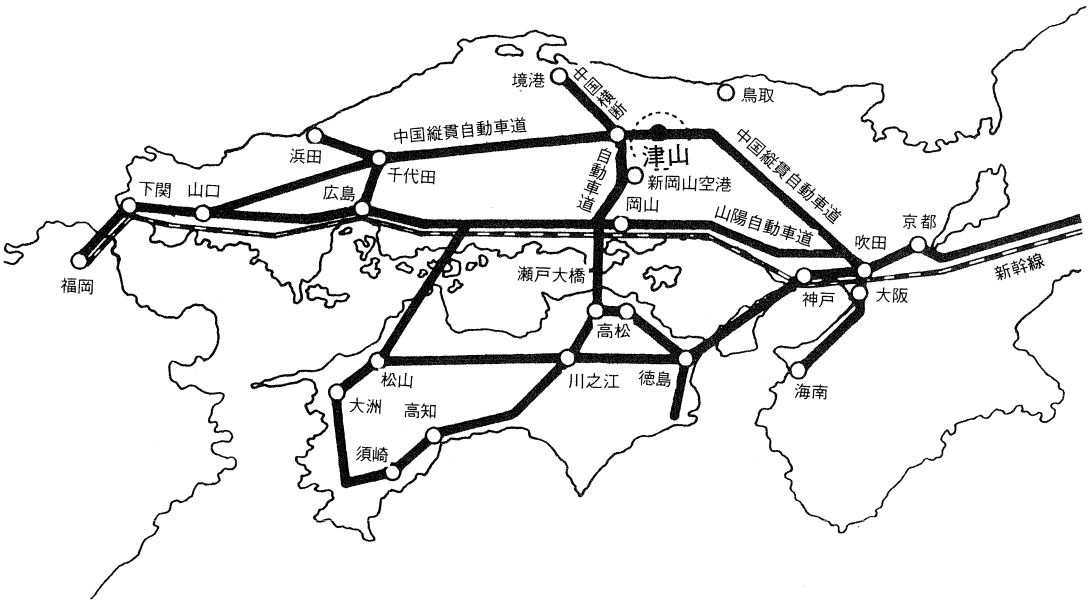
図版1-1 柳谷古墳遠景（北から）
2 柳谷古墳全景
図版2-1 石室内遺物出土状況
2 石室内遺物出土状況　近影
（第Ⅰ・Ⅱブロック）
図版3-1 石室内遺物出土状況　近影
（第Ⅲ・Ⅳブロック）
2 閉塞部頭椎大刀把頭・鞘尾金具出土状況
図版4-1 墳裾部大甕出土状況
（陥入破片除去前）
2 墳裾部大甕出土状況
（陥入破片除去後）
図版5-1 石室掘り方土層断面（長軸南側西面）
2 石室掘り方土層断面（短軸西側北面）
図版6-1 柳谷古墳完掘全景
2 柳谷古墳完掘全景（北から）
図版7-1 石室横断ち割り状況
2 周溝土層断面（短軸西側北面）
図版8　出土遺物(1)S＝1：3
図版9　出土遺物(2)S＝1：3
図版10　出土遺物(3)14・15 S＝1：3
26～28 S＝2：3　29 S＝1：9
図版11　出土遺物(4)S＝2：3

Ⅰ　津山中核工業団地造成と発掘調査に至る経過

1　津山中核工業団地造成に至る経過

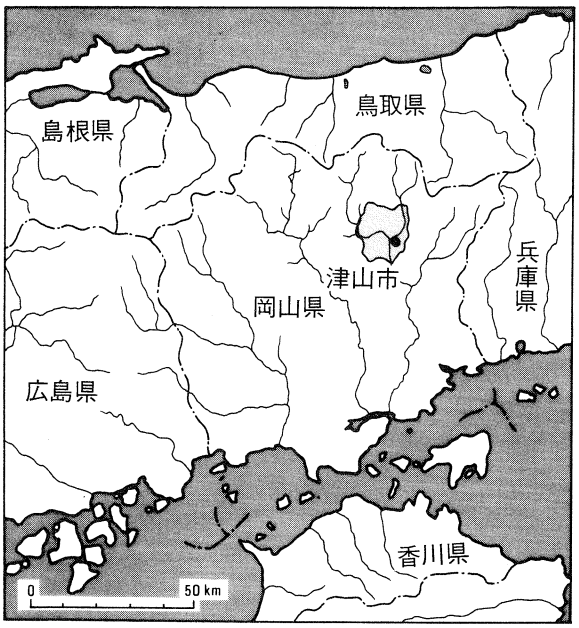
昭和50年に開通した中国縦貫自動車道は津山市の産業・教育・文化・レクリエーション等あらゆる面に大きな影響を与えた。市内の東に津山インター、西には院庄インターが設置され、それに接続する幹線道路網を主軸として、山陰と山陽、阪神圏と西日本の結接点として位置的な重要性が高まっている。さらに将来中国横断自動車道、瀬戸大橋及び新岡山空港の建設と相まって、中国地方内陸部における交通の要衝となるものと予測され、津山市は内陸部最大の都市として今後ますます発展が期待されている。

現在、津山市には院庄工業団地、綾部工業団地、草加部工業団地、国分寺工業団地、高野工業団地の５つの工業団地があるが、いずれも企業誘地が完了しており、今後さらに企業の進出が予測されている。そこで津山市は地域経済の活性化と雇用の拡大をはかり若者が定住できる地域社会をめざして、本格的な工業団地である津山中核工業団地の建設を決定したのである。この計画は昭和50年に計画されたもので、中国縦貫自動車道の開通により社会的諸条件が好転する背景の中で、津山圏域の定住圏計画でもある津山新都市圏整備計画の中に計画された東部に勝央中核工業団地（100*ha*）、中央に津山工場公園（154*ha*）、西部に久米工場公園（170*ha*）と通産省の工業再配置政策の本旨にかなった内陸工業の開発拠点として、地域振興整備公団の事業採択を要請してきた。しかし、昭和56年３月、最終的に津山市独自で対応する事を決定し、従来



第１図　津山市位置図

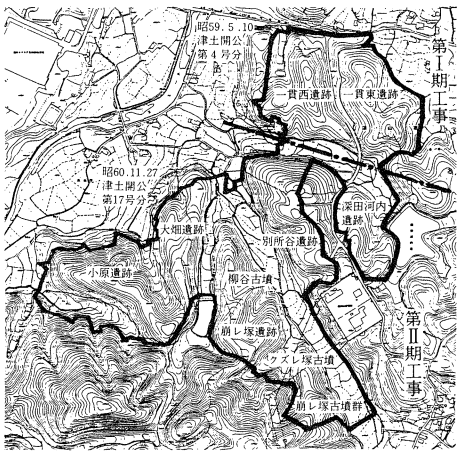
津山工場公園と呼称していたものを現在の津山中核工業団地の名称に変更した。その後、工業適地指定をし、農業振興地域を解除して都市計画の用途指定をするなど推進を図り、昭和57年から地権者交渉を開始し、協力を得られなかった地域を除き最終的に54.1*ha*に規模を縮少し工事を発注する運びとなった。



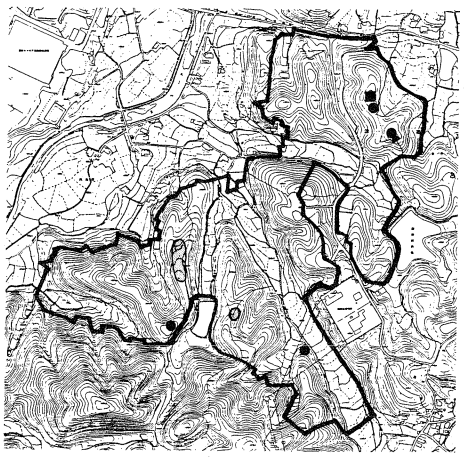
第２図　津山市中核工業団地位置図

２．発掘調査に至る経過

昭和59年５月10日付津土開公第４号で文化財保護法第57条の３にもとづき、津山市土地開発公社理事長永礼達造から「埋蔵文化財に関する協議について（通知）」が提出された。これは、事業計画予定地の工区を当初第Ⅰ期工事、第Ⅱ期工事の２工区に分けていた段階（第３図）の第１期工事部分約123,000㎡に相当するものである。これを受け津山市教育委員会では地形的にみて、周知の遺跡（第４図）以外にも容易に遺跡の立地が予測されたので立木伐採後改めて分布調査を実施することにした。立木伐採後の分布調査ではかなりの範囲にわたって遺跡の立地が予測されたので確認調査を実施することにした。確認調査はバックホーを借上げ、幅２ｍのトレンチを等高線走向に直交するように５ｍ間隔で設定した。その後、発掘作業員による精査を行った。期間は昭和59年６月27日～７月５日までを費した。この結果、遺跡は丘陵のほぼ全域に拡がることが確認され、一貫西遺跡と命名した。東接する一貫東遺跡は前方前円墳１、円墳１、方墳１の周知の遺跡に加え、弥生土器の散布も認められたので全面発掘調査の実施はさけられなかった。



第３図　第Ⅰ・Ⅱ期工事区分図


第４図　周知の遺跡分布図

第Ⅱ期工事分については、昭和60年11月27日付

津土開公第17号で協議がなされた。面積は約462,000㎡である。この地域についても山林原野であり、前回と同様の扱いをすることとなった。すなわち、立木伐採後再度協議するということ

第5図　調査前航空写真（北から）

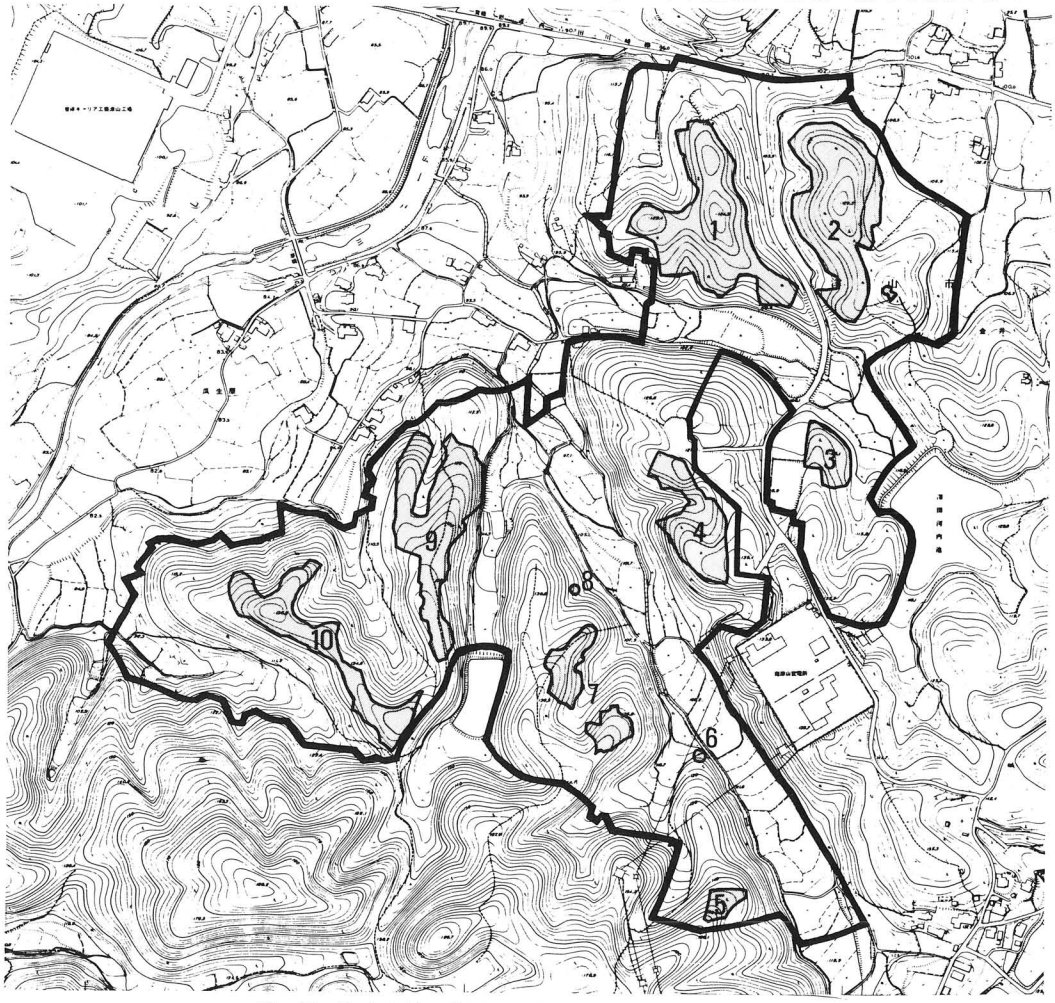
第6図　トレンチ設定状況航空写真（南から）

である。立木伐採後新たに発見した埋蔵文化財は円墳４基であった。しかし、一貫西遺跡の場合と同様、地形的に遺跡の立地が予測される地点については確認調査を実施することで合意した。この結果、周知の遺跡も含めて深田河内遺跡、別所谷遺跡、崩レ塚古墳群、クズレ塚古墳崩レ塚遺跡、柳谷古墳、大畑遺跡、小原遺跡が調査対象となったのである。

Ⅱ　津山中核工業団地内の遺跡と周辺の遺跡

1　津山中核工業団地内の遺跡

事業計画予定地内の周地の遺跡は昭和51年の分布調査時では前方後円墳１（一貫東１号墳)、円墳１（一貫東２号墳)、方墳１（一貫東３号墳)、弥生土器、須恵器の散布地２ケ所（崩レ塚遺跡、大畑遺跡）が認められるにすぎなかった。しかし、立木伐採後の再度の分布調査で新たに



第７図　津山中核工業団地内遺跡分布図（S＝1：10,000）

円墳４基（クズレ塚古墳、大畑１・２号墳、小原１号墳）を発見した。しかし、その後のトレンチによる確認調査で周知の遺跡も含め、最終的に10遺跡を数えるにいたった。以下、遺跡ごとに概要を記すことにする。

１　一貫西遺跡

弥生時代中期の集落、古墳３基、奈良時代と考えられる製鉄関連遺構群よりなる。弥生時代中期後半の集落は住居址４軒、建物址２棟、段状遺構等により構成される。古墳の内訳は５世紀末頃と考えられる方墳２基と６世紀末頃と考えられる円墳１基である。製鉄関連遺構としたものには住居址１軒、建物址６棟、段状遺構、廃滓捨て場等がある。製鉄炉は後世の畑地造成のため遺存していなかった。

２　一貫東遺跡

弥生時代後期の集落、貯蔵穴群、土壙墓群、古墳８基、中世の建物址等よりなる。弥生時代後期の集落は住居址10軒、建物址４棟、段状遺構等により構成される。貯蔵穴は47基、土壙墓は49基を数える。古墳の内訳は前方後円墳１基、円墳３基、方墳４基である。時期はいずれも５世紀代と考えられる。尚、前方後円墳は緑地公園に取り入れ現状保存措置を講じた。中世に属するものには建物址２棟、段状遺構等がある。

３　深田河内遺跡

弥生時代中期の集落、古墳時代の段状遺構、中世の建物址等よりなる。弥生時代中期の集落は住居址２軒、建物址１棟より構成される。古墳時代の段状遺構には鍛冶炉も含まれる。中世の建物址は２棟を数える。

４　別所谷遺跡

弥生時代中期の集落、奈良時代の段状遺構等よりなる。弥生時代中期の集落は住居址８軒、長方形竪穴住居状遺構１軒、建物址９棟、段状遺構等により構成される。奈良時代の段状遺構からは鉄滓が出土している。

５　崩レ塚古墳群

方墳３基、円墳１基より構成される古墳群である。方墳３基はいずれも箱式石棺を主体部にもち、円墳は石蓋土壙墓である。いずれの古墳からも出土遺物はなく、時期は断定できない。

６　クズレ塚古墳

昭和27年、一部調査された古墳である（註１）。横穴式石室を主体部にもつ円墳である。横穴式石室現存長約９ｍを測り、津山市内では最大級のものである。石室の奥壁側には陶棺１基が納められていた。時期は６世紀後半～７世紀初頭頃と考えられる。古墳の下層から焼けた礫群と共に縄文土器23片が出土した。

７　崩レ塚遺跡

弥生時代中期の集落、炭窯と考えられている窯状遺構３基よりなる。弥生時代中期の集落は住居址３軒、長方形住居状遺構１軒、段状遺構等より構成される。

8　柳谷古墳

横穴式石室を主体部にもつ小円墳である。銀象嵌頭椎大刀把頭、鞘尾金具が出土した。時期は６世紀末～７世紀初頭頃と考えられる。

9　大畑遺跡（昭和63年３月現在調査中）

弥生時代後期の集落、古墳２基、製鉄関連遺構等よりなる。弥生時代後期の集落は住居址、建物址、段状遺構等により構成される。他に土壙墓も検出されている。古墳はどちらも本棺直葬墳であり、時期は６世紀前半頃と考えられる。製鉄に関連する遺構には住居址、建物址、鉄滓集中地点等がある。時期は７世紀前半頃と考えられる。他に炭窯と考えられている窯状遺構１基がある。

10　小原遺跡（昭和63年３月現在調査中）

弥生時代後期の集落、古墳４基、炭窯と考えられている窯状遺構３基よりなる。弥生時代後期の集落は住居址、建物址、段状遺構等により構成される。古墳はいずれも円墳で、時期は５世紀末～６世紀初頭頃と考えられる。

第１表　津山中核工業団地内遺跡調査一覧表（昭和63年３月現在）

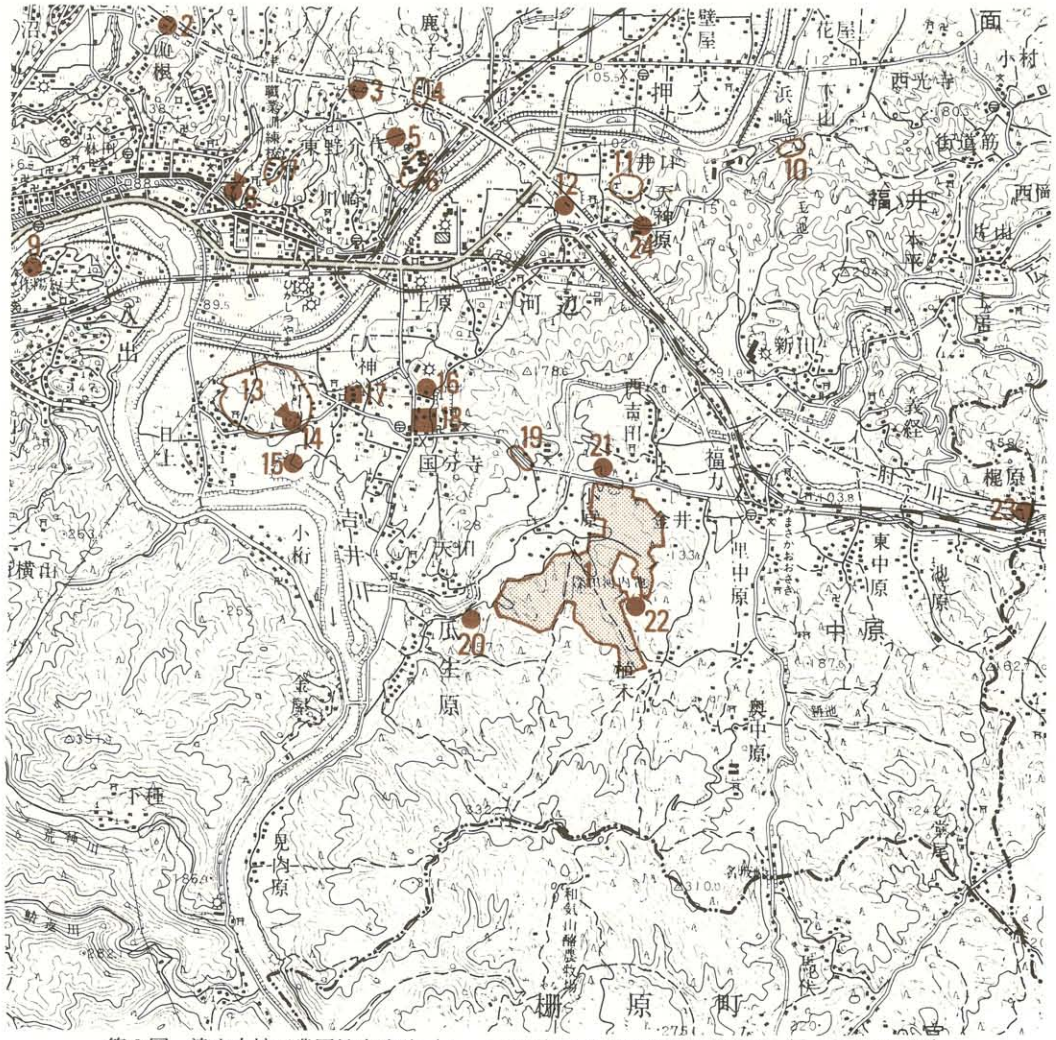
番号	遺跡名	調査面積	調査期間	調査担当者	報告書刊行予定年度
1	一貫西遺跡	22,000㎡	S59　S61 11／26～5／26	行田　裕美	昭和64年度 津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告3
2	一貫東遺跡	20,000㎡	S60　S61 3／7～12／2	湊　哲夫	未定
3	深田河内遺跡	3,300㎡	S61 5／22～7／30	行田　裕美	昭和63年度 津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告2
4	別所谷遺跡	9,400㎡	S61 7／26～10／23	行田　裕美	昭和65年度 〃　6
5	崩レ塚古墳群	1,400㎡	S62 8／28～10／19	小郷　利幸	昭和64年度
6	クズレ塚古墳	200㎡	S62 8／4～11／6	小郷　利幸	〃　4
7	崩レ塚遺跡	5,100㎡	S62　S63 10／7～1／30	保田　義治	昭和64年度 〃　5
8	柳谷古墳	100㎡	S62 10／9～11／12	保田　義治	昭和62年度 〃　1
9	大畑遺跡	約18,000㎡	S61 10/24～12/23、S62 11/10～12/12 S62 4/1～10/6、S63 1/26～	行田　裕美 小郷　利幸 保田　義治	昭和65年度 〃　7
10	小原遺跡	約12,000㎡	S61 12/24～S62 4/14、S62 11/6～ ～S62 7/13～8/3	行田　裕美 小郷　利幸	昭和65年度 〃　8

2　周辺の遺跡

津山中核工業団地は吉井川の支流広戸川の東岸下流域の津山市瓜生原、金井地区に位置する。この一帯は標高130～150mの丘陵と比高差30～50mの平野部が樹枝状に入り込んだ複雑な地形を呈している。この一帯から広戸川と同じく吉井川の支流である加茂川流域にかけての地域は非常に遺跡の密な地域である。

津山市内の集落遺跡の開始は弥生時代前期にまでさかのぼるが、これは現在の津山市街地、宮川下流域に限定されており普遍的なものではない。これが各地域に広く認められるようになるのは弥生時代中期以降である。この時期から順を追って津山中核工業団地周辺の遺跡を概観してみたい。まず弥生時代中期に属する遺跡として、押入西遺跡、西吉田遺跡、金井別所遺跡等があげられる。これらの遺跡はいずれも住居址数軒から構成されるもので、集落研究、土器の編年研究の上で貴重な資料を提供するものである。後期の遺跡としては環濠集落で著名な天神原遺跡があげられる。古墳時代になるとこの地域は津山市内においても最も重要な地域となる。すなわち、津山市内最古と考えられている前方後円墳日上天王山古墳、現存約60基の円墳より構成される古式の群集墳日上畝山古墳群が同一丘陵上に立地することである。これは瀬戸内海から吉井川を北上した際、津山盆地の玄関口、加茂川との合流点にあたるという地理的条件に恵まれたことに起因するものであろう。さらに奈良時代には美作国分寺、同国分尼寺もこの地域に建立されたように古代においては大変重要な役割を担った地域であったのである。

（註１）　渡辺健治「津山市植木クズレ塚陶棺古墳」『古代吉備』第７集1971年。

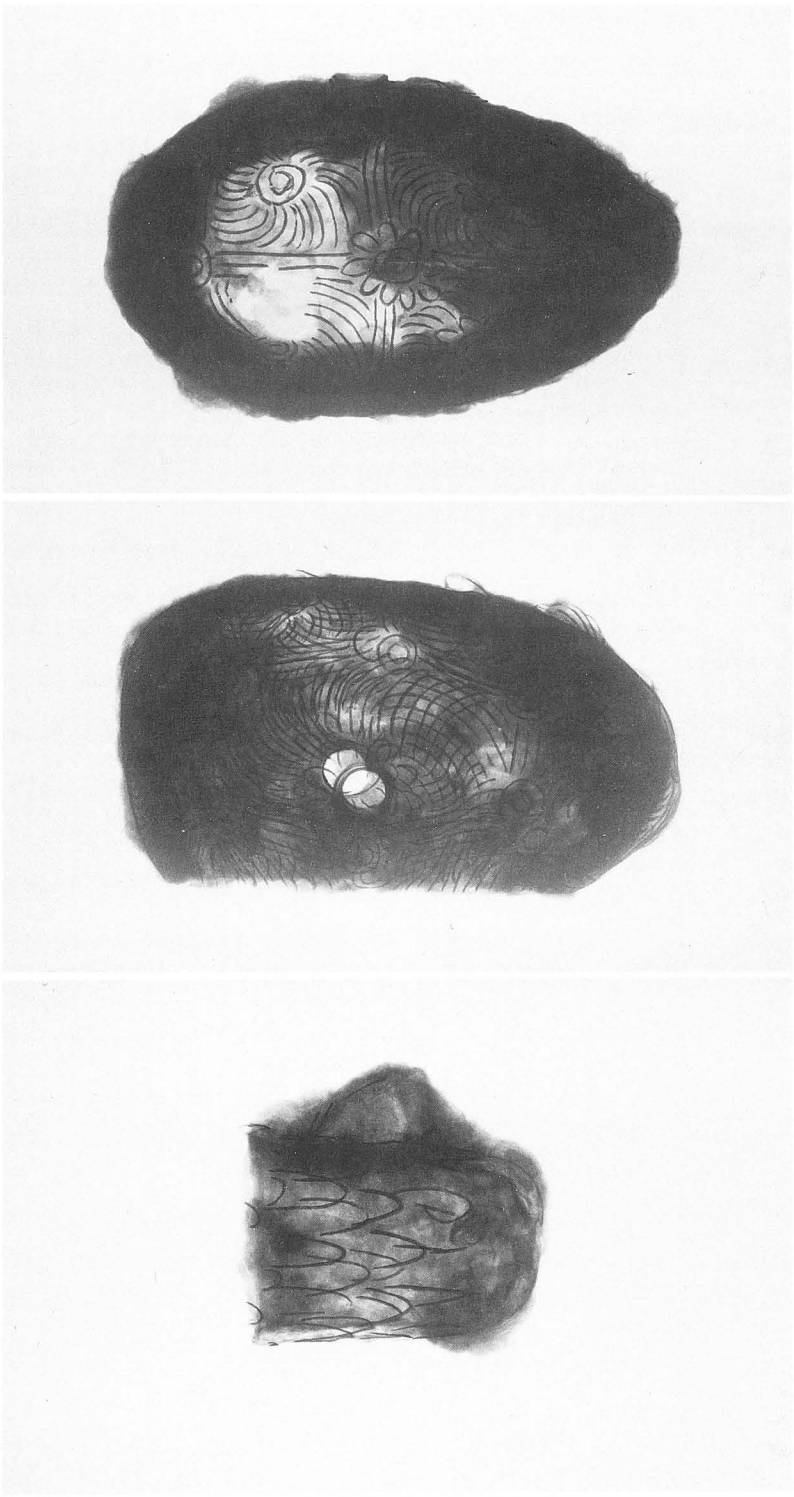


第８図　津山中核工業団地内遺跡（トーン部分）と周辺主要遺跡分布図（S＝1：25,000）

1．津山中核工業団地造成地内遺跡
2．野介代遺跡
3．押入西遺跡
4．押入飯網神社古墳群
5．狐塚遺跡
6．能満寺古墳群
7．六ッ塚古墳群
8．玉淋大塚古墳
9．覗山遺跡
10．三毛ヶ池古墳群
11．車塚古墳群
12．天神原遺跡
13．畝山古墳群
14．天王山古墳
15．和田古墳
16．飯塚古墳
17．美作国分尼寺跡
18．美作国分寺跡
19．長畝山古墳群
20．隠里古墳群
21．西吉田遺跡
22．金井別所遺跡
23．梶原遺跡
24．岡田遺跡

第２表　津山中核工業団地内遺跡と周辺主要遺跡分布図対照表

１．津山中核工業団地内遺跡	本書
２．野介代遺跡	河本　清・橋本惣司・柳瀬昭彦「野介代遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告３』1973年。
３．押入西遺跡	河本　清・橋本惣司・下沢公明・井上　弘・柳瀬昭彦「押入西遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告３』1973年。
４．押入飯網神社古墳群	河本　清・橋本惣司・柳瀬昭彦「押入飯網神社古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告４』1973年。
５．狐塚遺跡	河本　清「狐塚遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第２集』1974年。
６．能満寺古墳群	今井　堯「原始社会から古代国家の成立へ」『津山市史』第１巻原始・古代1972年。
７．六ッ塚古墳群	今井　堯『六ッ塚古墳群調査略報』津山市文化財調査略報３1962年。「六ッ塚古墳群」津山市文化財調査略報№４。今井　堯『六ッ塚１号墳調査略報』津山市文化財調査略報７1966年。近藤義郎「岡山県津山市六ッ塚古墳群」『日本考古学年報15』1967年。
８．玉淋大塚古墳	今井　堯「津山市川崎玉淋大塚調査報告」津山市文化財調査略報第１集1960年。
９．覗山遺跡	湊　哲夫『八出覗山遺跡発掘調査報告』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第３集1977年。
10．三毛ヶ池古墳群	
11．車塚古墳群	「井口車塚古墳」『津山の文化財』1983年。
12．天神原遺跡	河本　清・橋本惣司・下沢公明・柳瀬昭彦「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告７』1975年。
13．畝山古墳群	「日上畝山古墳群」津山市埋蔵文化財調査略報№４。今井　堯・近藤義郎「群集墳の盛行」『古代の日本４』中国・四国1970年。「日上天王山古墳と畝山古墳群」『津山の文化財』1983年。
14．天王山古墳	「日上天王山古墳と畝山古墳群」『津山の文化財』1983年。
15．和田古墳	行田裕美『日上和田古墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第６集1981年。
16．飯塚古墳	「国分寺飯塚古墳」『津山の文化財』1983年。
17．美作国分尼寺跡	湊　哲夫『美作国分尼寺跡発掘調査報告』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第12集1983年。
18．美作国分寺跡	湊　哲夫・安川豊史・行田裕美『美作国分寺跡発掘調査報告』1980年。
19．長畝山古墳群	河本　清「美作考古学の現状と課題」『古代吉備』第２集1971年。今井　堯「原始社会から古代国家の成立へ」『津山市史』第１巻原始・古代1972年。
20．隠里古墳群	渡辺健治「美作隠里箱式石棺調査報告」『古代吉備』第２集1971年。
21．西吉田遺跡	行田裕美『西吉田遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集1985年。
22．金井別所遺跡	1975～76年にかけて中国電力㈱新津山変電所文化財発掘調査委員会が発掘調査を実施。報告書未刊。
23．梶原遺跡	田中　満・井上　弘「梶原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告３』1971年。
24．岡田遺跡	1971年に津山市教育委員会が発掘調査を実施。報告書未刊。



第９図　頭椎大刀把頭・鞘尾金具のレントゲン写真（Ｓ＝１：１）
津山中央病院にて撮影

Ⅲ 柳 谷 古 墳

1 位 置 と 立 地

柳谷古墳は岡山県津山市瓜生原736番地に位置する。

和気山より北に向かい樹枝状に派生するいくつもの尾根がある。それによって作り出された瓜生原の集落のある小平野部から、南東方向に深くのび植木の集落に至る大支谷と、南方向にのび柳谷池につきあたる小支谷との分岐点に位置する、北に派生した丘陵の東斜面に柳谷古墳は立地する。

本古墳は標高118m を測り、丘陵先端頂部で130m である。また、丘陵先端と平野部とが接する地点の標高が105m 程であり、本古墳との比高差は約13m を測る。

本古墳は浅く浸食された谷の斜面下位、むしろ谷底附近に立地するが、その位置は奥まった所ではなく、谷の入り口附近である。

2 調 査 の 経 過

(1) 調査に至る経過

隣接する崩レ塚遺跡（註１）で炭窯と考えられている窯状遺構３基が確認されており、それが従来、製鉄炉と共伴する例が知られている（註２）。 このことから、本古墳の位置する尾根にも製鉄関連遺構の存在する可能性があり、バックホーを借り上げ、５m 間隔で幅２m のトレンチによる確認調査を行った。その際、人頭大の円礫を掘り出したが、位置が谷底附近であり、墳丘の高まりも認められなかったため、古墳であるとは断定できなかった。その後、作業員による精査を行った結果、須恵器の出土が確認され、古墳であるとの判断が確定した。

（註１） 津山市教育委員会が1987年度に発掘調査を実施。1989年度に報告書刊行予定。
（註２） 例えば緑山遺跡（津山市綾部）など。中山俊紀『緑山遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告書第19集1986年。

(2) 調査経過

昭和62（1987）年８月13日、ほぼ10m ×10m の範囲の表土剝ぎをバックホーにより行った。

10月７日より崩レ塚遺跡の調査にとりかかっていたが、作業員の半分を柳谷古墳に投入し、10月９日より着手した。

10月９日、まず全体の清掃を行い、古墳であることの確認のため石室内の埋土の除去から開

始した。10月12日には石室中心から３方向へトレンチを入れ、掘り方・周溝を断面により確認した。石室内から遺物が多量に出土し始め、頭椎大刀把頭と鞘尾金具も出土した。10月13日からは作業員を更に半数に分離し、石室内掘り下げと同時に周溝と掘り方内埋土の除去にとりかかった。台風17号の影響などで作業休止も多かったものの、10月19日には石室内の遺物はほぼ出揃い、周溝も完掘し、掘り方もほぼ掘り上がった。10月20日に石室内の清掃及び遺物出土状況の実測を行い、10月21日に石室内の出土遺物の全てを取り上げた。10月22日には全体の写真撮影を行い、10月23日から地形測量に入った。地形測量の終了した10月27日から、南側部分に残った盛土除去と１段目の掘り方の掘り残し分の除去にかかり、同時に石室内のプラン及びエレベーションの実測を行った。10月31日には両者とも終了し、完掘の写真撮影を行い、一時柳谷古墳の調査を中断し、作業員はひとまず崩レ塚遺跡の調査に戻った。11月７日に調査を再開し、床礫の実測にかかり、10月９日に終了した。11月11日、12日とかけて、壁体石の除去及び墳丘断ち割りを行い、調査の全過程を終了した。

尚、その後、11月15日に津山市教育委員会の主催による、第６回・津山市文化財調査報告会において柳谷古墳の概要報告を行った。また、昭和63年１月10日には岡山大学で開催された考古学研究会1988年１月例会において「津山市柳谷古墳の調査一銀象嵌頭椎大刀把頭をめぐって」と題して概要報告を行った。更に、『考古学ジャーナル』1988年３月号に「速報　岡山県津山市柳谷古墳の調査」と題する小報文を掲載している。

3　調　査　体　制

発掘調査は津山市教育委員会が主体となり実施した。調査主体は下記の通りである。

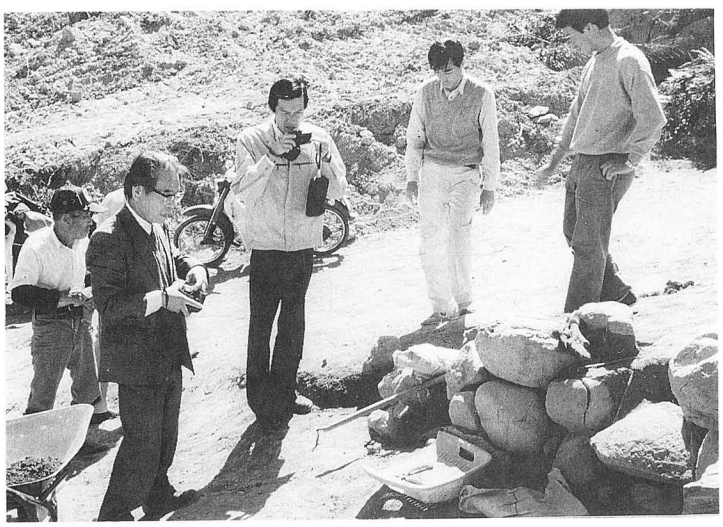
発掘調査主体	津山市教育委員会	教育長	福島祐一
		教育次長	藤田公男
		参事兼文化課長	内田康雄
		文化係長	籾山三千穂
		事務員	高田ゆかり
調査担当		埋蔵文化財発掘調査員	保田義治
整理担当		埋蔵文化財発掘調査員	保田義治
		整理員	杉山紀子・飯田和江
			野上恭子・光永純子
発掘作業員	赤坂寅夫・稲垣幹子・稲垣光男・小原正己・片山久子・神崎きみ江		
	衣笠宇多江・小林篤子・下山章子・藤嶋雪子・藤嶋律美・龍門安三		

また、発掘調査時の調査指導をはじめ、整理作業及び報告書作成にあたって、下記の方々及び関係諸機関から多大なる御指導・御教示を賜わった。記して厚く感謝の意を表したい。

穴沢咏光・伊藤寿夫・稲田孝司・井上　肇・井守徳男・植野浩三・大石佳弘・岡田　博・岡村　渉・樫村友延・鎌木義昌・河本　清・小林博昭・近藤義郎・鈴木隆夫・鈴木敏則・高瀬啓之介・土居　徹・中野　宥・新納　泉・西山要一・平井　勝・馬目順一・水内昌康・八木一郎・八木勝行・安川豊史・山口和夫　（50音順　敬称略）

奈良大学保存科学研究室・静岡市教育委員会・藤枝市郷土博物館・焼津市郷土博物館・兵庫県教育委員会・埼玉県教育委員会　（順不同）

第10図　遺物出土状況
左側壁上からみる。
10月12日、第Ⅱ～Ⅲブロックにかけて、須恵器が多量に出土し始める。



第11図　調査指導風景
10月13日、岡山大学近藤先生らより、発掘調査指導を賜わる。
写真左２人目から順に、岡山大学近藤義郎先生、同新納泉先生、古代吉備文化財センター河本清氏。

4 調 査 の 記 録

(1) 調査前の状況

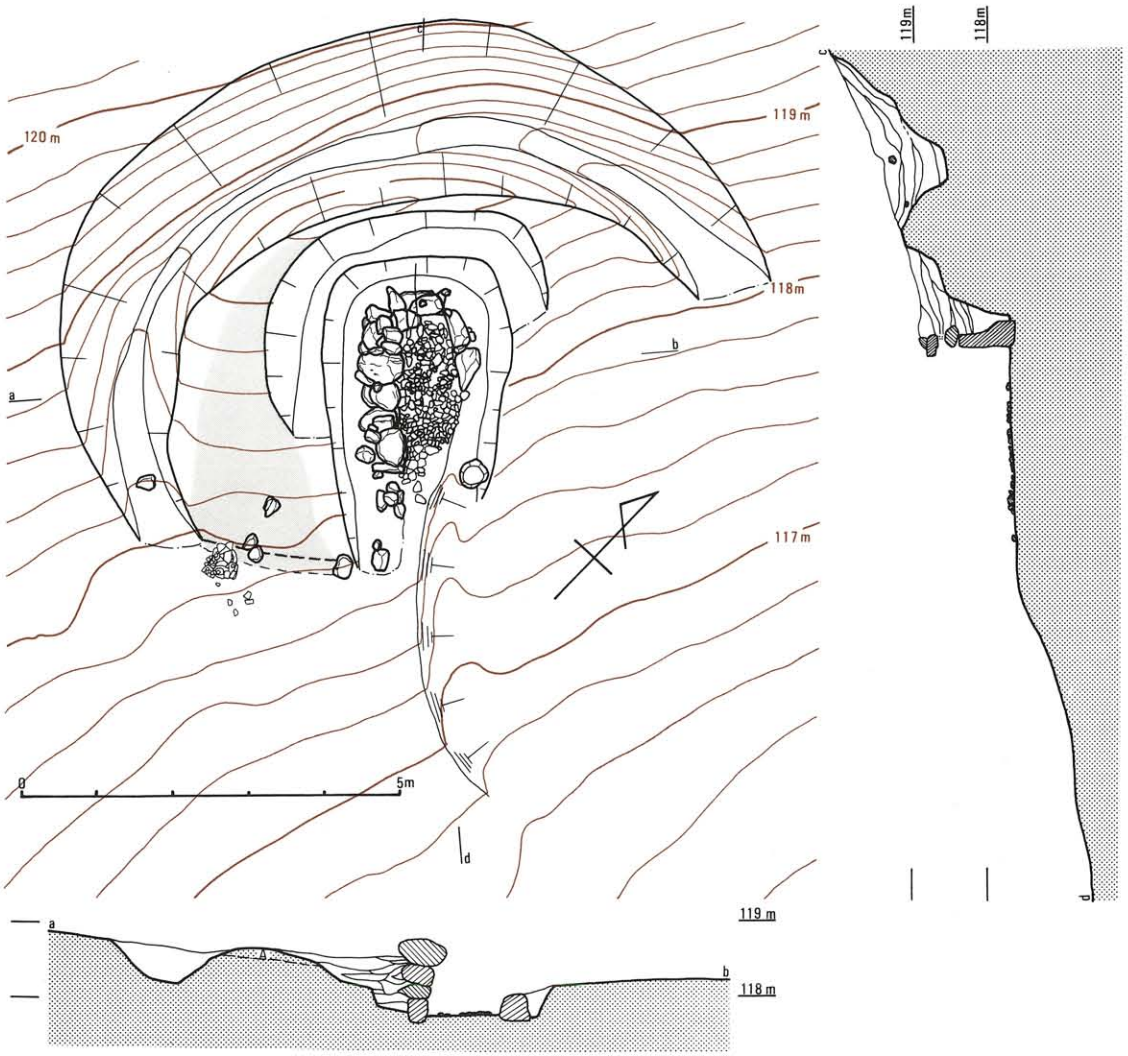
古墳の立地している面は傾斜度約34%の急斜面であった。表面にはほとんど凹凸は認められず、墳丘盛土の高まりも、周溝のおちこみも全く確認できなかった。かろうじて、石室左側壁最上位の石が数個、頭をのぞかせていた。

(2) 墳丘と周溝

古墳の形態と規模 (第12図)

山側に半円状に周溝をめぐらせた円墳である。

墳丘規模は、墳端、即ち周溝の墳丘側の下端(傾斜変換点)同志の距離では、南北方向(長



第12図 柳谷古墳全体図(S=1:100)

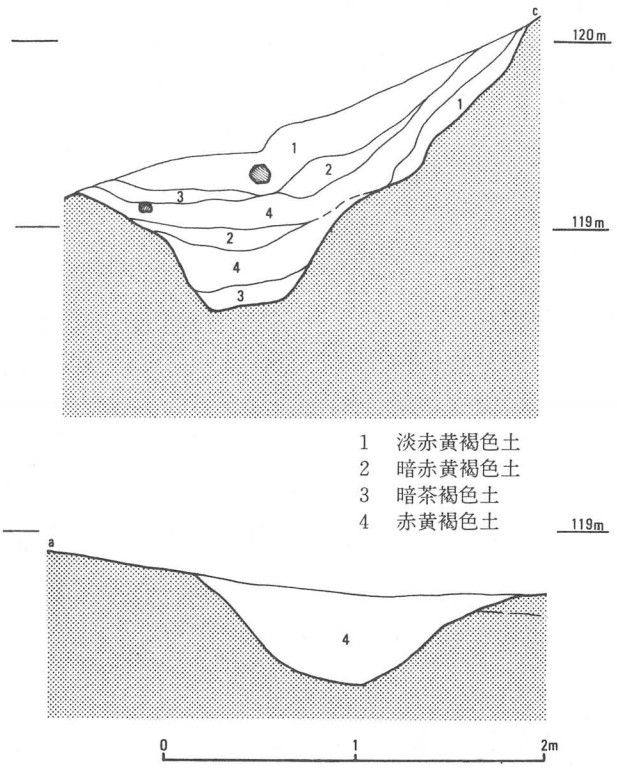
径）で7.5mを測る。また、谷側にはわずかに地山を整形したと思われる痕跡が認められ（第12図の破線）、東西方向（短径）で5.6mを測るものである。その結果、平面形は正円に近いものにはならず、むしろ東西方向に寸詰まりな楕円形を呈することになる。更に、周溝の墳丘側上端同志の距離（現状で認められる地山の上に盛土の行われた幅）は6.8mを測る。また、整形の及んでいる範囲（周溝外側上端同志の距離）は9.3×7.1mである。

墳丘　（第12図）

盛土はほとんど流出してしまっていたが、南東部の高所にわずかに遺存していた（第12図のトーン部分）。盛土を除去すると、その下層は黒褐色土（第12図の横断面図のA層）であり、墳丘築造前の旧表土腐植土層（ブラックバンド）であると考えられる。

周溝　（第12～13図）

周溝は山側にのみ認められた。現状での最大幅は2.4m、最深部で1.2mを有する。断面形は「V」字形に近い逆台形を呈し、その底部幅は45～50cmである。埋土はほとんどが山側からの流入である。また、北東部は後世にかなり削平を受けており、周溝は中途で解消してしまっていた。



1　淡赤黄褐色土
2　暗赤黄褐色土
3　暗茶褐色土
4　赤黄褐色土

第13図　周溝断面図（S＝1：40）

谷側の墳端　（第12図）

石室左側壁の石が入り口から西に向かい、更に外側に開いてゆく様に配された数個の礫が検出された。更にその礫に沿ってわずかに地山を整形した痕跡が認められ、これを墳端と考えた。そして、その礫は外護列石の残存したものである可能性が強い様に考えられる。北東部の墳端及びその痕跡は、前述の通り確認できなかった。

3．横穴式石室

現状　（第15図）

天井石は既に遺存していなかった。右側壁石もほとんどが流出してしまっていた上、重機による確認トレンチ掘削の結果、奥壁寄りの2個しか残存していなかった。左側壁は比較的遺存状況が良好であり、遺構確認時の数個の列石は左側壁石の最上位のものであった。しかし、外側からの土圧が著しく、上位の石がかなり内側に倒れこんできており、ややもちおくり状にな

ってしまっていた。

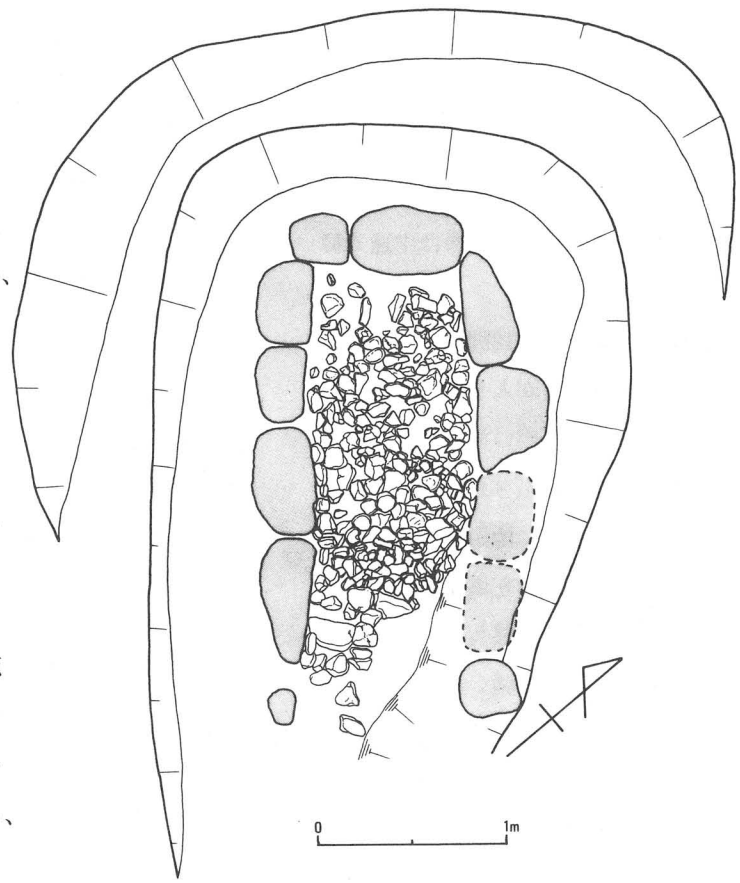
石室の規模と構造　（第15図）

無袖式の横穴式石室である。石室幅は奥壁で78cm、中程で86cm、入り口附近の推定で85cmを測る。石室長は、奥壁から、遺存している基底の左側壁石の先までが2.1m、最も手前の石まで、即ち復元石室長は3.3mである。石室高は天井石が既に遺存していないため不明である。但し、現状において遺存状態の良好なのは奥壁部であり、床面からの高さは1.1mを計る。当然、築造時の石室高はそれより高いものであったと考えられる。

基底の側壁石及び奥壁石は全て平坦面を石室内に向けて立て並べられていた。それ以上の石は、左側壁には2～3段、奥壁には3段遺存していたが、大型の河原石をむしろぞんざいに積み上げている状況であり、面を揃える配慮は施されていない様であった。裏込めにもほとんど石は利用されておらず、壁体一列のみの積み上げで、土によりつきかためている状況が観察された。

礫敷床　（第14図）

床面には角礫が敷かれていた。奥壁際5cm程の幅には遺存していなかったが、奥壁から1.7mを測る地点にまでは、若干の礫の大小、粗密の差こそあれ、拳大の角礫がほぼ一面に敷かれていた。礫敷は一枚のみであり、その下位はすぐ地山となり、何ら遺構・遺物等は検出できなかった。



第14図　石室床礫平面図（S＝1：40）

閉塞施設　（第14図）

奥壁から1.7～2.4mの範囲に敷かれている礫は、それまでの床礫とは一種趣を異にするものである。即ち、比較的大きめの礫であり、石室内側に面を向けて配されたと思われる様な小児頭大の石もある。また、中軸より左側に集中しており、右側には遺存しておらず、後述するが鉄製鞘尾金具も出土しており、本来から置かれていなかったものと考

えられる。更に、奥壁から1.7mを測る地点で、拳大の角礫があたかも一線を引くが如くとだえてしまっている状況が看取される。これらのことから、この部分が閉塞施設の残存部である可能性が高い。

石室の主軸及び開口方向　（第15図）

石室の主軸はN—47°—Eの方向を指し、南東方向に開口している。等高線走向に対してほぼ直行しているが、やや谷口方向に振っている。

掘り方　（第15図）

2段掘りの掘り方を有する。幅3.8mの隅丸長方形で、山側の最深部で40cm程度掘り下げて、平坦面を作出している。これが1段目の掘り方である。更にその平坦面を幅2.4mの隅丸長方形に、最深部で約80cm掘り下げを行い、2段目の掘り方としている。基底に石を据える際に、更にその部分のみを掘り下げた痕跡が認められた。奥壁で約5cm、側壁は手前になる程深く、最も手前の側壁石で約10cmを測る。

掘り方内埋土は、赤黄褐色土（1）と炭化粒を含む暗茶褐色土（2）の互層になっている状況が看取された。順次裏込めとして掘り方内を土によりつき固めながら石室を構築し、連続してその上位に盛土を盛ったのであろうことが想定される。

埋葬主体　（第16図）

埋葬主体を積極的に示す証拠は認められなかった。石室内埋土は、後世の流入土のほぼ単層であり、また遺物が出土し始めた面において木棺痕跡等を精査したが、全く認められなかった。更に、鉄釘等も出土していない。

しかし、後述する通り石室内の出土遺物が右側壁側に偏在しており、左側壁側の50×150cmの範囲から全く遺物が出土していない。このことから、消極的根拠ではあるが、埋葬主体はこの位置にあったものと推定される。但し、これも後述するが、この埋葬主体も追葬時のものであり、初葬時の位置はやはり不明である。

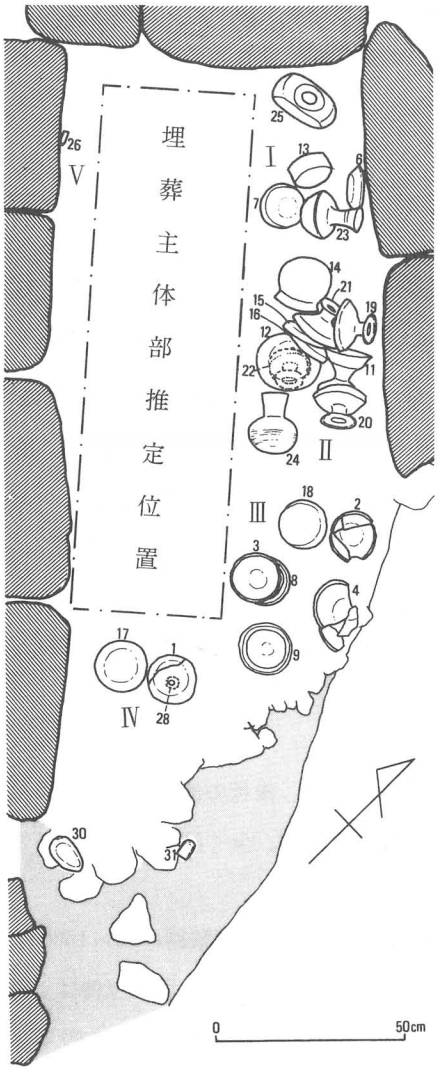
4．遺物出土状況

遺物の出土場所には、石室内、閉塞部、墳裾部があり、さらに出土地不詳のものがある。

石室内　（第16図）

石室内からは須恵器24（杯蓋5・杯身5・有蓋高杯蓋4・有蓋高杯4・長頸壺2・堤瓶1・𤭯1・盌1・大型椀1）、土師器1（甕1）、銀環1、鉄鏃1の計27が出土している。確認調査の際のトレンチにより、他に数個体分の須恵器が出土していたが、その後盗難にあって紛失してしまっている。

遺物はほとんど右側壁寄りに集められていた。その集中箇所も大きく5箇所認められた。まず、最も奥壁寄りの右側壁石左側部分（第Ⅰブロック）、第2右側壁石左側の部分（第Ⅱブロック）、第3右側壁のあったと推定される左側部分（第Ⅲブロック）、第4左側壁石の右側部分で、



第16図　石室内遺物出土状況図（S＝1：20）

閉塞施設との境界部分（第Ⅳブロック）、最も奥壁寄りの左側壁石の右側部分（第Ⅴブロック）である。

第Ⅰブロックの特徴は、堤瓶25が奥壁石に、杯身6が石側壁石にもたれかかって出土していることである。集中度はさ程密ではない。

第Ⅱブロックの特徴は、まず集中度が高いことである。有蓋高杯は全てこの区からの出土であり、鴟11、土師器甕14、大型椀12等も検出されている。更に、その出土状況は特筆すべきものである。鴟11の胴部は有蓋高杯20の杯部の中に入りこんでおり、有蓋高杯21の脚が19の杯部の中に入りこみ、それに対応する有蓋高杯蓋15と16が21にのせられていたかの様な状況を呈していた。また、大型椀12が伏せられ、その下には有蓋高杯22が転倒していた。

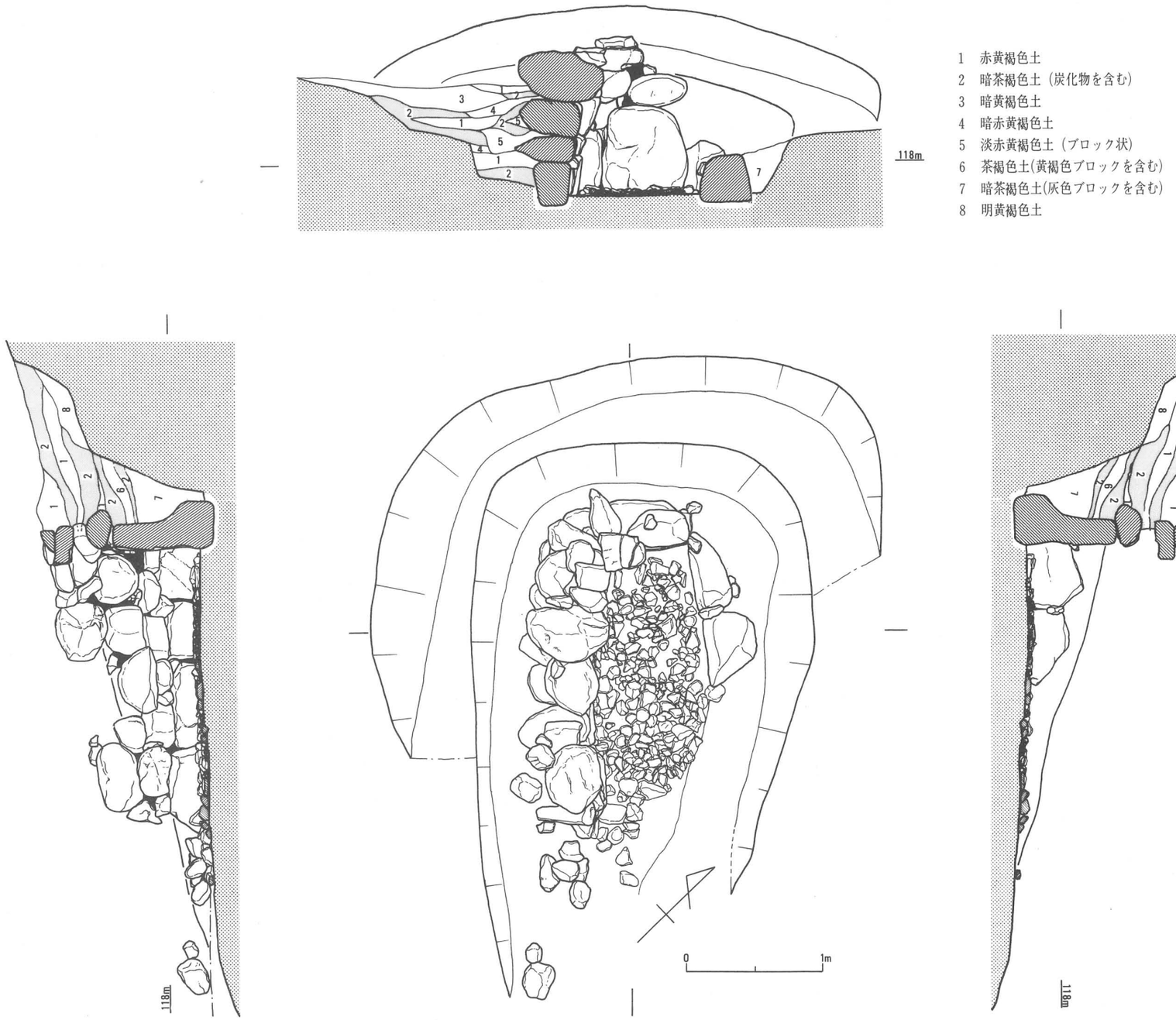
第Ⅲブロックには、杯身・杯蓋が散在する。それもセットで出土しているものがあることは注目されるものである。杯蓋3に対応する杯身8は重なって出土し、杯蓋4に対応する杯身9は同一ブロックでさ程離れてはいない。いずれも内面を上に向けていること等から、やはり厳密な意味においては現位置を保っているものではない様に思われる。

第Ⅳブロックは蓋が2つ伏せて並んで出土した。杯蓋1は第Ⅰブロックの杯身6とセットになり、蓋17は第Ⅱブロックの有蓋高杯21に対応するものである。両者とも床礫に接しておらず2～3㎝程度浮いており、その内部には土が充塡されていた。更に、杯蓋1の下から銀環28が出土しているが、これも床礫面よりも浮いていた。この様に、蓋杯を2つ伏せて並べる風習は、木棺直葬の埋葬主体における「枕」に相当するものと共通しており、注目されるものである。

第Ⅴブロックからは鉄鏃26が1点のみ出土している。これは床礫面から10㎝程浮いた状態であり、ほぼ左側壁石に接し、切っ先を奥壁方向に向けていた。

閉塞部　（第16図）

頭椎大刀把頭30と鞘尾金具31が出土している。頭椎大刀把頭30は、残存している閉塞石よりやや浮いた状態で出土しており、頭頂部を上に向けていた。鞘尾金具31は、閉塞石の遺存していない部分から出土している。レベルは礫よりも低くなり、この部分には本来閉塞石は無かっ



1　赤黄褐色土
2　暗茶褐色土（炭化物を含む）
3　暗黄褐色土
4　暗赤黄褐色土
5　淡赤黄褐色土（ブロック状）
6　茶褐色土(黄褐色ブロックを含む)
7　暗茶褐色土(灰色ブロックを含む)
8　明黄褐色土

第15図　石室実側図（S＝1：40）

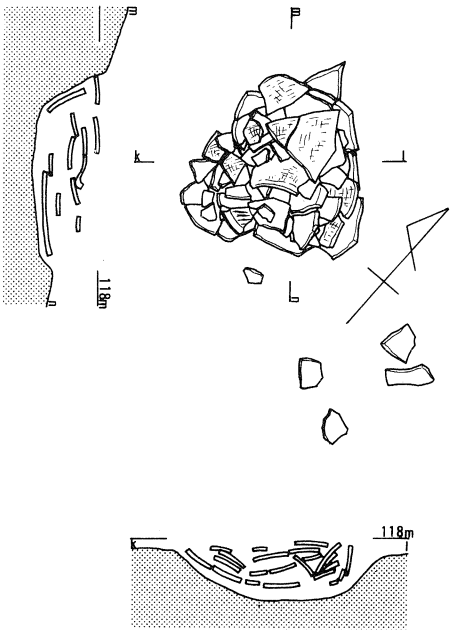
たものと推定される。

墳裾部　(第17図)

山側を半円状にめぐった周溝が、谷奥側（南西部）で解消される。その附近より、わずかに地山整形の痕跡が確認されたが、周溝と地山整形の接点附近から、須恵器大甕が1個体分出土した。遺構検出時に多く採取した須恵器片がこれである。

底部片は、わずかに掘り窪められたその場に、据えられた状態で出土していた。胴部片と口縁部片はその中におちこみ、一部は外にまで流出していた。

底部の中央には破片がなく、割れた線はそれを基点に放射状にのびていた。このことから、底部を穿孔し供献したものと考えられる。



第17図　墳裾部遺物出土状況図（S＝1：20）

出土地不詳

いわゆる「遊離」遺物である。鉄鏃27が1点、周辺から出土しているが、本来、石室内に副葬されていたものと思われる。また、須恵器大甕破片多数と、杯身片、杯蓋片が表採されたが、いずれも帰属がはっきりした。杯身片は杯身10に、杯蓋片は杯蓋5と接合しており、出土状況実測前に取り上げてしまったものであるが、いずれも石室内第Ⅲブロックから出土している。

(5)　出土遺物

杯蓋　(第18図　1～5)

5を除き全て完形品である。形態は丸味をもち、端部は丸くおわる。口径は平均13.2cm、器高は3が4.0cm、5が4.7cmであるが、平均で4.4cmである。淡青灰色を呈し、胎土には白色の砂粒を含む。焼成はいずれも良好である。調整は、外面天井部4分の1以外は全てヨコナデであり、2・4・5等の様に、稜をなすものも認められる。外面天井部4分の1は1を除き、ヘラ状工具による不定方向の調整が認められた。1のみ回転ヘラケズリである。

杯身　(第18図　6～10)

これらも10を除き全て完形品である。胴部から底部にかけては丸味をもち、受け部の立ち上がりはかなり短かく内傾している。内面の杯部と立ち上がり部の境界には明瞭な線をもつ。口径は平均11.9cm、最大径は平均13.9cmを測り、器高は平均4.4cmである。青灰色を呈し、焼成はいずれも良好で、胎土には白色砂粒を含む。調整は、外面底部3分の1から4分の1にかけて以外は強いヨコナデで、稜を形成するものもある。底部はいずれも不定方向のヘラ状工具による調整が認められる。

杯蓋1と杯身6、杯蓋2と杯身7、杯蓋3と杯身8、杯蓋4と杯身9がそれぞれセットとなり、杯蓋5及び杯身10のそれぞれに対応する杯身及び杯蓋は不明である。

甕　（第18図　11）

完形品である。外面は乳青灰色を呈し、焼成はやや良好である。口径は12.4cm、胴部最大径が10.3cm、器高が15.0cmを測る。頸部の最も細くなった部分は径3.8cmであり、頸部長は7.5cmであった。頸部中位に1条、胴部最大径やや上位に1条、凹線がめぐる。最大径部以下は回転ヘラケズリ調整であり、ロクロの回転は右まわりである。それ以外の部分は丁寧なヨコナデである。胴部最大径に1箇所、やや上向きに、径1.6cmの穿孔がある。胎土には白色砂粒が多く認められる。

大型椀　（第18図　12）

ほぼ完形品である。口径は18.1cm、器高は6.5cmを測る。黄褐色を呈し、外面胴部下位に黒斑状の焼けむらがあることから、当初は土師器と思われたが、生焼けの須恵器であることが器壁の硬さ等から判明した。全面にわたってヨコナデ調整であり、胎土には長石粒の多さがめだっている。別の器種名も考えられようが、ここでは「大型椀」として取り扱った。

盌　（第18図　13）

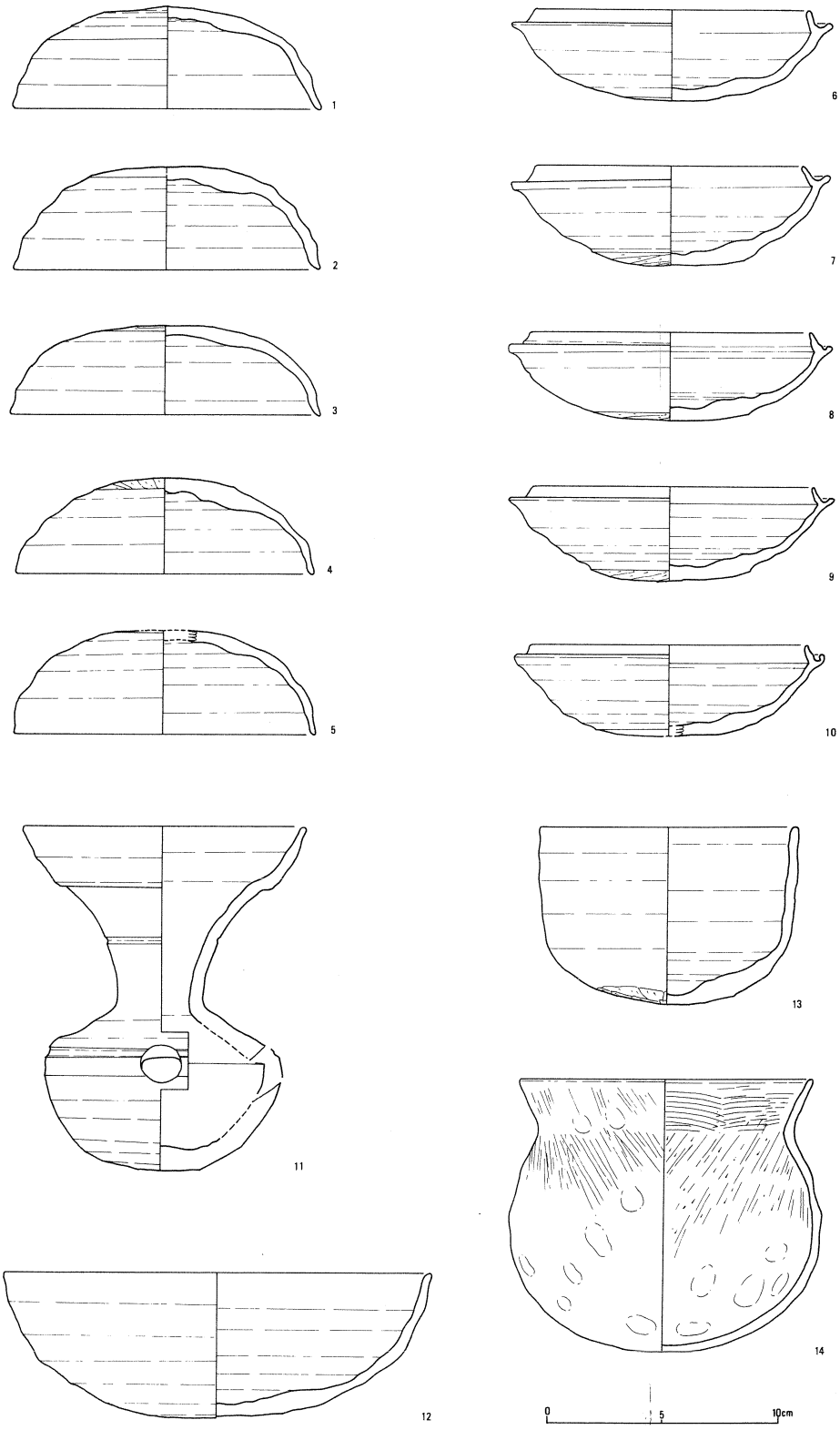
口径11.0～11.5cm、器高7.9cmの完形品である。色調は甕11と同じく乳青灰色を呈し、焼成はやや良好である。器高の3分の1程度の底部は丸味を帯び、口縁部に向かってまっすぐに立ち上がり、端部を丸く仕上げている。口縁部に一箇所「注口」を想定させる開口部分があるが、整形時のミスによるものと思われる。器高の3分の1程度の底部は不定方向のヘラケズリによる調整であり、それ以外の部分は全面ヨコナデ仕上げである。胎土には白色砂粒を多く含む。

甕　（第18図　14）

柳谷古墳出土遺物の中では唯一の土師器である。胴部は球状を呈し、ゆるやかに外反する口縁部をもち、端部は丸く仕上げている。口径は12.7cm、器高は11.9cm、胴部最大径は13.5cmを測る。色調は黄灰白色で、口縁部外面にはわずかに赤色顔料の痕跡が認められ、胴部最大径附近には黒斑がある。外面の調整は左上がりのハケ目調整であるが、胴部下半は磨滅が著るしく不明である。内面は、胴部で右上がりのヘラケズリで、口縁部はヨコ方向のハケ目調整である。胴部の調整の後、口縁部の調整にかかっており、その調整は反時計まわり（左まわり）に施している。全体にわたって指頭圧痕が認められるが、特にくびれ部外面、底部内外面にめだつ。胎土には長石粒を多く含む。

有蓋高杯蓋　（第19図　15～18）

全て完形品である。口径平均13.0cm、器高平均4.1cmで、杯蓋に較べると頂部にやや平坦面をもつ形態である。色調は青灰色を呈し、焼成はいずれも良好で、胎土には白色砂粒を多く含む。18を除く全てが、器高の4分の1以上の天井部に回転ヘラケズリ痕を残している。18は杯蓋と



第18図　出土遺物実測図〔１〕（S＝1：3）

同じく、ヘラ切り後ヘラ状工具による調整を行っている。天井部以外の調整は強いヨコナデであり、稜をもつものも見られる。ロクロ回転方向は、15・17が右回り、16が左回りである。

有蓋高杯　(第19図　19～22)

出土した高杯は全て有蓋高杯であり、有蓋高杯19・20・21・22のそれぞれに有蓋高杯蓋15・16・17・18が対応する。口径平均11.7cm、最大径平均13.7cm、器高は22のみが高く、他の平均値は8.1cmである。脚部径の平均は10.0cmを測る。色調は淡青灰色であり、焼成は良好であるが、ゆがみの著しいものが目立つ。胎土には白色砂粒を多く含むが、21には2cm大の小礫を混入している。杯部の形態は、底部に平坦面をもっており、立ち上がり部は短かくかなり内傾し、その内面の境界には稜線が入る。脚部はラッパ状にかなり急に開き、内面の接地点は端部より若干内側にある。端面は、接地面とほぼ垂直になる様に整形され、接地点と端部との内側の間には、強いヨコナデによる窪みが一周する。杯部の調整は、底部の平坦面には回転ヘラケズリが施され、それ以上及び内面は全て強いヨコナデで、稜を残すものも認められる。ロクロの回転方向は、20のみ左回りで、他は全て右回りである。脚部の調整は全面にわたってヨコナデであり、杯部との接合部外面附近は回転ヘラケズリ痕をナデ消している。

長頸壺　(第19図　23・24)

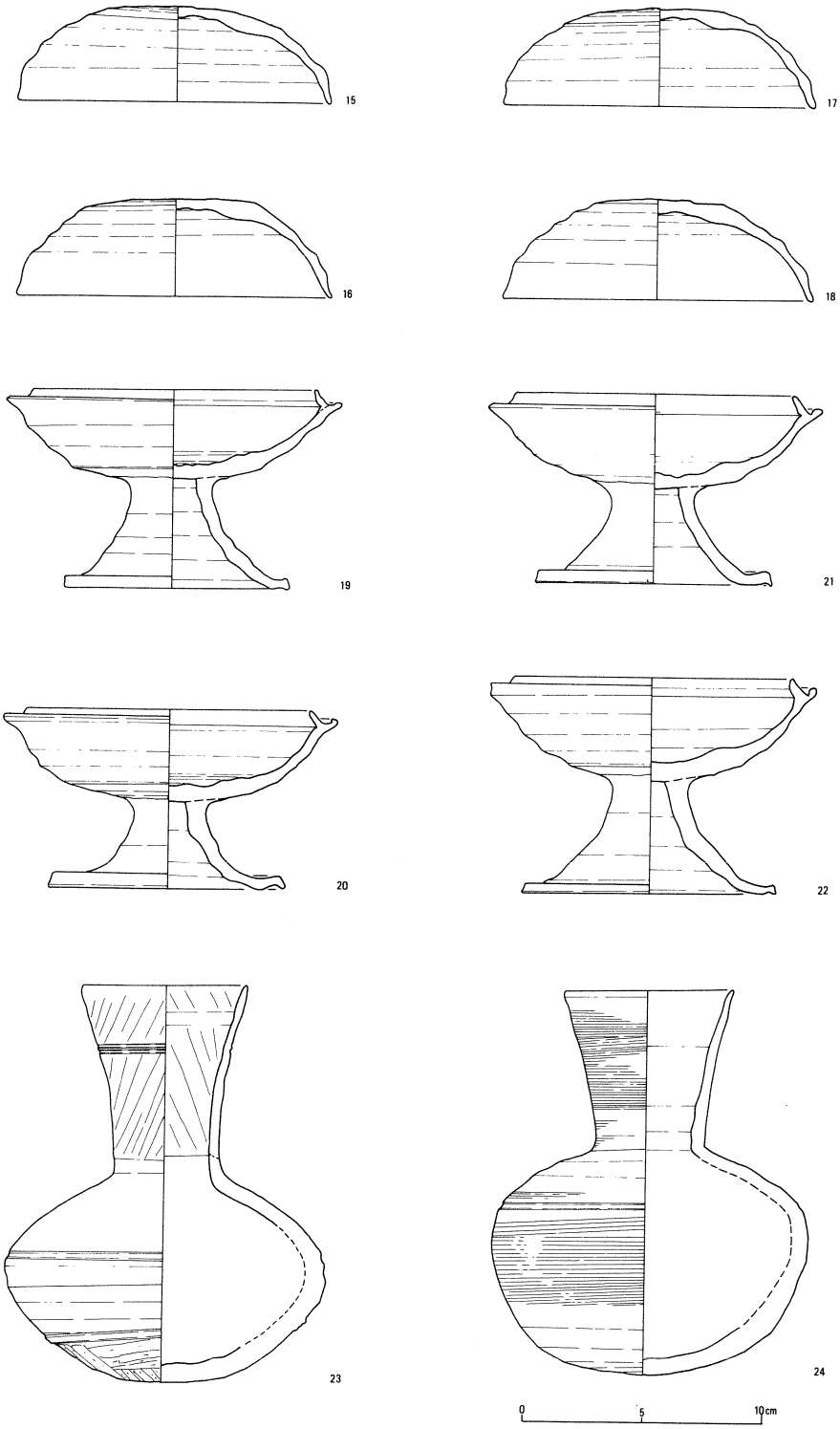
2点出土しており、いずれも完形品である。

23は口径7.0cm、最大径13.2cm、器高16.5cmを測る。胴部中位に最大径をもち、そろばん玉状に胴部が張る形態である。頸部中程やや上位に1条、最大径やや上位に1条、凹線をめぐらせている。色調は青灰色であったと思われるが、頸部から胴部上半にかけて自然釉がかかっており、黄褐色を呈している。頸部、胴部最大径以上、及び内面はヨコナデであり、最大径以下には回転ヘラケズリが施されている。ロクロの回転方向は右まわりである。底部は不定方向のヘラケズリであるが、丁度、重ね焼きの際の、下位の土器の粘土帯が焼着しており、回転ヘラケズリとの切り合い関係は不明である。胎土には白色砂が多く認められる。頸部は、胴部との接合の際に反時計回り（右回り）にしぼった時の痕跡が、内外面にゆるい稜となって観察された。

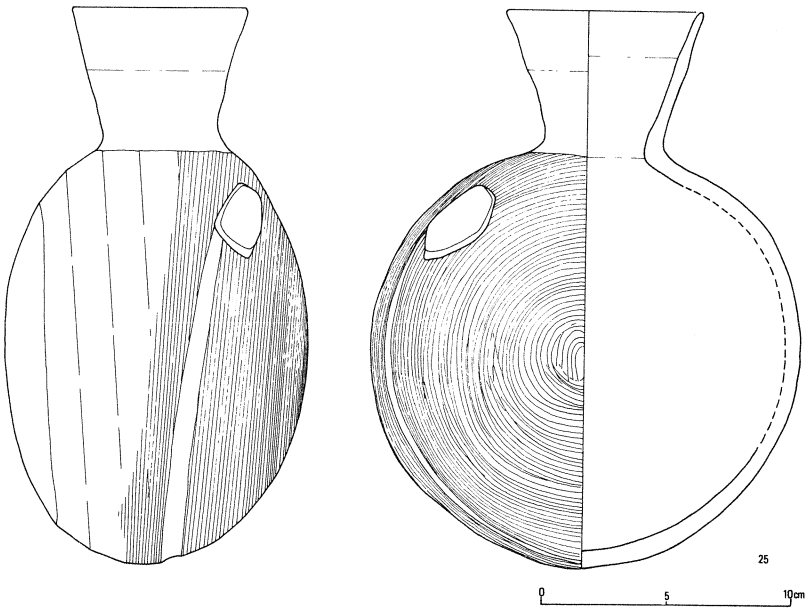
24は、口径7.0cm、最大径13.2cm、器高16.0cmを測る。色調は淡青灰色を呈し、焼成は良好で、胎土には白色砂粒を多く含む。最大径を胴部上位にもち、1条の凹線をめぐらせている。底部にはかなり広い平坦面をもつ点で、23とは形態上異なる。胴部中程やや下位より底部にかけて回転ヘラケズリ痕が認められた。ロクロ回転方向は右回りである。それ以上から最大径附近にかけてまで、カキ目調整が施されているが、これは、回転ヘラケズリの後に行われたものである。頸部の中位にもカキ目調整が施されているが、いずれも、口縁端部附近、肩部附近はヨコナデによりナデ消されている。内面はヨコナデ仕上げである。

提瓶　(第20図　25)

完形である。口径7.8cm、胴部最大径17.1cm、胴部最大幅12.1cmを計る。色調は青灰色を呈し



第19図　出土遺物実測図〔２〕（S＝1：3）



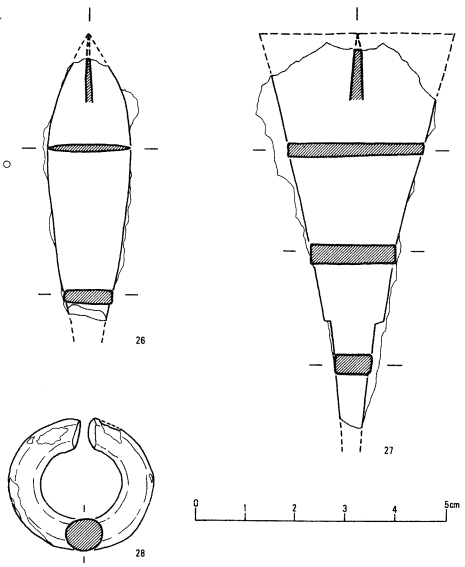
第20図　出土遺物実測図〔3〕（S＝1：3）

ているが、8分の1程度自然釉がかかっており、光択を帯びた緑色をしている。また、背面には酸化鉄が付着している。両肩正面寄りに2箇所、もはや痕跡となってしまった耳がついていた。口縁部及び内面の調整はヨコナデである。外面は、胴部正面が中央に中心をもつカキ目、背面は中央部2分の1がナデ仕上げであり、胴部最大径に至るまで回転ヘラケズリが認められる。堤瓶の整形過程を復元すると次の様になる。①　胴部背面の中央をロクロ台に置き、外面を中位（この時点で最大径をもつ）附近まで回転ヘラケズリで整形し、頂部（胴部正面）に径5.6cm程の穴を残す。この時のロクロ回転は右回りである。②　穴をふさぎ、ロクロ回転と同一方向（右回り）にカキ目調整を最大径をもつ位置まで施し、それと前後しロクロ台から胴部を切り放し、その部分をナデ仕上げする。③　横に張る扁平な球状を呈する最大径部の一箇所に、径5cm程の穴をあけ、そこに口縁部を取り付け、周辺をナデつける。④　正面両肩部に耳を付ける。

鉄鏃　（第21図　**26・27**）

26は石室内第Ⅴブロックから出土したものである。頭部は柳葉形を呈し、ゆるやかに茎部へ向かう。先端部と茎部を欠損しており、現長で5.2cm、頭部最大幅は1.6cm、その位置での厚味は1.5mm、より茎部に近い位置で3.0mmの厚味をもつ。

27は「遊離」遺物として取り上げたものである。関部から鋒に向かって直線的に幅を広げ、欠損して不明であるが鋒は直線ないしは外弯する刃部をもつものである。断面形は長方形を呈している。現長で7.6cm、最大幅が3.2cm、頭部の厚味は中位で2.5mm、



第21図　出土遺物実測図〔4〕（S＝2：3）

茎部に近い位置で3.5mm、茎部で4.0mmを測る。刃部が直線的であったとすれば、その推定幅は3.9mmを測る。

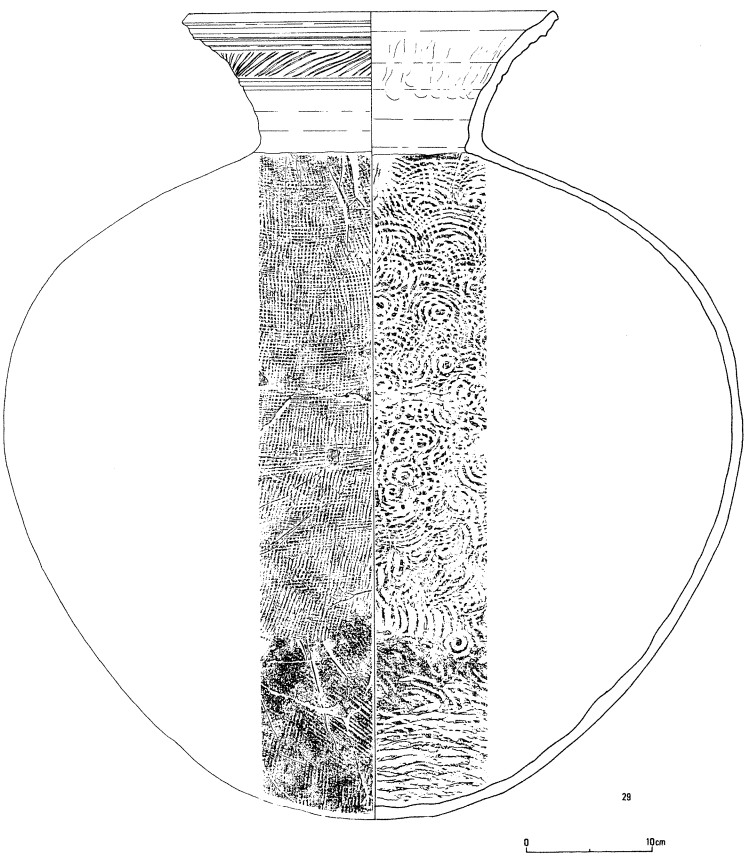
銀環　(第21図　28)

杯蓋1の下から出土したものである。銅地に銀張りしたもので、遺存状態は比較的良好で、はげ落ちて緑青をふいている部分は、全体表面積の2割に満たない。6～7mmの管を2.6×2.9cmの環状にしており、切目幅は約2mmである。装身具の出土品はこれ1点である。

須恵器大甕　(第22図　29)

墳裾部から出土した大甕である。口径29.9cm、胴部最大径58.3cm、器高64.0cmである。最大径は胴部中位、もしくはやや上位にもち、重心は比較的高い。口縁部はくびれ部から外反してゆくが、文様帯のある中位から更に著しく外反し端部に至る。端部には、その面を外側上方に向ける平坦面を有する。口縁部の形状は、まず端面直下には上下2条の稜により区切られた、やや肥厚した9mmの無文帯がめぐる。その下位には、一段段差をつけて文様帯が構成される。2.4cmの幅にヘラ描き斜線文が施され、その上位に1条、下位に2条の凹線文が、その文様帯を画している。

器面の調整は、口縁部内外面がヨコナデ、胴部外面がタテ方向の平行叩き、内面が同心円文の叩き目調整である。外面の平行叩きの単位は、6.2cmで21条であると観察された。ほぼ全面にわたってタテ方向であるが、胴下半に一部斜方向に施されている部分がある。また、胴部上半には叩き目調整後、ヨコ方向のハケ目状のカキ目調整が行われており、格子目状になっている。内面の同心円文の単位は、直径5.2cmの5重円のものであると観察された。同心円原体全体が器面に当たっているのは、胴部最大径附近及びその上位わずかと底部であり、その部分では円文が現出されて



第22図　出土遺物実測図〔5〕(S=1:6)

いるが、胴部最上位と下位附近においては円文とはならず、波状文となって現われている。また、胴部下半の、円文と波状文との境界附近では、叩き目文様をナデ消している。その部分は外面においては斜方向に叩き目が残される位置に一致する。

大甕の残存度は、口縁部で3分の2、胴部で2分の1であり、底部片はほとんど揃っていた。

頭椎大刀把頭　（第23図　30）

閉塞部より出土した。当所はサビが全面を被っており、銀象嵌は勿論、頭椎大刀把頭であることすら分からなかったものである。サビおとし作業により、本品が頭椎大刀把頭であり、銀象嵌が施されており、またX線写真撮影（第9図）により、それが全面にわたることが判明した。

長さ7.2cm、幅4.6cm、把元から頭頂部までの高さで4.2cmを測る、逆卵形、即ち「頭椎形」を呈している。把元部分は長さ4.3cm、幅2.9cmのやはり逆卵形を呈している。側体部やや下位中央には、それぞれ径約5mmの懸通孔があり、径約8mmの銅製鳩目金具が挿入されている。

本品は鉄製であり、全面に銀象嵌が施されていた。4箇所程、表面の剝落により銀象嵌の遺存していない部分もあるが、残存状況は極めて良好である。側体部（a、c）は、懸通孔を中心に11枚の花弁を周囲に配している。更に、その外周に2重同心円文をそれぞれ6箇所に亀甲形に配し、内部をaは右回り方向、cは左回り方向の旋毛状文により充塡している。頭頂部（b）は、まず中央に2重同心円文と9葉の花弁を施す。両側体部の亀甲文を利用し4つの区画に分割し、下2区には中心に花文を、上2区には2重同心円文を置き、前者は左回り、後者は右回りの旋毛状文で充塡する。上側体部（d）は、両側体の亀甲文、頭頂部の同心円文を利用し、亀甲文に仕上げ、更に内部を3区画に分割する。上半には渦巻文、左下には円文をおき、それぞれ旋毛状文で埋めている。下側体部（e）もやはり亀甲文に仕上げ、更に内部を2つに区画している。左側には左巻きの、右側には右巻きのやや大きめな渦巻文を配し、やはり旋毛状文で充塡している。把元部周辺には、袴状の斜行文様が施されている。

鞘尾金具　（第23図　31）

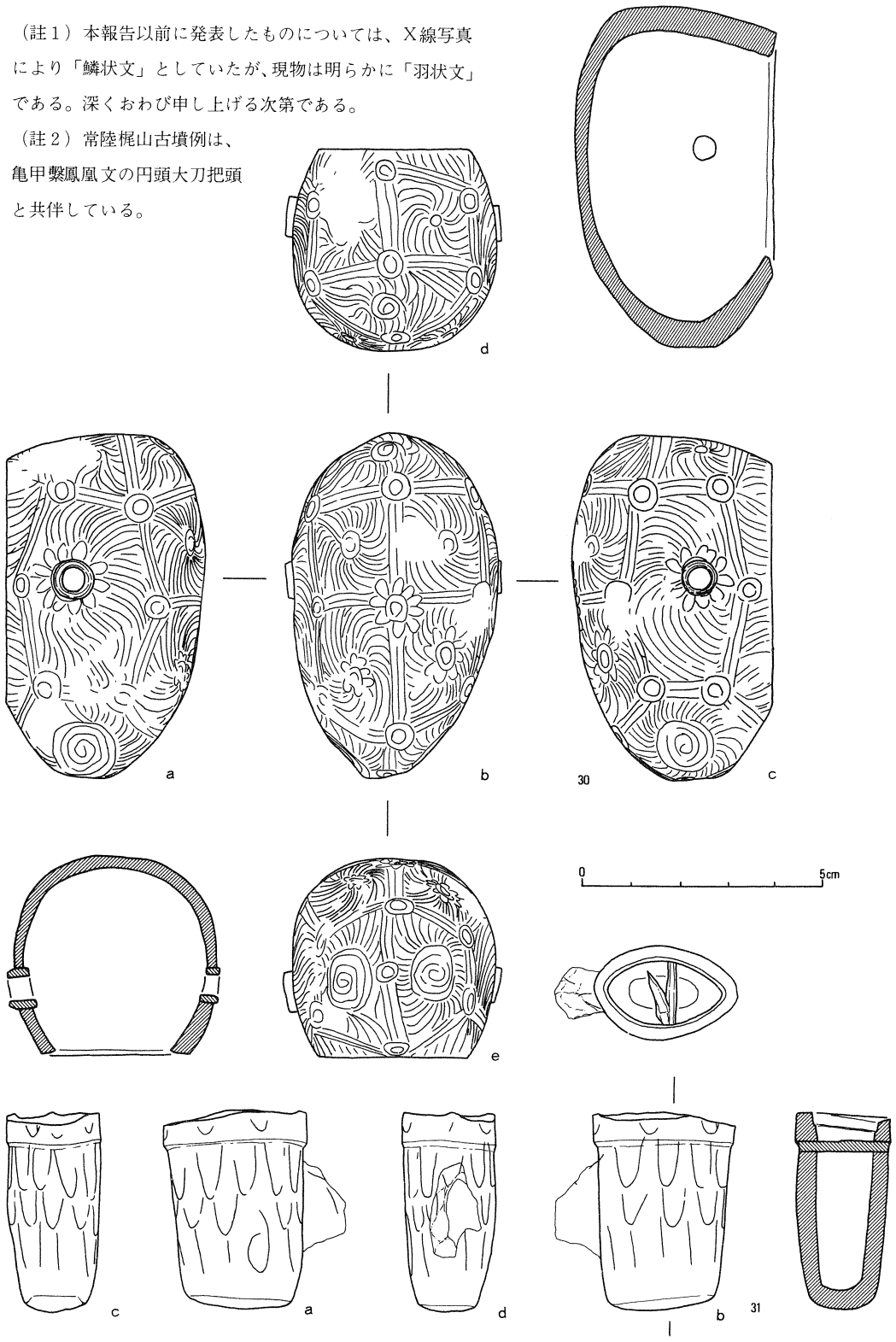
本品も頭椎大刀把頭と同様に、閉塞部から出土し、全面に銀象嵌の施された鉄製品である。

長さ4.2cm、幅3.0cm、厚さ2.0cmを測る。上位には幅7mmの1段他よりも厚くなった帯がめぐり、小山形の「U」字文が6箇所に配される。その境界部分の内部には、目釘が1本貫通している。更に下位には2段の「U」字文がめぐり、上位には10箇所、下位には9箇所認められる。更に下位には「I」字の棒状文が9箇所に施されている。また、「I」字棒状文より下位の、鞘尾頭頂部周辺には、象嵌は施されていなかった。

本品は、他の類例からみて「羽状文」（註1）と呼ばれる一群に属し、後述する様に、小刀用把頭として理解されている例も多いが、ここでは鞘尾金具としておきたい。また、両者の共伴する例は数例認められてはいるが（註2）、頭椎大刀把頭との共伴は、柳谷古墳例が初例である。

（註１）本報告以前に発表したものについては、Ｘ線写真により「鱗状文」としていたが、現物は明らかに「羽状文」である。深くおわび申し上げる次第である。

（註２）常陸梶山古墳例は、亀甲繋鳳凰文の円頭大刀把頭と共伴している。



第24図　出土遺物実測図〔７〕（Ｓ＝2：3）

第３表　出土遺物観察表

番号	器種	口径	最大径	器高	その他	色調	胎土	焼成	出土状況
1	杯蓋	13.2		4.5		淡青灰色	白色砂多 8㎜大の小礫	良好	Ⅳ 伏せられた状況
2	〃	13.3		4.4		〃	〃 〃 3㎜大の小砂礫	〃	Ⅲ 口縁上
3	〃	13.3～13.5		4.0		〃	〃 やや	〃	Ⅲ 〃 8に重なる
4	〃	12.7～12.9		4.2		〃	〃 〃	〃	Ⅲ 〃〃
5	〃	13.2		4.7		青灰色	〃 〃	〃	(Ⅲ)
6	杯身	11.9	14.0	4.6		〃	〃 多	〃	Ⅰ 口縁、側壁よりかかる
7	〃	11.5～12.1	13.9～14.4	4.6		〃	〃 〃	〃	Ⅰ 口縁 下 23の下
8	〃	11.9～12.1	13.6～14.0	4.0		〃	〃 やや 5㎜大の砂礫	〃	Ⅲ 口縁上
9	〃	11.6～12.0	13.8～14.1	5.0		淡青灰色	〃 〃	〃	Ⅲ 〃
10	〃	12.0	13.5	4.0		青灰色	〃 〃	〃	(Ⅲ)
11	𤭯	12.4	胴径 10.3	15.0	穿孔径 1.6	乳青灰色	〃 多	やや良好	Ⅱ 横転 20に乗った状況
12	大型椀	18.0～18.2		6.5		黄褐色	長石粒多	不良	Ⅱ 口縁下
13	盌	11.0～11.5		7.9		乳青灰色	白色砂多	やや良好	Ⅰ 〃
14	甕	12.7	13.5	11.9		黄灰白色	長石粒多	良好	Ⅱ 横転
15	有蓋高杯蓋	13.0		4.1		青灰色	白色砂多 3㎜大の小砂礫	〃	Ⅱ 〃 21に口縁上で乗った状況
16	〃	12.5～13.5		4.1		〃	〃 〃	〃	Ⅱ 〃 15に口縁上で重なった状況
17	〃	13.0		4.0		〃	〃 〃 2㎜大の小砂礫	〃	Ⅳ 伏せられた状況
18	〃	12.9		4.1		〃	〃 やや	〃	Ⅲ 〃
19	有蓋高杯	11.6～11.8	13.8	8.0～8.2	脚部径 10.7～10.8	〃	〃 〃 2㎜大の小砂礫	〃	Ⅱ 横転 脚やや上方
20	〃	11.3～12.2	13.5～14.2	7.3～7.8	9.9～10.0	淡青灰色	〃 多	〃	Ⅱ 〃
21	〃	11.2～11.5	13.7	7.8～8.0	9.8～9.9	青灰色	〃 〃 3～5㎜大の小砂礫	〃	Ⅱ 〃 脚 10杯内
22	〃	11.3～11.7	13.4	8.8～9.0	10.3～10.5	〃	〃 〃 2㎜大の小砂礫	〃	Ⅱ 口縁下 12をかぶった状況
23	長頸壺	7.0	13.2	16.5		〃	〃 〃 20㎜大の小礫	〃	Ⅰ 横転、口縁 やや上方
24	〃	7.0	13.2	16.0		淡青灰色	〃 〃	〃	Ⅱ 〃
25	堤瓶	7.8	17.1	22.5	胴部最大幅 12.1	青灰色	黒色砂粒多	〃	Ⅰ 奥壁よりかかる
26	鉄鏃	現長5.2　頭部幅1.6　厚さ1.5～3.0mm							Ⅴ 切先奥壁側、床礫上10cm
27	〃	現長7.6　頭部幅3.2　厚さ2.5～4.0mm							調査区内遊離
28	銀環	径2.6×2.9　管径６～７mm　切目幅２mm							Ⅳ 1の下 床礫上３cm
29	大甕	29.9	53.3	64.0		淡青灰色	砂粒少	良好	墳裾部一括、口縁は底部内におちこむ
30	頭椎把頭	長さ7.6×幅4.1×高さ4.1　　把元5.4							閉塞施設内、閉塞石上
31	鞘尾金具	長さ4.2×幅3.8×厚さ2.3							〃 閉塞石非遺存部

（ ）内はロクロ回転方向

残存度	残存状況	形態の特徴	手法の特徴	番号
完形	半分焼けむら	天井部丸く仕上げ、口縁端部丸く仕上げ	天井部回転ヘラケズリ（左）他ヨコナデ	1
ほぼ完形	やや自然釉	〃　〃	天井部ヘラ状工具ナデ、他強いヨコナデ（左）	2
〃	良好	〃　〃	〃　〃　（左）	3
〃	口縁部若干欠損	〃　〃	〃　〃	4
1／2残	天井部焼けむら	〃　〃	〃　〃	5
完形	良好	底部丸く仕上げ、立ち上がり短かく内傾	底部ヘラ状工具ナデ、他強いヨコナデ（左）	6
〃	ゆがみ大	〃　〃	〃　〃　（左）	7
〃	ゆがみ少、底部焼けむら	〃　〃	〃　〃	8
〃	良好	〃　〃	〃　〃	9
1／4残	〃	〃　〃	〃　〃	10
完形	口縁部やや欠損	くびれ細く、口縁径＝最大径、胴部重心やや上位	最大径以下回転ヘラケズリ（右）他ヨコナデ	11
〃	ややゆがみ	口縁径＝最大径、底部丸く仕上げ	ヨコナデ	12
〃	良好	直立する口縁、端部に注口状ひずみ	底部ヘラケズリ、他ヨコナデ	13
ほぼ完形	表面磨滅、胴中位黒斑	胴部丸く仕上げ、口縁部外反	口縁部ヨコ・胴部タテのハケ目、内面ヘラケズリ	14
完形	良好	天井部平坦面、口縁端部丸く仕上げ	天井部回転ヘラケズリ（右）他ヨコナデ	15
〃	ゆがみ大、半分自然釉	〃　〃	〃　（左）　〃	16
〃	良好	〃　〃	〃　（右）　〃	17
ほぼ完形	〃	〃　〃	天井部ヘラ状工具ナデ　〃	18
完形	脚部一部欠損、ゆがみ大	短脚無スカシ、杯底部平坦面、立ち上がり短かく内傾	杯底部回転ヘラケズリ（右）他ヨコナデ	19
〃	杯部ゆがみ大	〃　〃　〃	〃　（左）　〃	20
〃	〃	〃　〃　〃	〃　（右）　〃	21
ほぼ完形	脚部若干欠損	〃　〃　〃	〃　（右）　〃	22
完形	外面自然釉、底部重ね焼き痕	胴中位最大径、頸部長	底部ヘラケズリ、他ヨコナデ、頸部内面にしぼり痕（右）	23
〃	底部にやけむら	胴やや上位に最大径、頸部長	頸・胴部にカキ目　（右）	24
〃	正面自然釉、背面酸化鉄付着	胴部上位正面肩部に2箇所退化した耳状突起	正面カキ目、背面回転ヘラケズリ（右）後ナデ	25
頭部のみ	サビブクレ少	長茎鏃		26
頭部と茎一部	サビブクレ多	平根鏃		27
ほぼ完形	銀メッキ8割遺存	やや寸詰まりな楕円形		28
1／2残	底部完形	胴やや上位に最大径、口縁部外反し文様帯	内面同心円文叩き目、外面タテ方向叩き目	29
完形				30
〃				31

5 ま と め

(1) 柳 谷 古 墳 の 諸 問 題

柳谷古墳の立地の問題

柳谷古墳は、前述した通り、北に派生した丘陵東斜面の谷底附近に立地する。平野部との比高差は約13m を測る。単独墳であり、墓域の設定にあえてその地を選んでいる様である。同時期の後期古墳が多く立地する様な尾根の頂部及び先端部には、古墳は勿論、柳谷古墳と同時期の遺構(住居址や製鉄関連の遺構) は認められない。この場所にあえて選地したものと考えられる。この様な一種「特殊」とも見える現象はどの様に把えたら良いのであろうか。周辺の6世紀末から7世紀初頭にかけて築造された単独墳を例に考えてみたい。

柳谷古墳と距離にして最も近い位置にあるのが、クズレ塚古墳（註1）である。同じ和気山から北に派生する尾根の先端に立地し、平野部との比高差は約7ｍを測る。石室全長9ｍ以上の無袖式・横口積み横穴式石室を有し、内部には亀甲型陶棺1をもつ。東に開口し、正面の植木の谷を一望のもとに臨める位置にある。出土遺物は須恵器、土師器、装身具類（耳環など）の他、周溝内から鉄滓を1点出土している。

一貫西1号墳（註2）も陶棺を有する円墳である。南に派生する丘陵の先端部に立地し、平野部との比高差は約10m を測る。河原石を積み上げただけの無袖式横穴式石室をもち、開口方向は南である。石室内より2点の鉄滓の出土をみている。

津山市綾部の寺田古墳（註3）は、南西方向に派生した尾根の西谷斜面高位に立地する、径10m 程の円墳である。片袖式の横穴式石室で、内部に亀甲型陶棺1をもつ。平野部との比高差は約10m を測る。出土遺物は須恵器をはじめ、装身具類、及び鉄刀、刀子がある。

同じく綾部の緑山Ａ1号墳（註4）は、南に派生した尾根の先端部に立地する。直径8ｍ程の円墳で、横口積みの横穴式石室は無袖式であり、4.8×1.2m を測り、南へ開口する。平野部との比高差は約10m である。出土遺物は須恵器と鉄滓である。２本東の丘陵東斜面には、製鉄炉と炭窯が構築されており、「製鉄集団」との関連において興味深いものである。

津山市草加部の東蔵坊1号墳（註5）は、南に派生する尾根の西斜面高位に立地する円墳である。既設の道路によりほとんど破壊されていたので、石室規模等は不明な点が多い。鉄滓2点が周溝内から出土している。平野部との比高差は約16m を測る。

やや西に離れた津山市下高倉西に所在するビシャコ谷1号墳（註6）は、南東に派生する尾根の西斜面高位に立地する、径7ｍを測る円墳である。横穴式石室は無袖式で、床面幅約90cm、残存長約3.0m を測り、南へ開口し、平野部を見渡せる位置にある。その平野部との比高差は約15m を測る。出土遺物には須恵器、土師器を初め、鉄釘15本、鉄滓9点が出土している。

以上6古墳の立地は、尾根の先端部、もしくは斜面であっても高位部が多く、柳谷古墳のあり方とは異なっている。しかし、概して平野部との比高差が比較的小さいことが指摘できる様に思う。クズレ塚古墳の7mから、東蔵坊1号噴の16mまで、平均をすれば約13mであり、柳谷古墳のそれとほぼ一致する。但し、これはわずか7例においてのみ認められる「傾向」であり、今後より多くの資料による検証が必要であろう。

更に、柳谷古墳の立地する尾根についてみれば、その先端部はかなり急斜であり、頂部と平野部との比高差は約25mを測る。また、柳谷古墳も、谷底ではあるが、谷奥ではなく谷口に立地している。この様に、今後、古墳の立地する個々の尾根の形態等に細かく目を向けてゆく必要がある様に思われる。

柳谷古墳の築造時期

築造時期の問題に触れる前に、まず、埋葬主体と追葬の有無という問題を考えてみたい。

埋葬主体を積極的に示す資料は検出されていない。但し、消極的ながらも、出土遺物の偏在性、即ちほとんど全ての遺物が右側壁側（第Ⅰ～Ⅲブロック）に寄っており、左側壁側に無遺物の空間が存在する、という事実から、その位置に埋葬主体を設定することが可能であろう。更に、この埋葬主体は追葬時のものと考えられる。以下、その根拠を挙げておく。

まず最初に、遺物出土状況が初葬時の現位置を保っているというものではなく、むしろ後になってかき集められている状況を呈している、ということである。6の杯身は右側壁石にもたれかかり、第Ⅱブロックの2段重ねの有蓋高杯（19と21）の上に、対応する蓋15と16が重ねられ転倒した状況を呈し、大型椀12の下に、むしろかぶさった状態で有蓋高杯22が出土している事実は、片付けられたことを示しているものと考えられる。

次に、第Ⅳブロックの1の杯蓋の下から出土した銀環である。第Ⅰ～Ⅱブロックの状況は、ほとんどが転倒し、床礫との関係を明瞭に示す材料が得られなかったが、第Ⅱブロックの2つの伏せられた杯蓋は、いずれも明らかに床礫より2～3cm程浮いた状態であり、後に移動させられたものであることを物語った上、更にその中より銀環が出土しているのである。やや時期の遡る5世紀から6世紀初頭にかけての木棺直葬墳には、「枕」として2つの蓋杯を並べて伏せて置く例が認められるが、この2つの杯蓋がそうであるかどうかはともかくとしても、この事実が明らかに追葬を指摘できるものと思われる。

よって、遺物の偏在性により認められた埋葬主体部推定位置は追葬時のものであり、初葬時の埋葬主体部の位置は不明である。更に、頭椎大刀把頭・鞘尾金具をはじめ、銀環及び須恵器・土師器の類の副葬品は、追葬時に「かき寄せられ」「かき集められ」「かき出され」た初葬時のものと理解できる。

以上のことから、柳谷古墳の出土須恵器はいずれも初葬時のものである可能性が強いと考え

られる。更には、これらの須恵器の間に型式的差異は認められない。出土状況では追葬時の副葬品は認められなかったのであるが、仮にあったとしても、同一型式内に納まってしまうものと理解できる。よって、これらの須恵器により古墳築造時期の推定を行うことができると考えられる。

杯蓋は口径平均13.2cm、器高平均4.4cmであり、形態は天井部に平坦面をもたず丸味をもって仕上げられ、全面ほとんどヨコナデで、天井部はヘラ状工具による調整がみられる。

杯身は口径平均11.9cm、器高平均4.4cm、最大径平均13.9cmであり、形態はかなり内傾した受部との比高差の小さい、短かい立ちあがりを有し、全体に丸味を帯びている。調整は杯蓋と同じく、底部にヘラ状工具による調整が認められる。

有蓋高杯は口径平均11.6cm、器高平均8.0cm、最大径平均13.7cmを測る、短脚無スカシである。杯底部は平坦になっており、回転ヘラケズリが認められる。

対応する蓋は口径平均13.0cm、器高平均4.1cmであり、天井部につまみを持たず、平坦に仕上げられており、回転ヘラケズリが認められる。

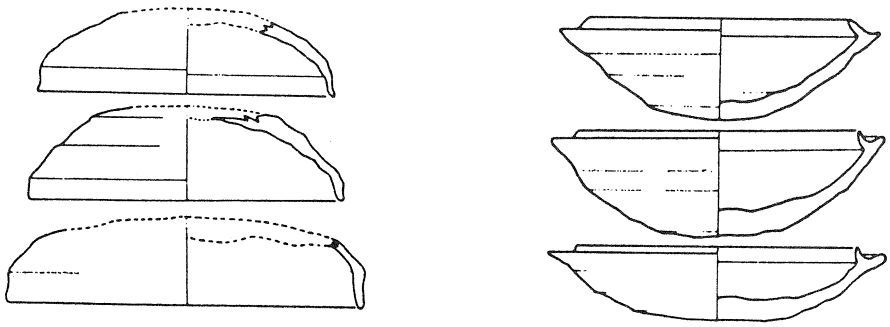
以上の様な特徴の須恵器を岡山県内の各窯址の出土資料と比較してみたい。

二子御堂奥古窯址（第25図　註７）の第Ⅰ期の杯身Ａの特徴は、「一般にヘラ削りがにぶく、調整痕として明瞭な稜をとどめているものは少な」く、「口径は10～12cmで、深さは３～４cm程度」であるとしている。また蓋杯Ａは「口縁部はわずかに外へひらき、端部は丸味をもつ。天井部と口縁部とをわける凹線のあるものがみられる」。

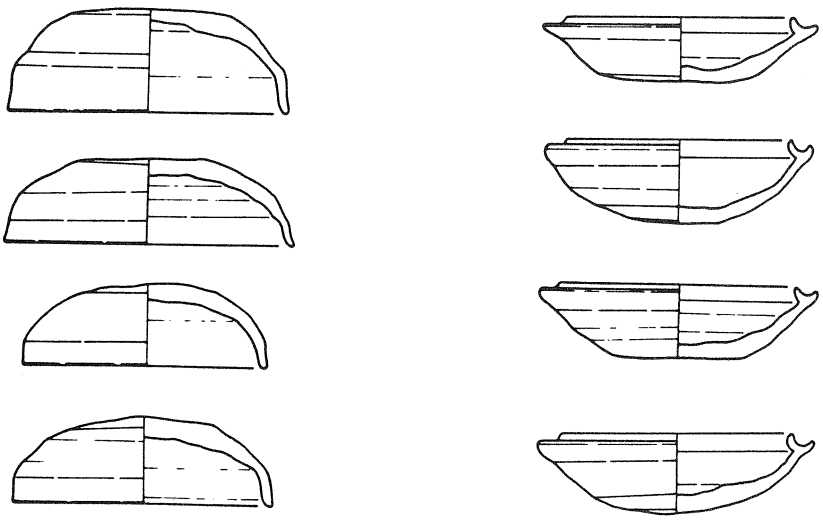
寒風古窯址群（第26図　註８）の杯蓋Ａ類は「口径10～11cm、器高３～４cmを基準と」し、「天井部は丸味がなく、口縁端部が内湾又は垂直に下り、端部を丸くおさめている」もので、杯身Ａ類は「口径９cm、受部径11cm、器高３cm前後を標準と」し、「受部の立ち上がりは３～５cm程と短い」ものとしている。

寒田５号窯址（第27図　註９）Ａ類の杯蓋は、口径12cm前後、高さ4.0cm前後で「口縁部はわずかに外傾して端部にほとんどくせをもたず」「整形は天井部をのぞきヨコナデ仕上げで天井部はヘラオコシののちにヘラケズリ、ナデなどが行われているが、ヘラオコシ後の調整は全体に雑である」ものとしている。杯身は最大径12cm前後、高さ４cm前後で「底部をのぞきいずれもヨコナデで調整されており、底部はヘラケズリ、ヘラケズリ後押圧ナデなどで調整」したものとしている。それぞれの併行関係として「Ａ類は亀ヶ原１式（註10―筆者）、二子古窯址３・５号窯のＡ（中略）に類似し、Ｂ類（註11―筆者）は寒風１―Ⅰ号窯Ａ類の新しい要素をもつものと類似する」としている。

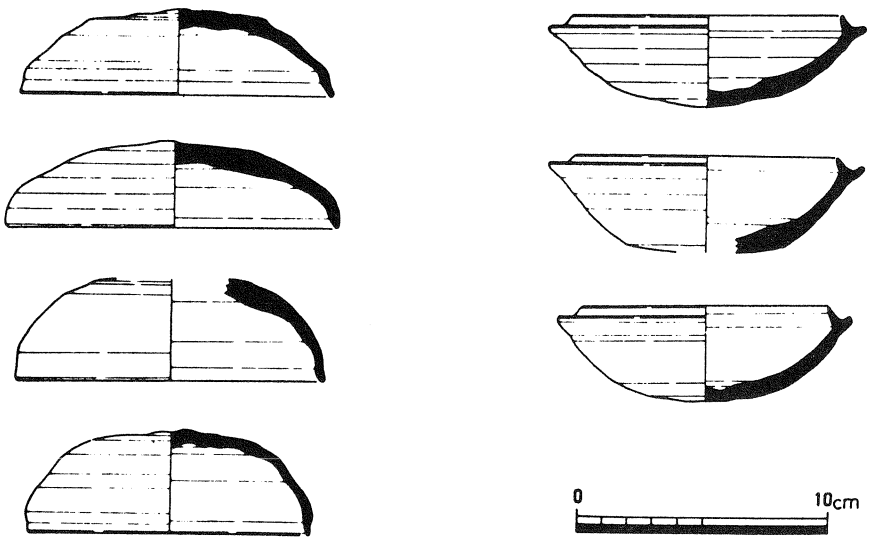
以上３例の最古型式のものを挙げたが、柳谷古墳出土の須恵器は、いずれのものよりもやや、古相であることを認めることができる。即ち、形態が未だ丸味をもっており、天井部もしくは底部のヘラオコシ後の調整の粗雑さから、かなり寒田５号窯址Ａ類に近いものの、口径、器高



第25図　二子御堂奥古窯址　第Ⅰ期須恵器（S＝1：3）（註7）



第26図　寒風古窯址群　A類須恵器（S＝1：3）（註8）



第27図　寒田古窯址　A類須恵器（S＝1：3）（註9）

等がまだ充分に小型化していない状況が指摘でき、変化の経緯が小型化の流れの中で把えられることから、やや古相であるものと考える。

陶邑古窯址群の田辺編年（註12）に対照させてみれば、ＴＫ43からＴＫ209の中間型式として把えられる様に思われる。このことは、寒田５号窯址のＡ類が陶邑古窯址の「Ⅱ期末のＴＫ209型式に併行し」（註13）ていることからも矛盾しないものと考える。

絶対年代の推定は困難であるが、寒風古窯址群のＡ類を７世紀初頭から前半に比定し（註14)、寒田５号窯址では熱残留磁化による年代推定が行われており（註15)、７世紀中頃という測定結果を出していることから、柳谷古墳の須恵器の年代を大きく６世紀末から７世紀初頭にかけて考えて良い様に思う。

よって、柳谷古墳の築造時期も大きく６世紀末から７世紀初頭にかけてと考えられる。

陶棺と鉄滓

美作の後期古墳には陶棺をもつものが多い。実際、津山中核工業団地内の３基の後期古墳のうち、２基は亀甲型陶棺をもっており、柳谷古墳１基のみ陶棺をもたない。まず、陶棺について若干触れておく。

陶棺の研究は比較的古くから行われてきたが（註16)、最近のものとしては、杉山尚人氏の、「陶棺の研究」（註17）がある。氏は陶棺をＡ～Ｅ型式に形態分類し、糠山編年（註18）による陶棺の編年を行っている。氏は、Ａ型式の陶棺の発祥を熊山地域とし、「その伝播が同心円状に広がってゆくのではなく、何らかの理由で結びついた吉井川又はその支流沿いのいくつかの造墓主体の間に共有される棺形態」として把えている。また、鉄生産との関連を指摘し、「畿内―熊山地域―美作の関係」を、その供献鉄滓との関連から「吉井川及びその支流の要所をおさえ、鉄を豊富に産する地域を領域的に掌握しようとする畿内勢力の意図」と把え、個々の小首長層にとっては、陶棺に葬られる意味を「鉄に関する生産・集積・運輸等において主導的な役割を果たすことによって、新しい古墳秩序の中で確固とした位置・共同体支配者としての権威を確保すること」と結論づけている。

陶棺葬と鉄生産との関連が指摘されたが、鉄滓供献古墳についてはどうであろうか。

現在岡山県内で知られている鉄滓供献古墳は48基確認されており（註19)、その８割以上は県北に分布している。津山市内には22基が知られており、時期は押入西１号墳（註20）の５世紀中葉から、７世紀初頭にまでわたる。津山中核工業団地内の３基のうち、鉄滓をもたないのは柳谷古墳のみであり、立地の節で触れた古墳のうちでも、寺田古墳以外は多かれ少なかれいずれも鉄滓を供献している。

それを裏付ける様に、津山市金井・瓜生原地内にまたがる津山中核工業団地内には、製鉄炉１をはじめ、炭窯と考えられている窯状遺構７基の他、各所に鉄滓の集中地点が認められ、製

鉄の操業を思わせる。また、津山市綾部・草加部地内にも、緑山遺跡に代表される様な製鉄遺跡の存在が知られる。

これらの事実から、鉄滓供献祭祀と陶棺葬とは、杉山氏の言及された通り何らかの不可分な関係がある様に思われる。

柳谷古墳は、操り返す様であるが陶棺葬でもなければ供献鉄滓ももたない。このことは、クズレ塚古墳や一貫西１号墳が、杉山氏の言葉を借りれば「鉄に関する生産・集積・運輸等において主導的な役割を果た」した小首長層の被葬者をもつ古墳であることを肯定する反面、柳谷古墳がそれらとは異なった性格をもつ古墳であることを傍証するものである。頭椎大刀把頭を持つことも考え合わせ（註21)、今後資料の増加を待って、再度更に詳細に検討する必要がある様に思われる。

（註１）　渡辺健治「津山市植木クズレ塚陶棺古墳」『古代吉備』第７集1971年。また、津山中核工業団地造成地内であるため、津山市教育委員会が再調査を行った。報告書は1989年度刊行予定。

（註２）　津山中核工業団地造成地内であり、津山市教育委員会が調査を行った。報告書は、1988年度刊行予定。

（註３）　中山俊紀『寺田古墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第22集1986年。

（註４）　中山俊紀『緑山遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第19集1986年。

（註５）　安川豊史『東蔵坊遺跡Ｂ地区発掘調査報告』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第９集1981年。

（註６）　行田裕美『ビシャコ谷遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第16集1984年。

（註７）　葛原和人・池畑耕一・伊藤晃「二子御堂奥古窯址群」『岡山県埋葬文化財発掘調査報告書』第２集1974年。

（註８）　山磨康平『寒風古窯址群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告27　1978年。

（註９）　柳瀬昭彦・伊藤晃・岡本寛久『黒土窯址・寒田窯址』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（31）1979年。

（註10）　西川宏「備前の古窯」『古代の日本』４中国・四国編1970年。

（註11）　Ｂ類はＡ類に較べて小型であり、時期的にＡ類よりも新しいものとしている。（註９）

（註12）　田辺昭三『陶邑古窯址群』Ⅰ平安学園クラブ1966年。

（註13）　前掲（註９）

（註14）　前掲（註８）

（註15）　大阪大学基礎工学部、渋谷秀敏・夏原信義・塩田浩平・川井直人「第７節・寒田５号窯址の熱残留磁化による年代測定」『黒土窯址・寒田窯址』岡山県埋蔵文化財発

掘調査報告（31）1979年。前掲（註９）

（註16）　斉藤和夫・森浩一「日本陶棺地名表」『古代学研究』第１号1949年。西川宏・則武忠直「備前市山陽町吉原古墳群の陶棺」『古代吉備』第１集1958年。今井堯「第１章・原始社会から古代国家の成立へ」『津山市史』第１巻・原始・古代1972年。村上幸雄・橋本惣司「亀甲型陶棺の製作工程について」『考古学研究』第26巻第２号1979年。等。

（註17）　杉山尚人「陶棺の研究」『考古学研究』第33巻第４号1987年。

（註18）　村上幸雄『糠山遺跡群』Ⅱ久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（２）1980年。

（註19）　行田裕美『簗瀬古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第13集1983年に35例紹介されており、その後新たに知られた13例を追補した。

（註20）　河本清・橋本惣司・柳瀬昭彦・下沢公明・井上弘「押入西遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』３　1973年。

（註21）　後に触れるが、北房町土井２号墳からは陶棺内より金銅装頭椎大刀の出土をみている。平井勝『土井２号古墳』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（29）1979年。

(2) 銀象嵌頭椎大刀について

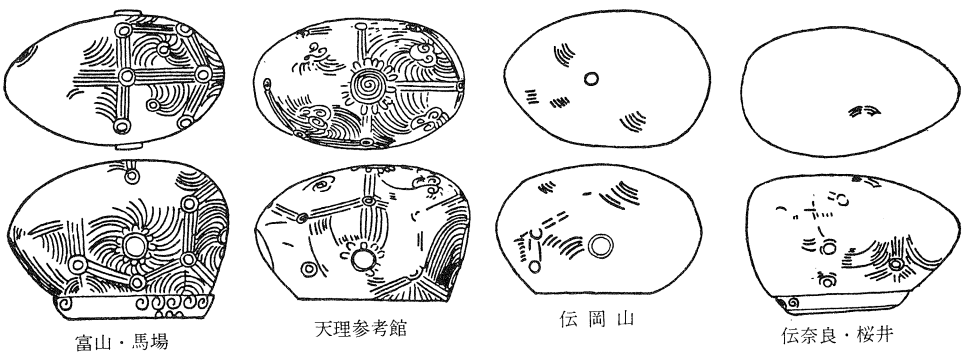
全国の類例

現在知られている銀象嵌頭椎大刀把頭は、全国で13例を数える（第４表)。しかし、出土古墳の判明しているものが９例あり、更にその出土状況、共伴遺物等が把えられるものは、わずか４例にしかすぎない。まずは、柳谷古墳例を除くその３例から紹介してゆきたい。

(1)兵庫県中井２号墳（第29・30図　註１）

兵庫県龍野市龍野町に位置する。北向する支脈の先端部緩斜面に立地する、２基から成る古墳群の１基である。１号墳との距離は約60mを測る。径20×17mで3.5mの高さを有する円墳であり、播磨では最大規模の右片袖式の横穴式石室をもつ。その規模は、玄室長3.8m、最大

埼玉・塚本山19号

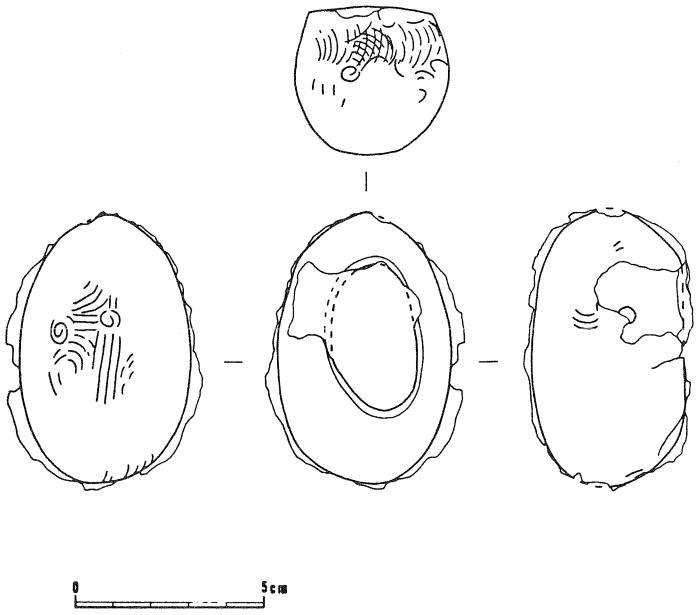


富山・馬場　　天理参考館　　伝岡山　　伝奈良・桜井

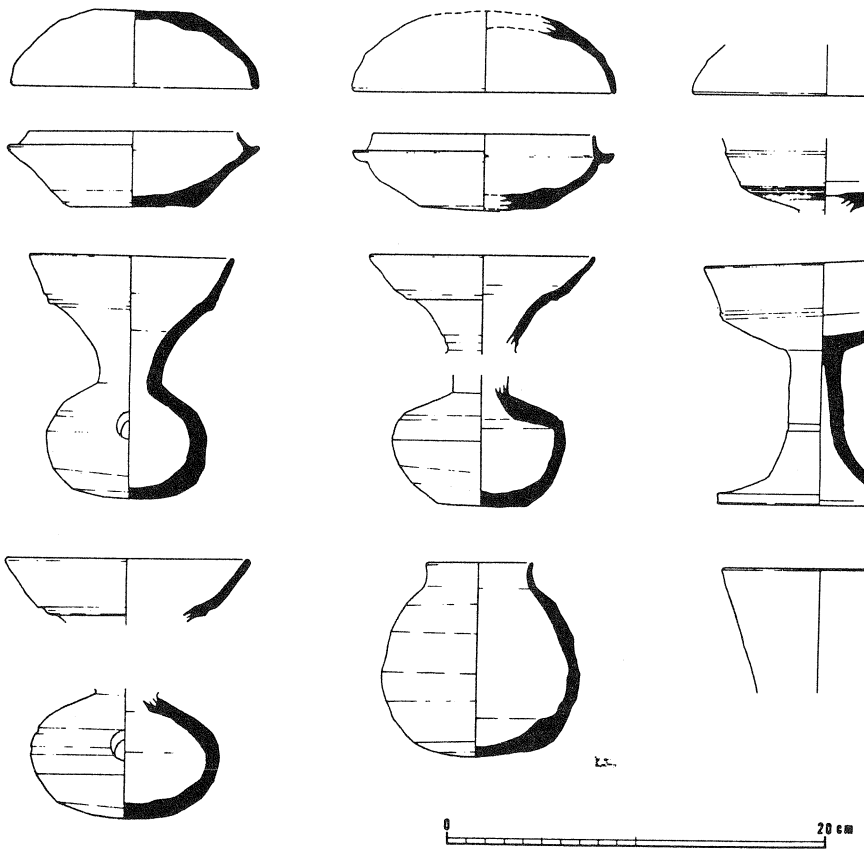
第28図　銀象嵌頭椎大刀把頭出土類例（S＝1：3）（文献19）

幅2.1m、最大高2.8mで、羨道長7.3m、幅1.6mを測る。頭椎大刀把頭は石室内攪乱土中から出土しており、原位置を保ってはいなかった。

頭椎大刀把頭は4.05×7.35cmを測り、保存状態はさほど良好ではなかったが、象嵌文はレントゲン写真により、亀甲繋文であることが判明した。共伴遺物としては須恵器（杯、蓋、高杯、甕、壺、甕）、鉄鏃、刀子、馬具、金環であり、刀装具の関連では直刀2振に鍔、



第29図　兵庫県中井2号墳出土頭椎大刀把頭（S＝1：2）（註1）



第30図　兵庫県中井2号墳出土遺物（S＝1：4）（註1）

責金具（象嵌あり）が出土している。

中井古墳群で注目に値するのは、1号墳の石室内からは金銅装三累環頭大刀が出土していることである。1号墳は石室長8.9mの片袖式横穴式石室で、共伴遺物には須恵器、土師器の他、馬具、刀子、刀装具関連では直刀2振に鞘尾金具が出土している。

当古墳の築造時期は6世紀末～7世紀初頭に比定されている。

第4表　銀象嵌頭椎大刀把頭出土地名表

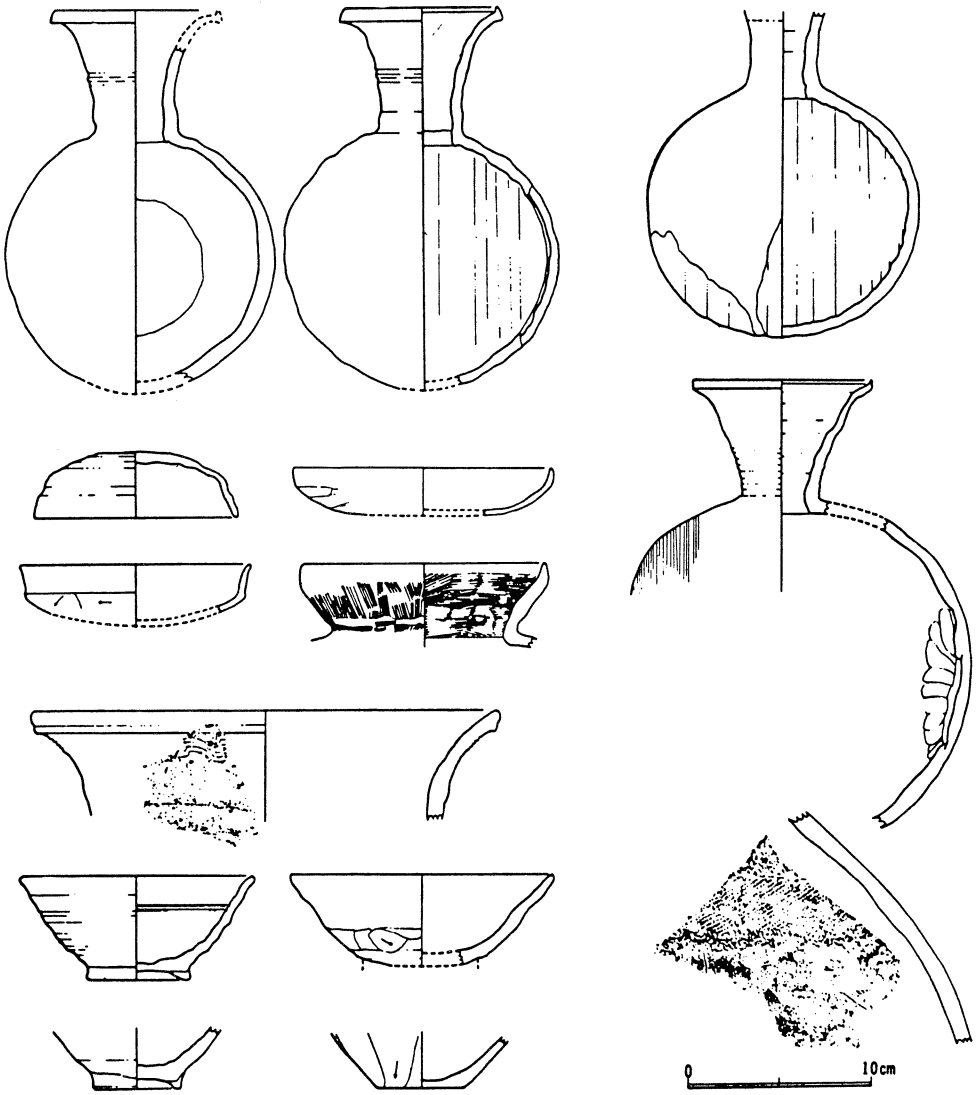
	古墳	主体	群集性	文様	大きさ(cm)	共伴刀装具	伴出遺物	備考	文献
塚本山19号墳（埼玉県児玉郡）	円墳 径11m	横穴式石室 長5.65m	群集墳 (28基)	亀甲繋文 B(?)類	長 8.5 幅 5.8 高 5.3	鍔 ※ 柄縁 ※ 責 ※ 鉄刀	鉄鏃・耳環 須恵器	7世紀半ば前後築造	註2
風呂ヶ谷5号墳（静岡県藤枝市）	円墳	横穴式石室	群集墳(?)	亀甲繋文 A類	長 8.5 幅 5.6 高 5.9			藤枝市郷土博物館蔵	註4
原正勝4号墳（静岡県藤枝市）	円墳	横穴式石室	群集墳(?)	〃 B類	長 6.9 幅 4.4 高 4.2	(鉄刀)		〃	註4
瀬戸Ⅰ1号墳（静岡県藤枝市）	円墳	横穴式石室	群集墳(?)	〃 B類		(鉄刀)	金銅装馬具	〃	註4
院内乙古墳（静岡県周智郡）	円墳 径11.5m	横穴式石室 長5.5m		不詳			金銅双竜環頭大刀 馬具・金環・須恵器		文献4・10
馬場古墳（富山県西砺郡）	横穴墓			亀甲繋文 B類	長 9.1 幅 5.1 高 5.7	把元 ※ 鍔 ※			文献2・10
中井2号墳（兵庫県龍野市）	円墳 径20m	横穴式石室 長11m	群集墳 (2基)	亀甲繋文 B(?)類	長 7.35 幅 4.50 高 4.05	責金具 ※ 鍔 ※ 鉄刀	須恵器・耳環・鉄鏃 馬具	1号墳より金銅装三累環頭大刀出土。6世紀末～7世紀初頭築造。	註1
柳谷古墳（岡山県津山市）	円墳 径7.5m	横穴式石室 長3.3m	単独墳	亀甲繋文 B類	長 7.4 幅 4.5 高 4.1	鞘尾金具※	須恵器・土師器 鉄鏃	6世紀末～7世紀初頭築造。	
西穂波C3号墳（鳥取県東伯郡）	円墳 径8.9m	横穴式石室 残存長0.8m	群集墳 (4基)	亀甲繋文 B類	長 8.7 幅 高 4.9	把元 ※ (鉄刀)	須恵器・方頭大刀 把頭・鍔・耳環	7世紀前半～築造。	註3
（長野県南佐久郡 田口村）	円墳	横穴式石室		不詳			匂玉・管玉		文献4
（伝 奈良県桜井市）				亀甲繋文 B(?)類	長 9.0 幅 5.1 高 5.0	柄元 ※			文献19
（伝 岡山県）				亀甲繋文 B(?)類	長 8.7 幅 5.5 高 5.5			伝美作地方出土	文献19
				亀甲繋文 A類	長 8.4 幅 5.3 高 5.6			天理参考館蔵	文献19

※印は象嵌あり

(2) 埼玉県塚本山19号墳（第28・31図　註２）

埼玉県児玉郡美里町に位置する。方形周溝墓９基、円墳28基からなる古墳群の中の１古墳である。この古墳群は１号墳が７世紀前半中頃に築造された後、それをとりまく様に６基の古墳が７世紀半ばに順次築造される。19号墳はその１基であり、尾根の最も先端に立地している。

径11.0×8.0m の高さ1.25m を測る円墳で、扁平河原石を模様積みした横穴式石室は全長5.65m、奥壁幅1.32m、玄室長3.92m である。頭椎大刀は左側壁際中央の直刀２本の切先部にあり、２次移動が考えられている。頭椎大刀把頭は短径5.8cm、長径8.5cm、厚さ約0.4cmであり、「保存状態は全体に層状剝離が著しく、象嵌が施されている表層はほとんど失われている」。わずかに残っている部分から、その「文様は全体を亀甲形及び方形で区画し、その中に渦巻文を、鳩目孔の周囲には花弁状の文様を施してある」。



第31図　埼玉県塚本山19号墳出土遺物（S＝1：4）（註２）

共伴遺物は玄室内より耳環、直刀、鉄鏃、そして人骨片であり、前庭部より甕、杯、須恵質丸底細頸瓶、須恵器杯、羽釜、土錘であり、周溝からは刀子片が出土している。

(3) 鳥取県西穂波C３号墳例（註３）

鳥取県東伯郡大栄町に位置する。尾根のゆるやかな南斜面に４基が群集して立地する。50～60基の古墳により構成される西穂波瀬戸古墳群の中の１支群にあたり、６世紀後半から７世紀初頭にかけて順次築造されたものである。ほとんどが破壊されており、遺物も現位置をとどめてはいない。

Ｃ３号墳は推定径8.9mの円墳で、横穴式石室の残存長は0.8mである。頭椎大刀把頭は破砕していたが、全体としての遺存状態は良好である。

共伴遺物には須恵器をはじめ、方頭大刀把頭、鍔及び耳環等がある。

次に、出土古墳の判明している藤枝市の３例と他２例の計５例を紹介しておく。

(4) 藤枝市の３例（第32図　註４）

第32図　静岡県風呂ヶ谷５号墳出土頭椎大刀把頭（註４）

原古墳群内の３基からそれぞれ銀象嵌頭椎大刀把頭が出土し、最近ほぼ同時に発表された。しかし、いずれも共伴遺物等が焼失して不明という点で、非常に残念な資料である。

風呂ヶ谷５号墳例はほぼ全面に銀象嵌の遺存している良好な資料の１つである。更に、その文様は頭頂部を４区画ではなく８区画に区分している点、区画内に退化しきっていない鳳凰文が認められる点が特徴である。

原正勝４号墳例は、区画内の鳳凰が円文と旋毛状文に崩壊してしまったものである。共伴の刀装具に鉄刀があったとの教示を得た。

瀬戸Ⅰ１号墳例も、区画内には鳳凰は認められない。調査員のメモによると、金銅装馬具が共伴していたという。また、頭椎大刀把頭は追葬品であるという。

(5) 静岡県院内乙古墳（第28図　文献４・10）

静岡県周智群に位置する、横穴式石室をもつ円墳である。頭椎大刀把頭の実物は不詳であるが、金銅双竜環頭大刀、馬具、金環、須恵器が共伴していたと伝えられる。

(6) 富山県馬場古墳（第28図　文献２・10）

富山県西砺波郡に位置する横穴墓である。これはかなり古くから紹介されている例である。しかし、そのためもあり共伴遺物が不明であるのが残念である。

文様は後述するＢ類の典型例であり、鳩目孔の周囲を花弁でとりまき、それを囲む亀甲繋文内部を旋毛状文で埋めるものである。

そして最後に、出土古墳の判明しない例４例を紹介しておく。

まず、長野県南佐久郡田口村に所在する、円墳の横穴式石室から出土した、と伝わるものである。実物は知らない。（第28図　文献４）

また、奈良県桜井市から出土したと伝わっているものであり、これは、やはり後述するＢ類の亀甲繋文である。（第28図　文献19）

岡山県から出土したと伝えられるものは、正確には美作地方からの出土であり、神林淳雄氏の実測図がある。（第28図　文献19）

天理参考館に所蔵されているものは、風呂ヶ谷５号墳例と同じＡ類に属するものであり、区画内に鳳凰が顕在している。出土古墳、共伴遺物の知れないのが残念である。（第28図　文献19）

出土古墳の特徴

銀象嵌を施した頭椎大刀把頭を出土する古墳の特徴としては、次に挙げる様なものがあると思われる。

①　概して横穴式石室をもつ中・小円墳が多く、群集墳を成すものと単独墳もしくはそれに類する構成をもつものの２者に分かれる。

②　分布は、金銅装頭椎大刀の分布と現段階では一致していない。

③　伴出する遺物には、鉄鏃、馬具等が含まれるものがある。

④　石棺・陶棺等に入るものがない。

以下、それぞれについて詳述してゆきたい。

①　出土古墳の知れる10例についてみれば、内９例までが円墳であり、最小の柳谷古墳の径7.5m から中井２号墳の径20m に至るまで大きさの上ではバラエティに富むものの、概して中・小円墳のうちに含まれると思われる。また、古墳群を成すものと、単独で築造されるものの２者に分類可能である。即ち、前者には塚本山19号墳、西穂波Ｃ３号墳、藤枝市の３例などがあり、後者では柳谷古墳を代表とすることができる。また、中井２号墳は２基により構成されるものであり、その構造・副葬品等のあり方が他の群集墳とは異なることから、より後者に近いものであると考えられる。更に、馬場古墳においては詳細は不明であるが、横穴墓という性格から考え合わせて前者に属するものであろう。

金銅装頭椎大刀の出土古墳についても小円墳や横穴墓が多いとの指摘はされている（註５）。しかし、特に関東地方においては前方後円墳からの出土例が多く、関東地方出土例のほぼ半数が前方後円墳であることは注目される（註６）。あいにく、銀象嵌頭椎大刀の関東地方における

出土例が少ないため、これをもって金銅装頭椎大刀との差異を認めることはできない（註７）。

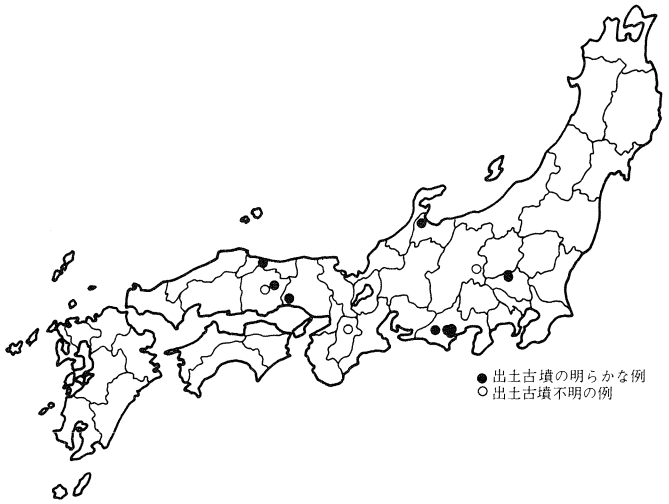
群集墳については埼玉県塚本山19号墳例と中井２号墳例を取り上げておきたい。

埼玉県塚本山古墳群（註８）は28基からなる古墳群であることは前述した通りである。15号墳が最初に築造され、後、古墳群中で最大規模を誇る１号墳が築造され、更にその後19号墳が築造される訳である。副葬品等に注目すると興味深い事実がわかる。まず埴輪であるが、これは１号墳を最後に後に築造される古墳には樹立されない。埴輪廃絶後、刀、鉄鏃等が副葬される様になるが、副葬古墳の中で差異が認められる。即ち、刀と鉄鏃のいずれも持つ古墳（９基）、どちらか一方をもつ古墳（４基）、いずれも持たない古墳（15基）とに分類できることである。15号墳はいずれも持たず、１号墳はいずれも持つグループに属する。そして、頭椎大刀を出土した19号墳からは鉄鏃も出土している。ここに新納泉氏が指摘された（註９）群集墳における武器の階層性の一部を垣間見ることができる。しかし、塚本山古墳群例では馬具の出土がなく、装飾大刀である頭椎大刀出土19号墳の他の古墳に対する優位性を必ずしも認められなかった。

中井２号墳（註10）は１号墳と共に播磨においては最大規模の円墳である。そして注目されるのは隣接する１号墳において金銅装三累環頭大刀が出土している事実である。従来、環頭系と頭椎系の装飾大刀の差を指摘している例（註11）は多いが、その根本的差異、即ち佩用者の性格上の差異となると言及できていない様に思われる。更に金銅装と象嵌鉄装との差異となれば尚更であろう。今後、同一古墳に副葬される両者、隣接古墳にそれぞれ副葬される両者、更には同一古墳群内にそれぞれ副葬される両者について更に注目してゆく必要がある。中井古墳群はその点において非常に重要な一例であると考えられる。

②　頭椎大刀の出土分布は東日本に偏る傾向は従来から指摘されてきている(註12　第34図)。しかし、現段階の資料をみるに象嵌鉄装品においては必ずしも明確に東日本に偏在することを指摘し得ない（第33図)。関東で１例、東海で４例、中部で１例、北陸で１例、近畿で２例、中国で３例である。しかし、未だ資料数が少なく、今後の資料増加を待たねば明確にし得ないものであろう。

③　馬具、鉄鏃の共伴する割合はさほど顕著ではない。しかし、出土状況の知れる４例において全て鉄鏃を出土しており、また、瀬戸Ⅰ１号墳、院内乙古墳、中井２号墳からは馬具が出土していることは一応注目に値



第33図　銀象嵌頭椎大刀把頭出土分布図

するものであろう。この事実は先に触れた新納氏の指摘（註13）との兼ね合いで重要であるものと考える。

④　周辺の古墳が陶棺を持つ墓制の中にあって、柳谷古墳が陶棺を持たない意味は大きい様に思われる。ここでは同じ岡山県出土の金銅装頭椎大刀の例として土井２号墳を挙げておく。

土井２号墳（註15）は岡山県北房町下中津井に位置する、横穴式石室をもつ円墳である。立地は丘陵の南緩斜面裾部であり、前面には平野が開けている。

第34図　金銅装頭椎大刀出土分布図（註14）

石室内部には亀甲型陶棺が２つ置かれていたが、より奥側の１号陶棺内から金銅装頭椎大刀が出土した。しかし、両陶棺とも初葬時のものではない。

１号陶棺内には他に耳環４、刀子３、小玉、石鏃が副葬されており、他の須恵器等は陶棺の下に置かれていた。これらの須恵器等から１号陶棺の埋葬時期は７世紀中葉に比定されている。

この事実と照会すると、柳谷古墳が陶棺を持たないことは、全く別次元の陶棺葬にからむ問題か、もしくは金銅装と銀象嵌鉄装との差異となる。両者の判別自体現段階では不可能で、やはり今後の資料増加に期待したい。

銀象嵌頭椎大刀把頭の特徴

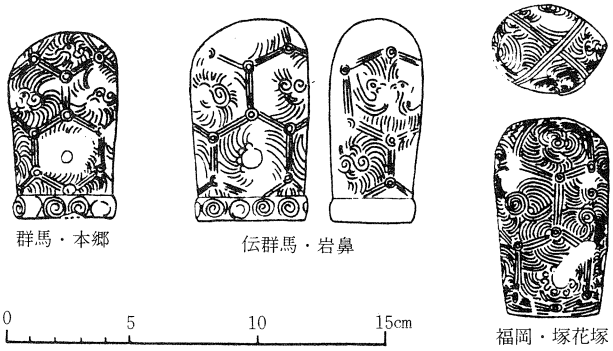
続いて銀象嵌頭椎大刀そのものについて触れてみたい。

まず注意されるのは文様が全て亀甲繋鳳凰文と呼ばれる一群に属することである。特に亀甲形内部の文様によって２者に分類することが可能である。即ち、風呂ヶ谷５号墳例、天理参考館所蔵例等にみられる様に、かなり退化しながらも内部に鳥文がみてとれるもの（Ａ類）と、もはや退化しきってしまい、旋毛状文化しているもの（Ｂ類）とにである。この差異は時間差として把えて良い様に思われる。これには橋本博文氏が円頭大刀把頭の亀甲繋鳳凰文の編年をされている（文献18）のでそれと照会してみたい。

氏は亀甲繋鳳凰文（Ａ類）と亀甲繋花文（Ｂ類）とに大別し、前者を単鳳のもの（Ａ—Ⅰ類）と双鳳のもの（Ａ—Ⅱ類）に細分し、更にハート形文から火焔文へと遷移するもの（Ａ—Ⅰ—

a類）と旋毛状文へと変容するもの（A－Ⅰ－b類）に細分している。頭椎大刀把頭では全てがA－Ⅰ－b類に属する。

編年としては、朝鮮例と比べて「崩れの少ない具象的な鳳凰文が表現される」群馬・台所山古墳例（註16）を第1段階とし、その鳳凰文の退化に従い、第8段階にまで分類している。A－Ⅰ類がA－Ⅰ－a類とA－Ⅰ－b類とに分離するのが正に第四段階からであり、A－Ⅰ－b類は第五段階以降ほぼ検出例が認められなくなる。



第35図　円頭大刀把頭の銀象嵌文様（S＝1：3）（文献19）

第四段階（第35図　左・中）は群馬・本郷例（註17）の様に、亀甲繋文の区画内に変形しつつも鳳凰文の表現されているのがまだ明らかな例である。そして第5段階（第35図　右）に至ると、福岡・塚花塚例（註18）に認められる様に、亀甲繋文内部には鳳凰文が完全に崩壊し、かつて鳳凰の頭部であったものは渦巻文、環文等に変化し、旋毛状文も不規則な方向で空間を充塡する様になる。氏は更にその年代を、A－Ⅰ－b類の梶山古墳例（第4段階）(註19）のTK209型式で6世紀末葉に比定している。

頭椎大刀把頭におけるA類を橋本編年の第4段階新相、B類を第5段階に当ててよいと考える。更に時期においては、頭椎大刀把頭の共伴遺物の年代がほとんど6世紀末から7世紀初頭であることから、橋本氏の指摘にほぼ矛盾がない。

本来ならば、銀象嵌頭椎大刀把頭も共伴須恵器による検証が行われなければならないのであるが、A類と考えられる2例の共伴遺物が不明であるため、それによるA・B類それぞれの時期決定は不能である。しかし、柳谷古墳共伴須恵器と中井2号墳出土須恵器との比較においては、口径、形態、手法ともかなり類似点が認められ、両者の時期にはさして幅は認められず、少なくともB類においては6世紀末から7世紀初頭の間に設定してよい様に思われる。

更にもう1つの銀象嵌頭椎大刀の特徴としては、銀象嵌が把頭のみでなく、把元、鍔、責金具、鞘尾にも施されることが多いということである。塚本山19号墳では、把縁、責金具、鍔に中井2号墳には責金具と鍔に、また馬場古墳例、伝奈良県桜井市出土例、西穂波C3号墳例にはいずれも銀象嵌の施された把元金具を伴っている。

柳谷古墳出土の鞘尾金具は当初小刀把頭であるとの見方があった（註20)。その後、平田14号墳（註21）の例が知られ、当品が鞘尾金具である可能性が高くなった。平田14号墳は径13mの方墳で、埋葬主体は木棺直葬である。主体部には円頭大刀が副葬されており、その刀身の切先部に柳谷古墳で出土した鞘尾金具と類似の、鱗状文の象嵌された鞘尾金具が、目釘を残したま

ま出土しているものである。

この様な事実から、柳谷古墳出土の頭椎大刀把頭と鞘尾金具は同一刀装品の部品である可能性が高いものと思われる。

まとめ—今後の課題

銀象嵌頭椎大刀把頭をめぐって、いくつかの問題点を指摘してみた。ここでまとめておきたいと思う。

まず、出土古墳は概して中・小円墳が多く、群集墳と単独墳の2者がある。また、金銅装頭椎大刀の分布は銀象嵌頭椎大刀の分布とは一致していない。しかし、この様な問題点の解決は今後の資料の増加に多くを委ねねばならない。

頭椎大刀把頭に施された銀象嵌文様は、全て同一規範のもとに作られている。それを2者に分類し時期差と把え、それが橋本編年の第4～5段階にわたる、かなり一時的なものであったということを指摘した。

以上のことから、金銅装頭椎大刀と銀象嵌頭椎大刀の出所は、それぞれ異なることが指摘できる。（註22）

金銅装頭椎大刀の出所は鹿角装・木装大刀にあり、畦目は「鹿角装大刀の一部に用いられたねじりのあるC字形の金具（註23）に由来すると考えられ」、「金銅装を取り入れる過程で円頭大刀の技法を採用したもの」（註24）であるとする新納氏の指摘に賛同したい。一方、銀象嵌頭椎大刀は、亀甲繋鳳凰文の退化の進んだ段階で、即ち、それまでの亀甲繋鳳凰文の意味の忘れ去られた段階で、頭椎大刀把頭「にも」施されることで生まれる（註25）。当然両者には、同じ頭椎大刀でありながらも、その佩用者の身分なり、社会情勢なりでの反映による根本的差異が認められねばならないが、これまでその問題点に積極的に言及したものは皆無であり、現段階では筆者も私見をもちあわせていない。

現在に至るまでの研究は、装飾付大刀全般をまとめて政治論・社会論にまで発展させてゆくもの（註26）、個々の刀装具、例えば頭椎大刀についてその佩用者の性格を言及するもの（註27）、もしくは、銀象嵌に注目し、その変遷を追い、その特徴を指摘することで、当時の社会を探究するもの（註28）それぞれであり、それぞれで、またそれぞれでなければ導き得ない結論をもはや充分に導き出しているものと考える。しかし、前述した通り、金銅装頭椎大刀と銀象嵌頭椎大刀という両者の根本的差異について言及した論文が見当らなく（類例の少ないことが不可能せしめていることは否めないが）今後の大きな課題となろう。

更にその際には頭椎大刀を出土する古墳のみでなく、その古墳の属する群構成等にも注目し、柳谷古墳例を挙げれば、陶棺をもたない事実、鉄滓供献古墳との差異についても触れてゆかねばならないと考えている。

参考文献

紙数等の関係で学史には触れなかった。今後の研究の一助にと思い、関連文献を古い順に紹介し、学史に代えさせていただきたい。

1．高橋健自『鏡と剣と玉』1911年。

2．後藤守一「頭椎大刀について(一)・(二)」『考古学雑誌』第26巻第8・12号1937年。

3．神林淳雄「金銅装大刀と金銅製柄頭」『考古学雑誌』第29巻第4号1939年。

4．神林淳雄「鉄装大刀と鉄製柄頭」『考古学雑誌』第30巻第3号1940年。

5．末永雅雄『日本上代の武器』1944年。

6．桐原　健「頭椎大刀佩用者の性格」『古代学研究』56　1969年。

7．向坂鋼二「飾大刀について」『掛川市宇洞ヶ谷横穴墳発掘調査報告』静岡県文化財調査報告書第10集1971年。

8．町田　章「環刀の系譜」『研究論集』Ⅲ奈良国立文化財研究所学報第28冊1976年。

9．新谷武夫「環状柄頭研究序説」『考古論集一慶祝松崎寿和先生六十三歳記念論文集一』1977年。

10．穴沢和光・馬目順一「頭椎大刀試論」『福島考古』18　1977年。

11．橋本博文「亀甲繋鳳凰文象嵌円頭大刀について」『常陸梶山古墳』茨城県鹿島群大洋村教育委員会1981年。

12．穴沢和光・馬目順一「南原郡月山里出土金銀錯素環頭大刀に寄せて」『古代文化』35―5　1983年。

13．新納　泉「装飾付大刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』第30巻第3号1983年。

14．新納　泉「関東地方における前方後円墳の終末年代」『日本古代文化研究』創刊号1984年。

15．横田義章「古墳時代の象嵌文様」『九州歴史資料館研究論集』10　1985年。

16．桜井清彦「頭椎大刀の編年」『考古学ジャーナル』266号　1986年。

17．滝瀬芳之「円頭大刀、圭頭大刀の編年と佩用者の性格」『考古学ジャーナル』266号1986年。

18．橋本博文「金銀象嵌装飾円頭大刀の編年」『考古学ジャーナル』266号1986年。

19．西山要一「古墳時代の象嵌」『考古学雑誌』第72巻第1号1987年。

20．新納　泉「戊辰年銘大刀と装飾付大刀の編年」『考古学研究』第34巻第3号1987年。

（註1）　井守徳男・渡辺昇他『中井古墳群・中井鴨池窯跡』兵庫県文化財調査報告書第38冊1987年。

（註2）　今泉泰之「(16) 19号墳」『塚本山古墳群』埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集1977年。岩本克昌「出土鉄製品の保存修復処置について」『埼玉県立歴史資料館紀要3』1981年。

（註3）　調査担当された奈良大学文学部文化財学科植野浩三氏の御教示による。

(註４)　藤枝市郷土博物館八木一郎氏、八木勝行氏、鈴木隆夫氏の３氏、及び浜松市教育委員会文化振興部博物館鈴木敏則氏の御教示による。『藤枝の歴史　藤枝市郷土博物館常設展示解説』藤枝市郷土博物館1987年。加藤裕之・鈴木敏則『四ッ池古墳群』浜松市文化協会1986年。

(註５)　穴沢咊光・馬目順一　文献10。

(註６)　文献10の〈付録〉頭椎大刀出土地を筆者が操作を行った。そのデータを略述すると、東北には９例中前方後円墳１・横穴基２、関東は24例中前方後円墳12、横穴墓４、中部（長野）では11例すべて円墳、東海では４例中２例が横穴墓、畿内は３例とも円墳、中国は６例中２例が横穴墓、四国は高知で円墳から１例のみ、九州は３例中横穴墓が１例という結果であった。

(註７)　勿論それだけではなく、西日本の前方後円墳の「出土すべくして出土しない」様な前方後円墳の例が知られていないことからも、即断できない。

(註８)　前掲（註２）

(註９)　新納泉　文献13。

(註10)　前掲（註１）

(註11)　町田章　文献８。新納泉　文献20。など。

(註12)　穴沢咊光・馬目順一　文献10。など。

(註13)　前掲（註９）

(註14)　穴沢咊光・馬目順一　文献10から引用、一部加筆。

(註15)　平井　勝『土井２号古墳』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（29）1979年。

(註16)　東京国立博物館『東京国立博物館図版目録　古墳遺物篇（関東Ⅱ）』1983年。文献19による。

(註17)　前掲（註16）神林淳雄　文献４。

(註18)　横田義章　文献15。

(註19)　橋本博文　文献11。

(註20)　西山要一氏の収集された類例（文献19）や京都府久美浜町湯舟沢２号墳等では小刀用の柄頭として取り扱っている。新納泉「(1)武器」『湯舟坂２号墳』久美浜町教育委員会1983年。

(註21)　『平田古墳群』三重県安芸郡安濃町遺跡調査会1987年。

(註22)　しかし、このことは頭椎大刀の間でのそれぞれの成立時期の差や系列の差を示しているのではない。

(註23)　「鉄地銀張鈎状品」として古くから紹介されている。『筑前國嘉穂郡王塚装飾古墳』京都帝國大學文学部考古学研究報告第15冊1938—39年。筆者註。

(註24)　新納　泉　文献20。

(註25)　西山要一　文献19で触れている。

(註26)　新納　泉氏らの研究など。

(註27)　後藤守一、穴沢咊光、馬目順一各氏らの研究など。

(註28)　橋本博文、西山要一各氏らの研究など。

6　柳谷古墳出土銀象嵌柄頭の保存処理と材質分析

西　山　要　一

(1) 保　存　処　理

柳谷古墳出土の２点の鉄製柄頭、頭椎柄頭と円頭柄頭の表面は、土・砂を巻き込んだ黄褐色の鉄錆に覆われている。さらに頭椎柄頭は７箇所に大小の錆瘤を生じ、うち３箇所の錆瘤は剝落し、円頭柄頭は１箇所に大きな錆瘤を生じ、この半ばは剝落欠失している。これらの錆瘤はすべての内部が空洞になっており、剝落部分の断面には銀色の象嵌線を見ることができる。錆瘤や錆の剝落部分を除けば、鉄製柄頭としてはよく原形を保っている。

保存処理を実施するにあたって次の３点、すなわち、土中に埋蔵中に周囲から浸透して錆を進める原因となっている塩素を除去すること(脱塩処理)、脆弱な鉄錆の塊となっている柄頭を強化し、防錆措置を講じること、象嵌文様を表出し、剝落片は可能な限り原位置に接合し復原すること、に重点をおき以下(1)～(9)の工程順に作業を進めた。

(1) **現状記録**――写真撮影・実測図作成・Ｘ線透過写真撮影（別項で詳述）・象嵌線の組成成分分析（別項で詳述）・錆化状況などの調査を行い記録した。

(2) **脱塩**――水酸化リチウムの１％溶液に２週間浸漬し、錆中の塩素を除去した。

(3) **洗浄**――有機溶剤を使って、柄頭表面に付着する砂・土・植物脂肪酸などを洗浄した。

(4) **乾燥**――錆を進める主因である水分を除去するため、摂氏105度で充分に乾燥した。

(5) **樹脂含浸**――アクリル樹脂（パラロイドＮＡＤ―10）のナフサ混濁液を減圧含浸をし、強化・防錆をくわだった。３度繰り返した。

(6) **象嵌文様の表出**――精密加工グラインダー・エアーブラシ・カッターナイフ・竹串などを使って表面の鉄錆を徐々に削除し、象嵌文様を表出した。(別項で詳述)。

(7) **接合**――象嵌文様を含む剝落片の原位置を検討し接合した。

(8) **樹脂塗布**――柄頭の表・内面に隈なく艶消し樹脂を塗布し、大気中水分の吸着による錆の再発防止をくわだった。

(9) **保存処理後の記録**――写真撮影・実測図作成・保存処理材料と工程などの記録を作成した。

以上の保存処理工程の１つひとつに細心の注意をはらいつつ確実に行い、所期の目的を達成することができた。

しかし、今後、長期間にわたって防錆効果を持続せしめるには、適切な保存管理を必要とする。すなわち、温度の一定した・湿度の低い・塵埃のない・直射日光や紫外線のあたらない場所に保管するとともに、素手で触れて油脂や水分・塩分を付着させないことなど、合成樹脂の

劣化や錆再発の要因を与えないよう注意し、一年に一度は錆が進行していないか否かの念入りな調査を行うことも必要である。

科学的保存処理を行えば、金属製品は永久に保存できると考えるのは危険であり、他の文化財と同様に、日常の怠ることのない手入れと適切な保存環境――保存管理を行うことによってはじめて永久保存は可能となる。

(2) X線透過写真撮影

2点の柄頭のX線写真撮影は津山市教育委員会によって既に行われ、象嵌文様の存在が明らかにされていたが(第9図)、保存処理と文様表出を行うに先立って、正面・側方・上方の三方向から、X線強度・照射時間などの撮影条件を種々設定し、改めて撮影した。象嵌文様の詳細・象嵌線の保存状態・柄頭鉄地の錆化状態などを的確に把握するためである。その結果、以下の事情が明らかになった。

頭椎柄頭の表面は、全面厚さ5～3ミリメートルの黄褐色の土・砂をまき込んだ鉄錆に覆われ、本体の鉄地は錆化が進んで7箇所に中空の錆瘤が生じ、数箇所に亀裂も見られる。象嵌線には著しい腐蝕は見られない。象嵌文様は亀甲繋文である。錆瘤は象嵌をももち上げ、剝落錆とともに象嵌もまた落ちている。錆に生じた亀裂は象嵌線をも切断している。とはいえ頭椎柄頭は原初の形をよく保っており、緒貫孔には鉄より質料の大きい金属、たぶん銅鳩目形管が両面より挿入されている。

円頭柄頭も同様に、厚さ2～4ミリメートルの土・砂をまきこんだ黄褐色の鉄錆に覆れ、本体の鉄地の錆化も進んで大きな中空の錆瘤と亀裂が生じている。象嵌線の著しい腐蝕は見られず、文様は羽状文である。錆瘤によって象嵌がもち上げられ、又、亀裂によって切断されている。柄頭元近くに、鉄製角釘が両側より打ちこまれている。

両柄頭ともに原初の形をよく保持しているものの本体鉄地の錆化は著しく進み脆弱であることも観察される。現形を保持し、又、象嵌文様表出のためにも強化処理が必要であると判断される。

(3) 象嵌文様の表出

X線フィルムには柄頭表裏の象嵌文様が重なる複雑な像が映し出されている。この像を詳細に検討してみると、頭椎柄頭の亀甲繋文は、頂部に花文をもち亀甲内を花文・渦文・円文・旋毛状文で埋める、頭椎柄頭象嵌文様の基本型をなしており、円頭柄頭は元部に半円文を周らし二段に山形を重ねて直線を付す羽状文であることが判明する。これらの文様を構成する直線・曲線は互いに交差することはない。

以上の観察結果と、錆剝落部断面にわずかに見ることのできる象嵌線を手がかりとして表裏の文様を分離し、作図することができる。

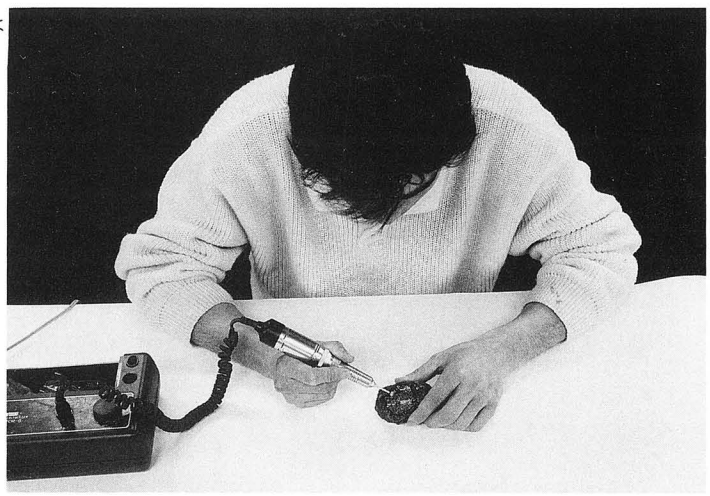
さらに錆剝落断面に見える象嵌線は、錆表面から3～4ミリメートルの深さにあり、先述の

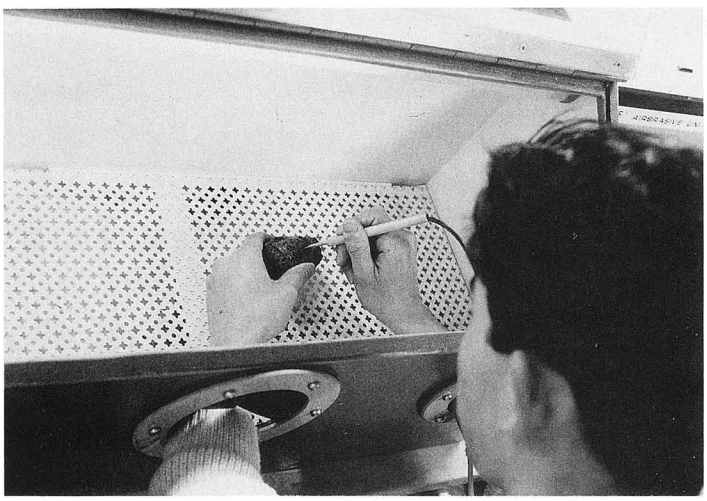
X線フィルムには表面より２～５ミリメートルの深さに象嵌線のあることがわかっており、おおむね削除すべき鉄錆の厚さが把握できた。

象嵌文様の表出は象嵌線の見える鉄錆剝落部分から始めた。円板型砥石を装着した精密加工グラインダーを使い、象嵌線上の鉄錆が0.1～0.05ミリメートルの厚さまで削除した（第36図)。錆瘤によってもち上げられている部分以外の象嵌線は、ほぼ柄頭原表面にあるので、錆の削除は発掘の初期と同じ様に広く水平に進めていく。次に、象嵌上の鉄薄錆をエアーブラシを使って、時としてカッターナイフ、竹串を使って剝がし象嵌線を表出した（第37図)。象嵌文様の一部が表出されれば、文様図に従って表出部分を広げていけばよい。錆瘤によって持ち上げられている象嵌線、錆の亀裂に橋状に跨ったり切断された象嵌線は不安定であるため、特に丹念にX線フィルムと文様図を繰り返し検討し、作業を進めた。象嵌文様を含む剝離錆片は、個々に文様表出したのち、原位置に接合した。

当初の予想通り象嵌線の表面に腐蝕は見られず、鮮やかな銀色の象嵌文様が甦った（巻頭カラー写真)。文様進出には、頭椎柄頭で10日、円頭柄頭で４日を要した。

第36図　精密加工グラインダーによる象嵌上の錆の削除





第37図　エアーブラシによる象嵌の表出

(4) 象嵌線の材質分析

頭椎柄頭・円頭柄頭の鉄錆剝落部断面に見える象嵌線について、X線マイクロアナライザーによる原素分析を行った。

頭椎柄頭は佩表側下方の剝離錆片に含まれていた象嵌線の断面を分析した（第39図の上)。銀線はやや斜めに切断されているため、上面幅0.6ミリメートル、中央部 の厚さ0.2ミリメートルを計る扁平な逆三角形を呈している。

象嵌線周辺部をも含めた面分析（第38図の上）によると、鉄（Fe)、ケイ素（Si)、銀（Ag)、アルミニウム（Al）が検出された。象嵌線断面中央部の点分析（第38図の下）では鉄と銀が検出された。原素分布分析（第39図）では、象嵌線断面に銀が濃く分布し、鉄はこれの周辺に濃く分布する。ケイ素は象嵌線に関係なく、全面に薄く分布する。

同じく剝離象嵌線の原素定量分析も行った。光学顕微鏡下の観察で、銀色の金属色に見える部分と黒色に見える部分があり、それぞれについて定量したところ（第42図の上)、前者(1)は銀98.27%、鉄1.27%、酸素0.52%、後者(2)は銀50.83%、鉄32.94%、ケイ素0.51%、アルミニウム0.52%、酸素15.20%の数値を得た。

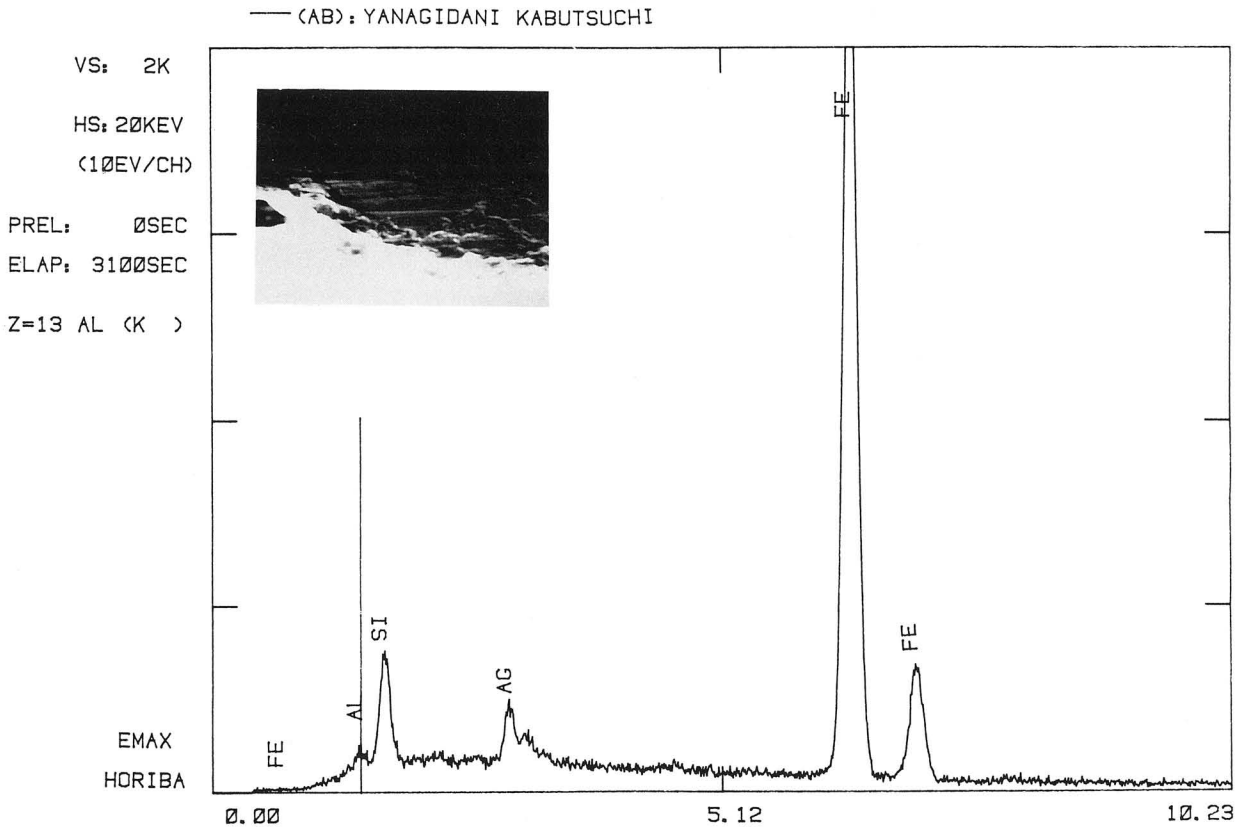
これらの結果から、象嵌線は純銀に近い銀線であること、点分析チャートや定量分析(2)資料に表われた鉄の強い反応は、象嵌周辺の鉄地の錆によるものであること、ケイ素、アルミニウムは土壌成分として付着したものであろうことが考えられよう。

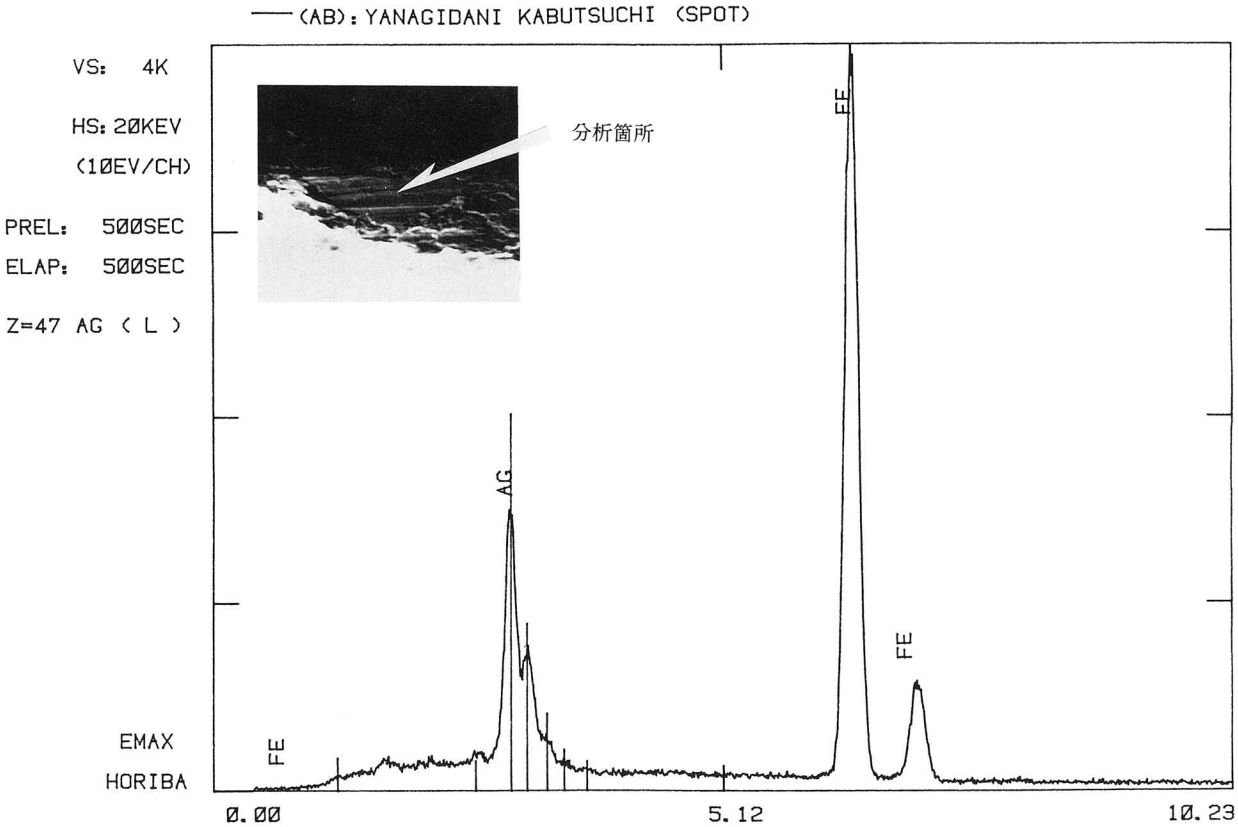
円頭柄頭は佩棟側に大きく膨れ上り破損した断面に見える象嵌線を分析した。象嵌線はほぼ直角に切断されており、上面の幅0.9ミリメートル、中央部の厚さ0.4ミリメートルを計る逆三角形である。象嵌線を含む面分析（第40図の上）では鉄・銀・ケイ素・アルミニウムが検出され、象嵌線中央の点分析（第40図の下）では、銀と鉄が検出された。原素分布分析（第41図）では、象嵌線部分に銀が濃く、その周辺部には鉄が濃く分布する。

さらに剝落銀線の定量分析では、光学顕微鏡下で銀色の金属色部分と茶褐色部分が見られ、それぞれに定量したところ（第42図の下)、前者(1)は銀90.89%、鉄5.85%、ケイ素0.16%、アルミニウム0.22%、酸素2.88%、後者(2)は銀2,56%、鉄46.67%、ケイ素8.37%、アルミニウム6.20%、酸素35.74%、リン0.23%、イオウ0.22%、チタン0.01%が数値を得た。

これらの結果から、点分析チャートや定量分析(2)のチャートに表れる鉄の反応は象嵌線周辺の鉄地の錆に起因するものであろうと考えられることから、象嵌線は純銀に近い銀線であろうと思われる。ケイ素、アルミニウムは土壌成分の付着であろうことが考えられる。

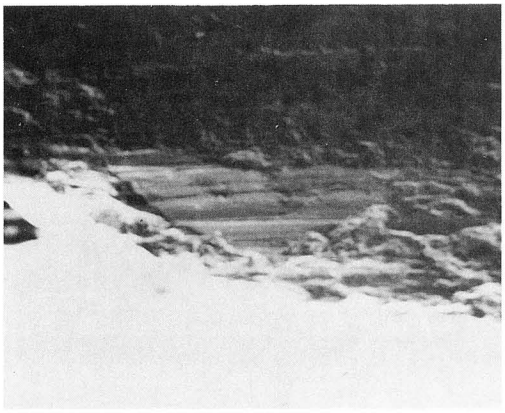
なお、X線マイクロアナライザー分析のうち、定性分析（面分析・点分析・分布分析）は㈶元興寺文化財研究所・松田隆嗣氏の手を煩わせ、定量分析は㈱堀場製作所分析センター、ミツワ理化㈱・井口氏・藤本氏のお手を煩わせたことを特に記して感謝申し上げます。また、保存処理と象嵌表出には、奈良大学学生、佐賀和美・福島永・野中仁・山中幸子君の助力のあったことも記しておきます。



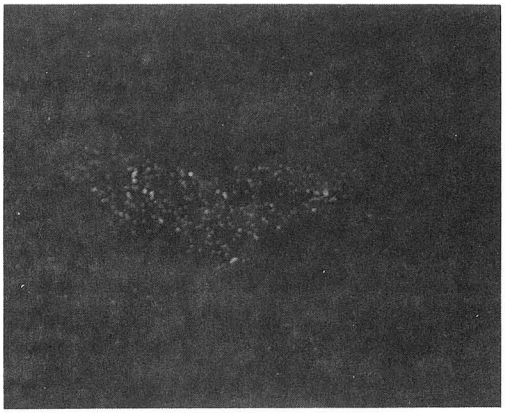


第38図　頭椎柄頭象嵌断面の定性分析(X線マイクロアナライザーによる原素分析
上：面分析　下：点分析)

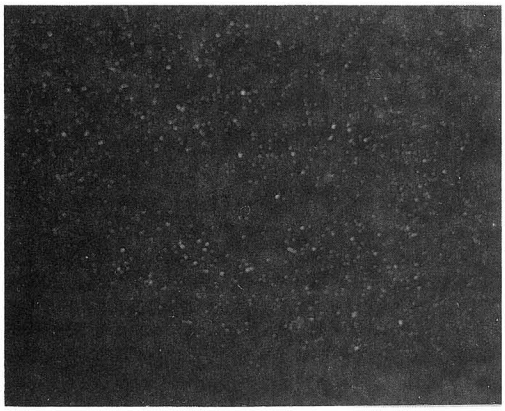
分析箇所



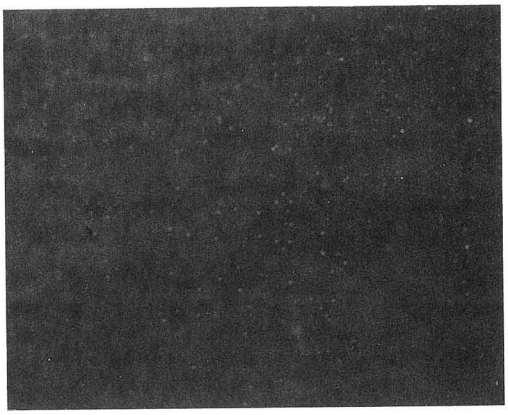
二次電子像



銀(Ag)の分布

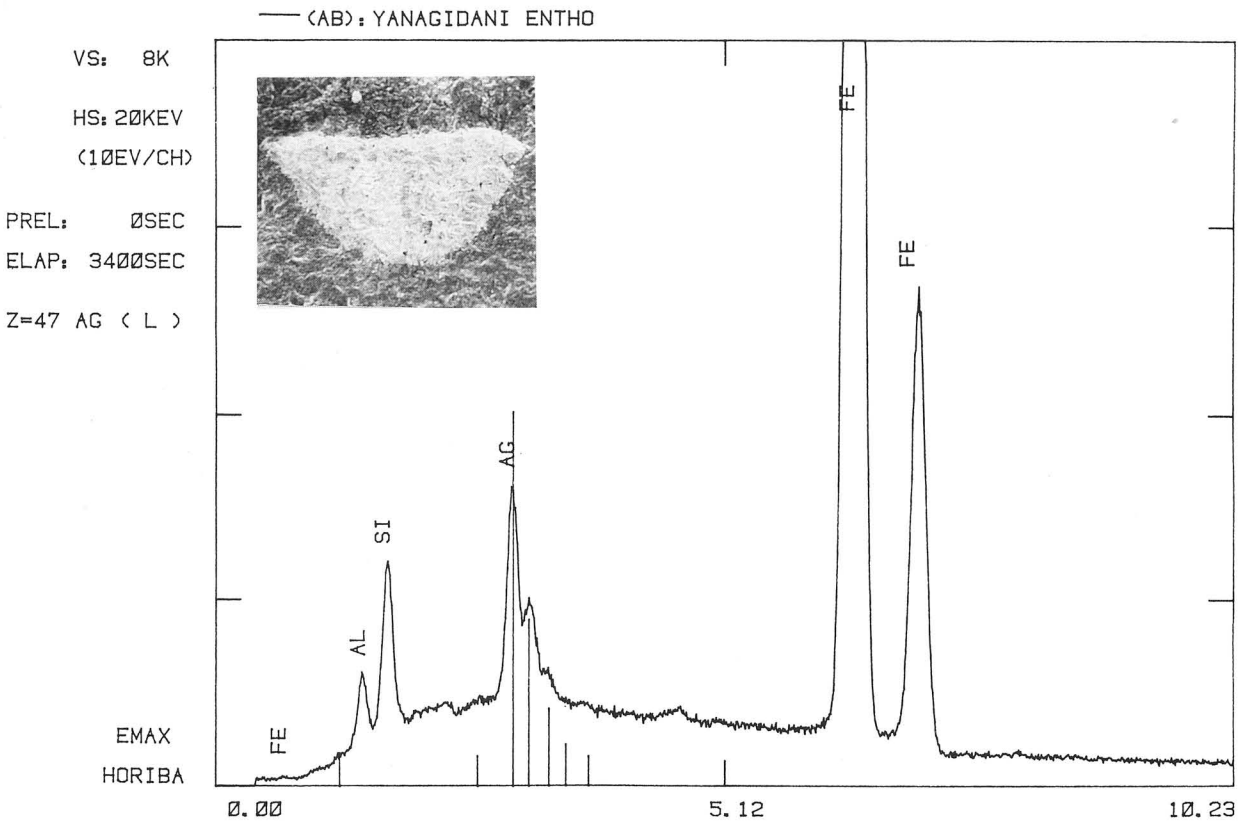


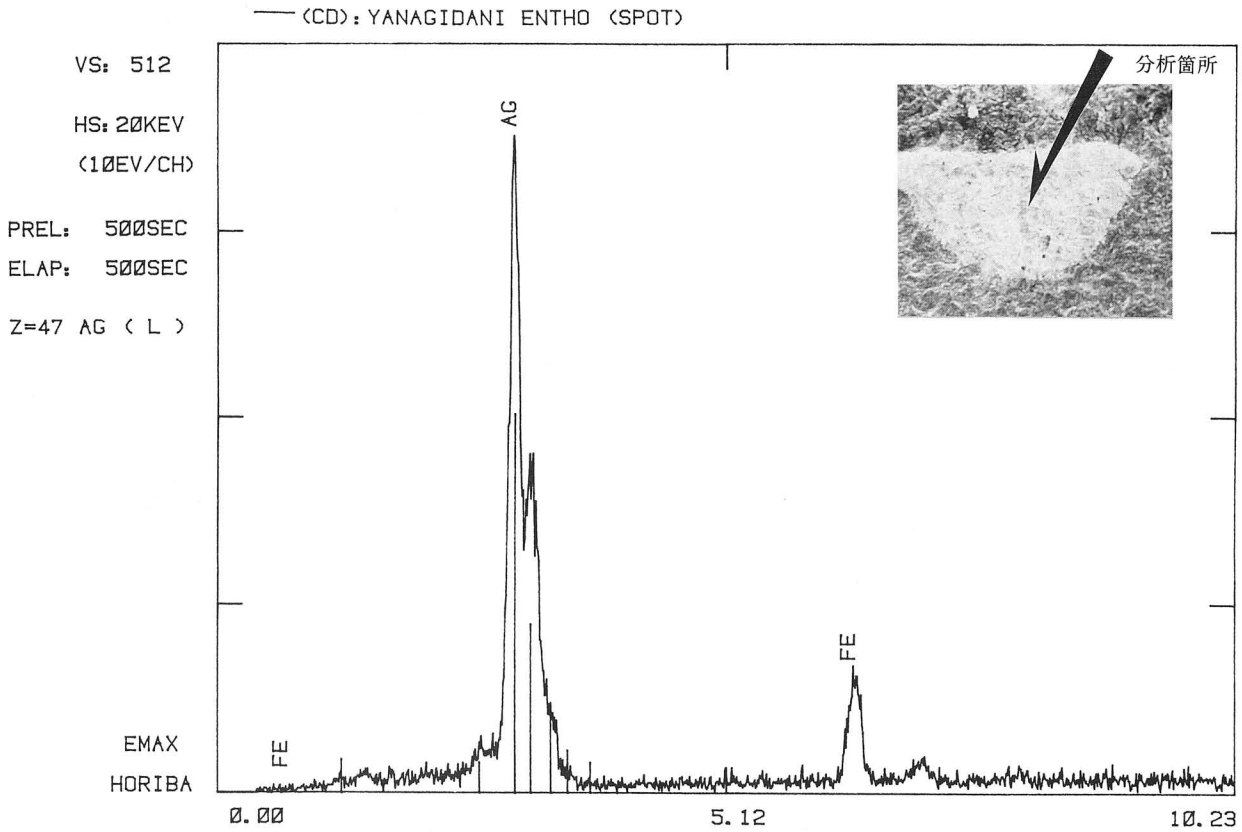
鉄(Fe)の分布



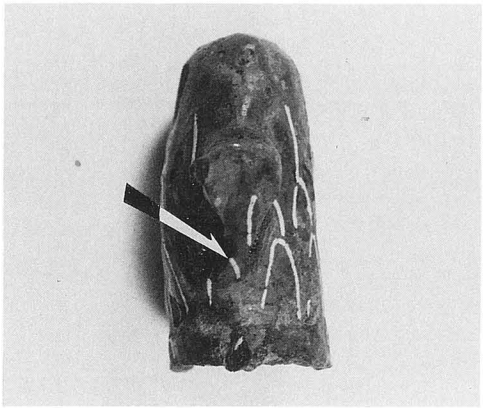
ケイ素(Si)の分布

第39図　頭椎柄頭象嵌断面の定性分析(X線マイクロアナライザーによる原素分布分析)

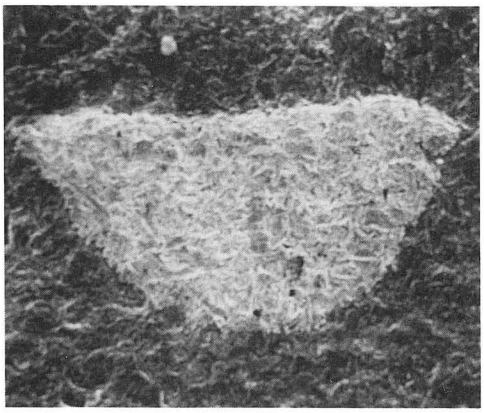




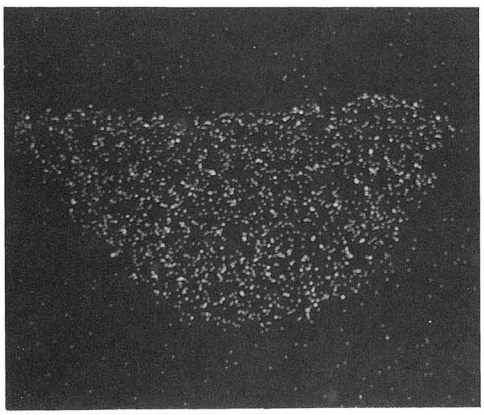
第40図　円頭柄頭象嵌断面の定性分析(X線マイクロアナライザーによる原素分析
上：面分析　下：点分析)



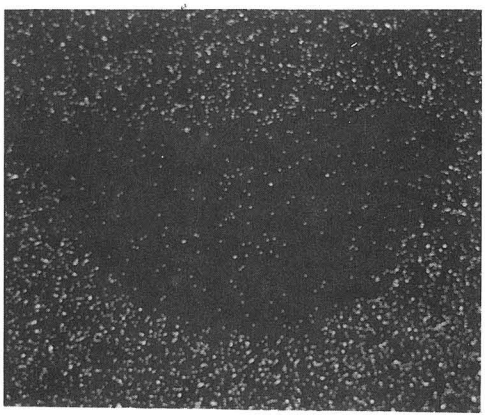
分析箇所



二次電子像



銀(Ag)の分布



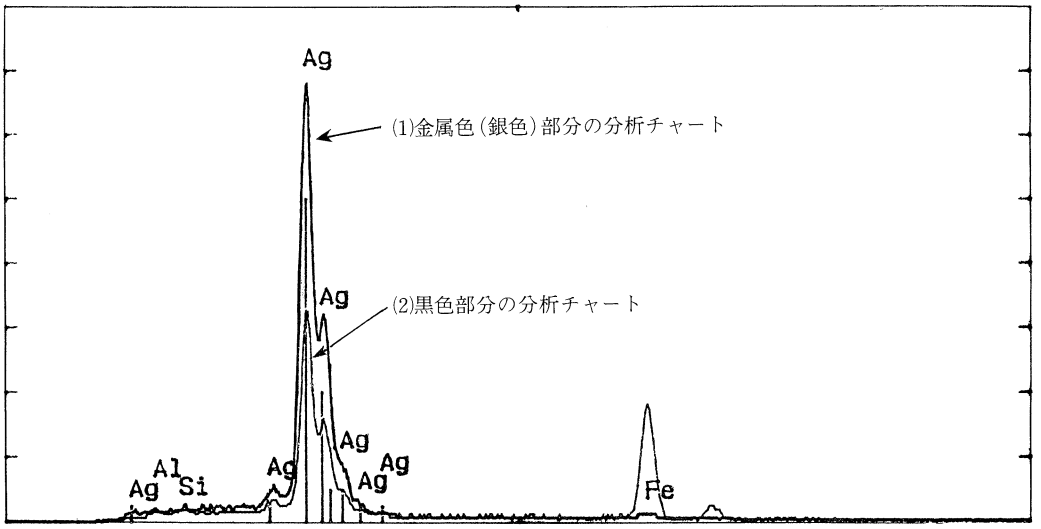
鉄(Fe)の分布

ケイ素(Si)の分布

アルミニウム(Al)の分布

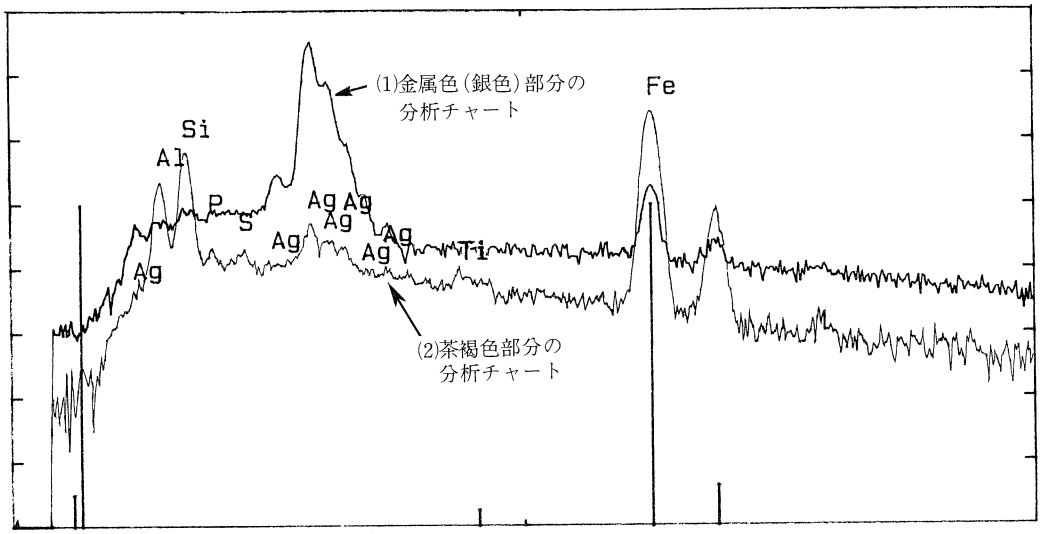
第41図　円頭柄頭象嵌断面の定性分析(X線マイクロアナライザーによる原素分布分析)

(Kabutsuchi)
HORIBA EMAX
Elap: 100sec
HS: 10keV (10eV/ch)
VFS: 11710



Z: 47 Ag

(Entoh)
HORIBA EMAX
Elap: 100sec
HS: 10keV (10eV/ch)
VFS: LOG-L

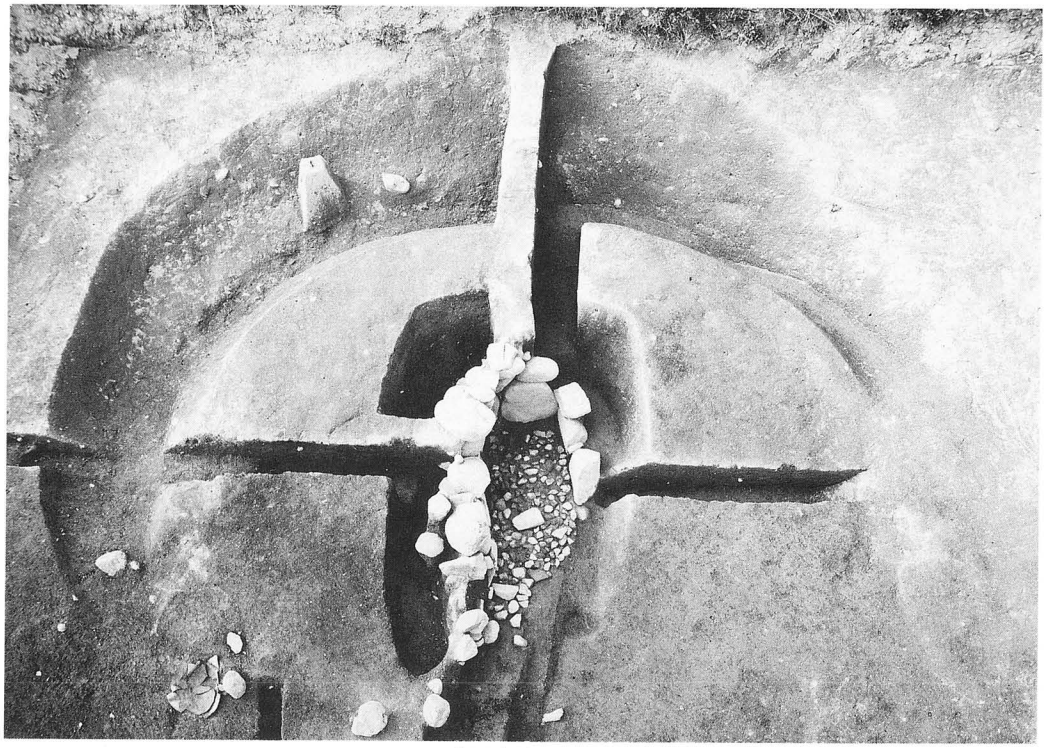


Z: 26 Fe

第42図　象嵌線の定量分析(X線マイクロアナライザーによる　上：頭椎柄頭象嵌線
下：円頭柄頭の象嵌線)

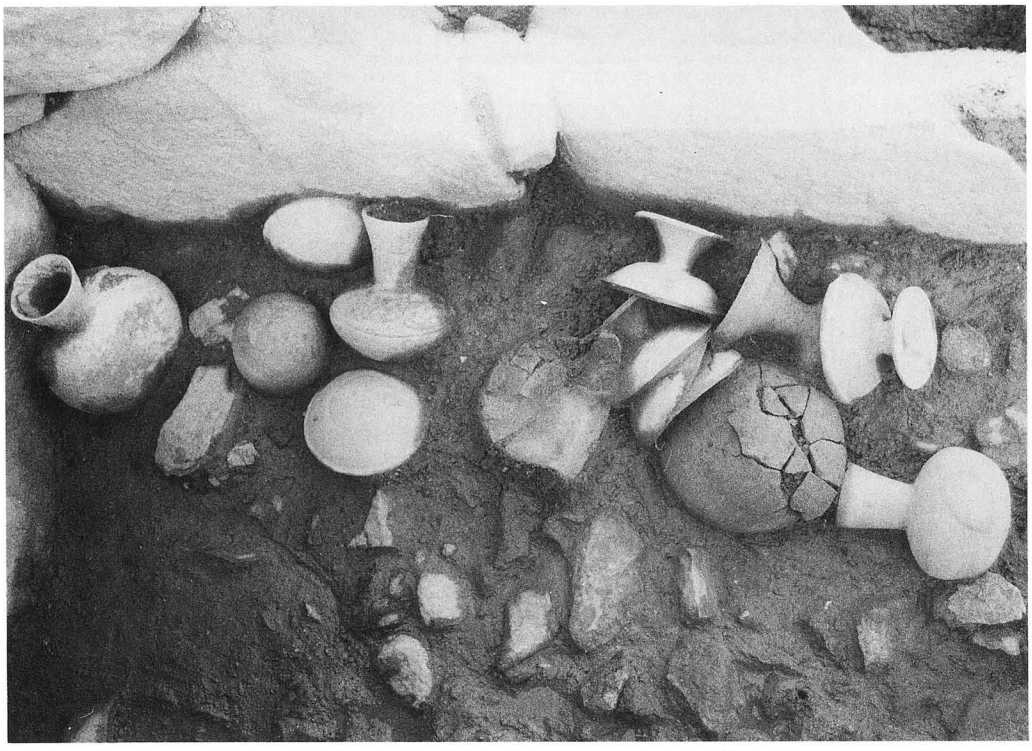
図　　版

柳谷古墳遠景（北から）

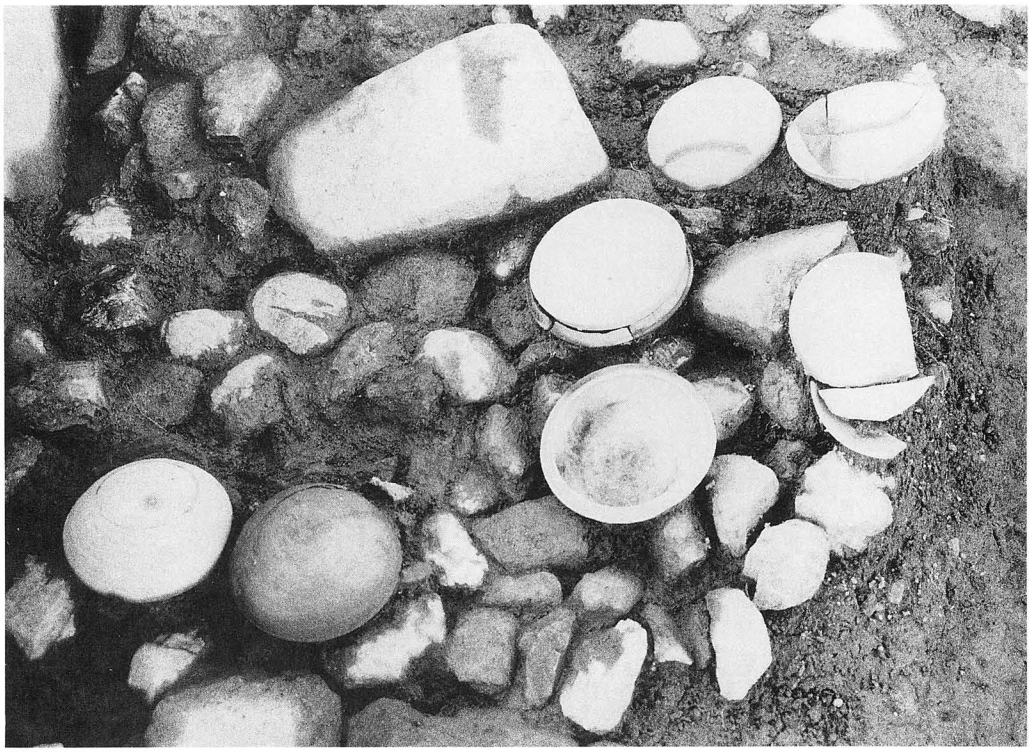


柳谷古墳全景

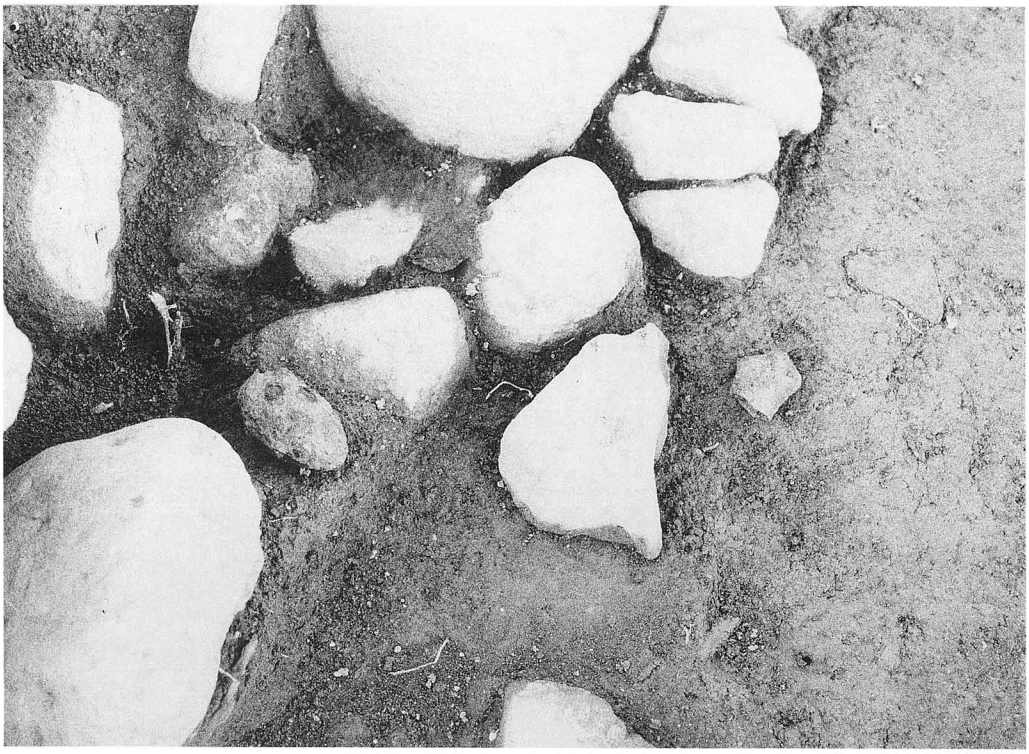
石室内遺物出土状況



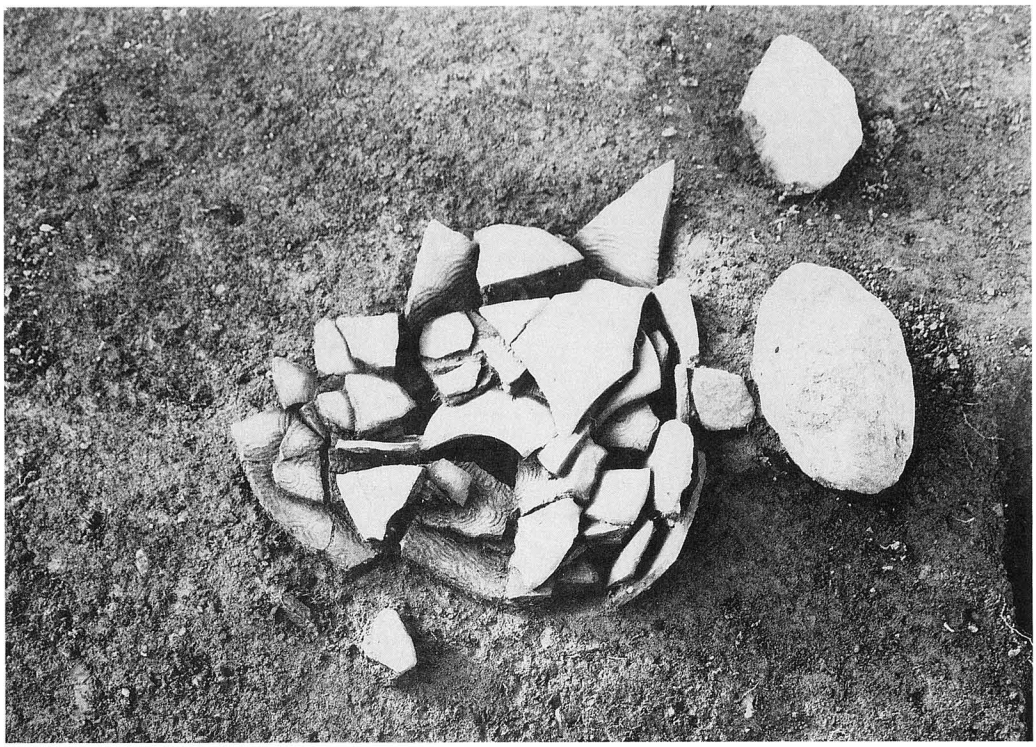
石室内遺物出土状況近影（第Ⅰ・Ⅱブロック）



石室内遺物出土状況近影（第Ⅲ・Ⅳブロック）



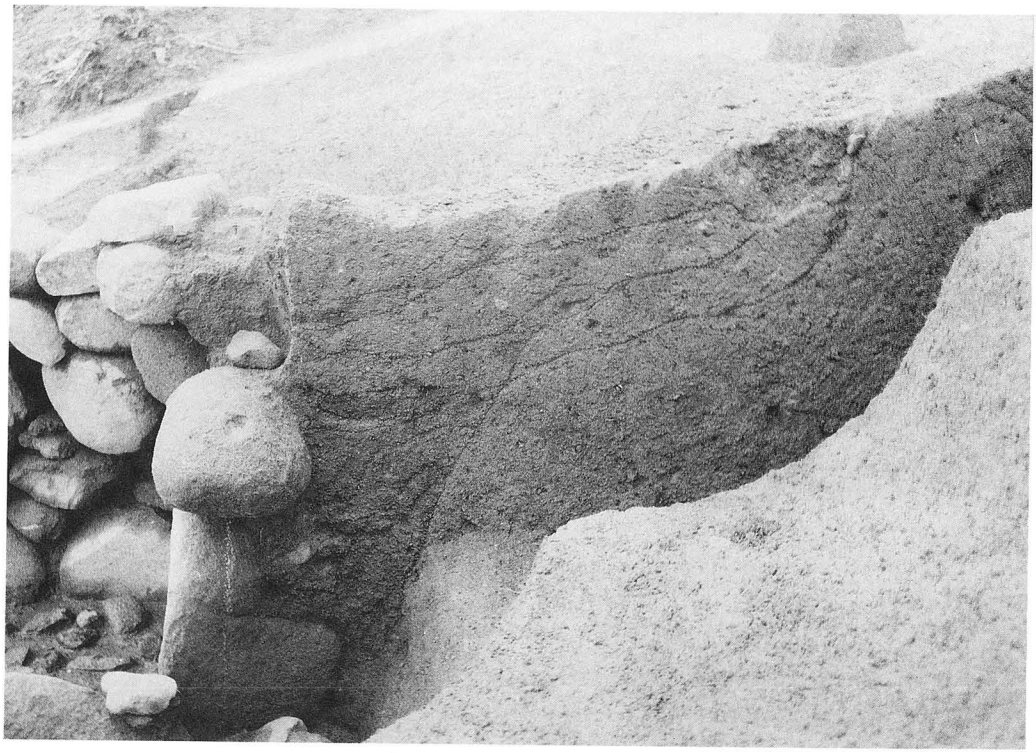
閉塞部頭椎大刀把頭・鞘尾金具出土状況



墳裾部大甕出土状況（陥入破片除去前）

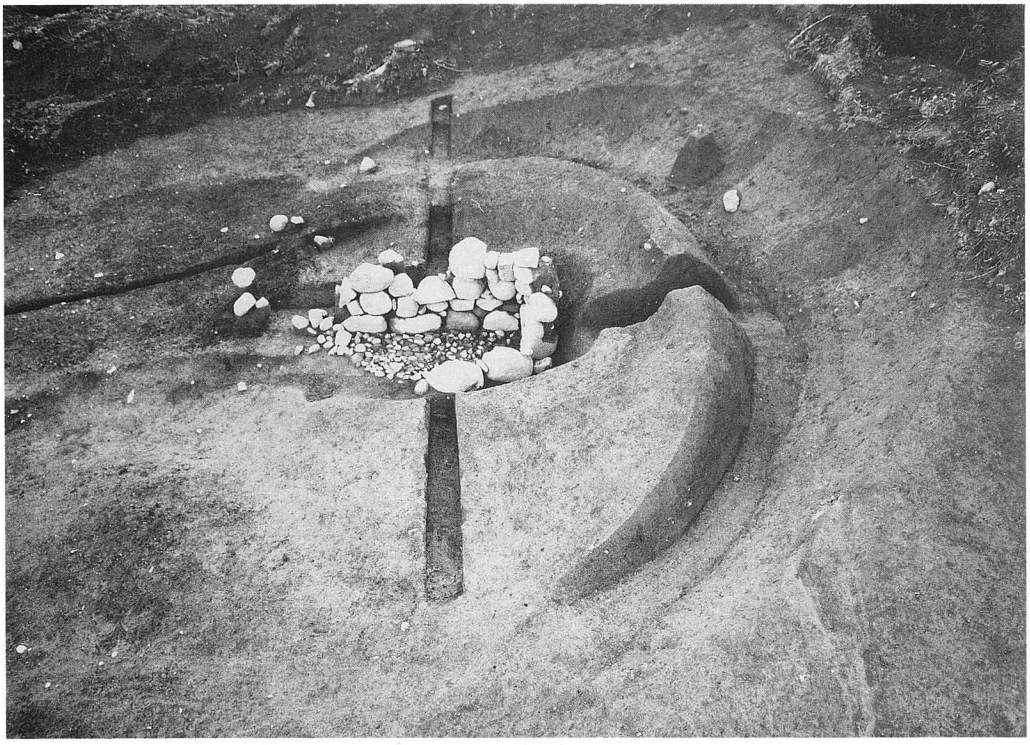
墳裾部大甕出土状況（陥入破片除去後）

石室掘り方土層断面（長軸南側東面）



石室掘り方土層断面（短軸西側北面）

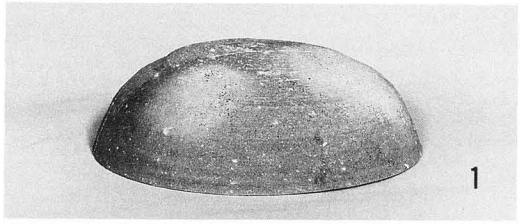
柳谷古墳完掘全景

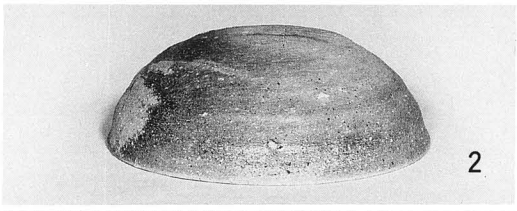


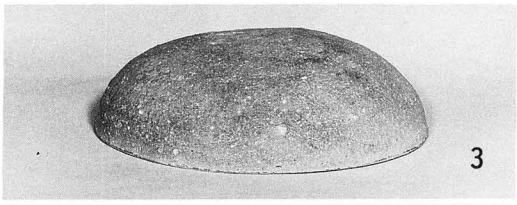
柳谷古墳完掘全景（北から）

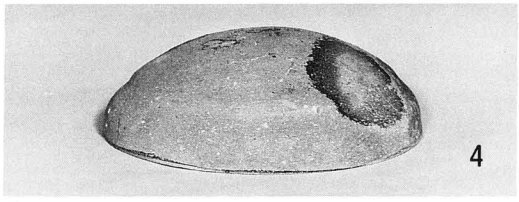
石室横断ち割り状況

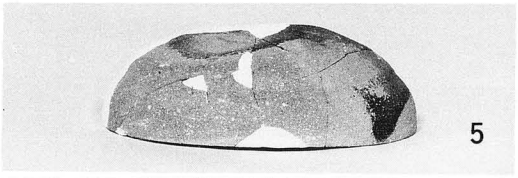
周溝土層断面（短軸、西側北面）

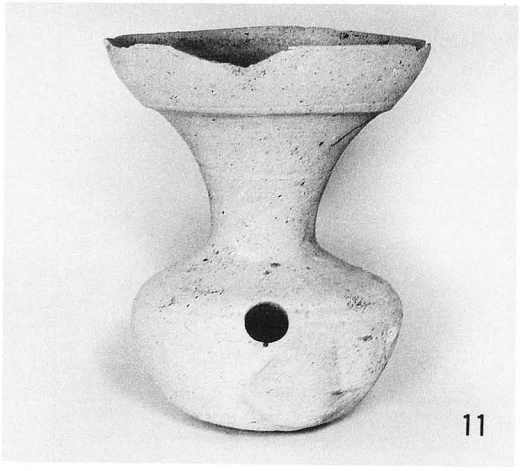

1


2

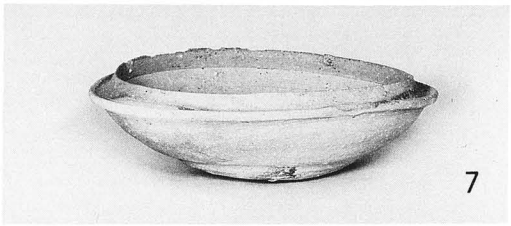

3

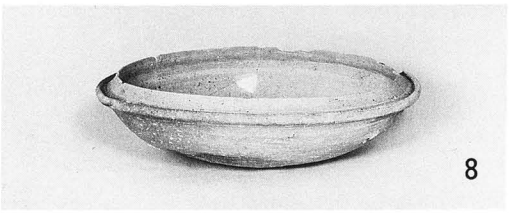

4

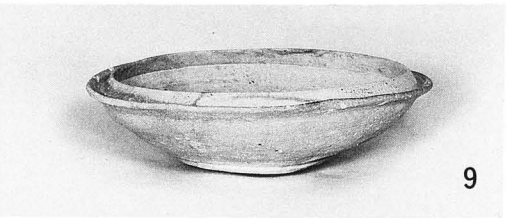

5


11

6

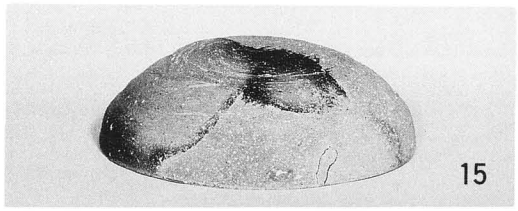

7

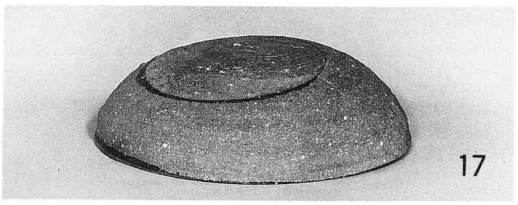

8

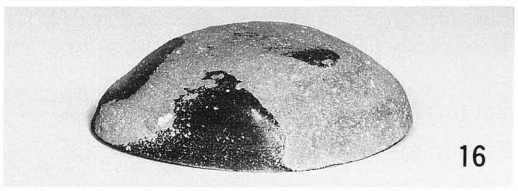

9

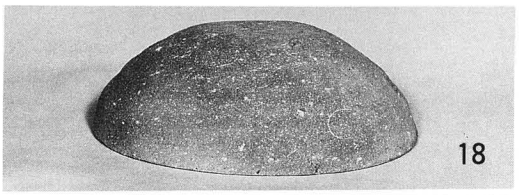
12

13


15


17


16

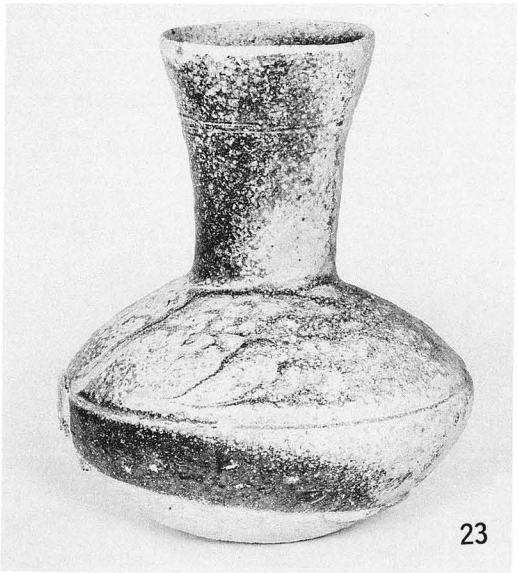

18

19

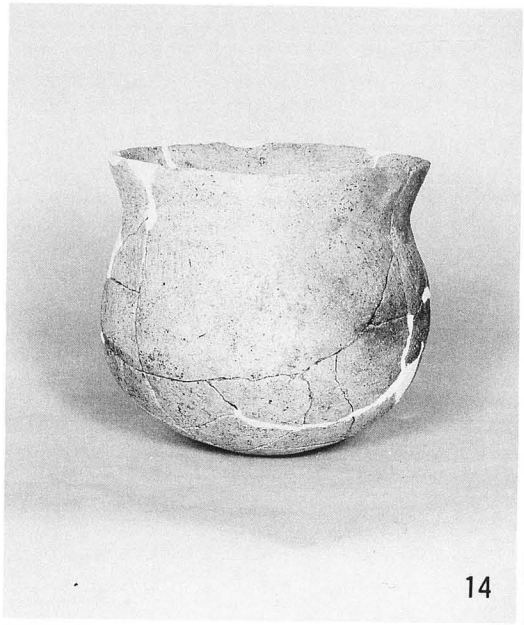
21

20

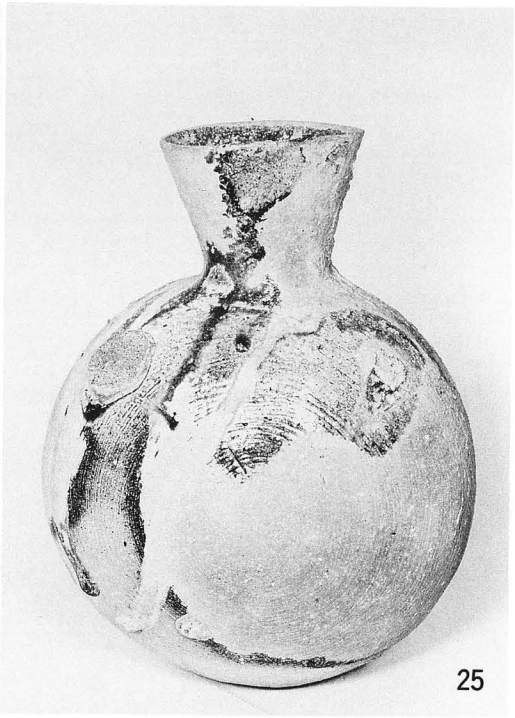
22


23

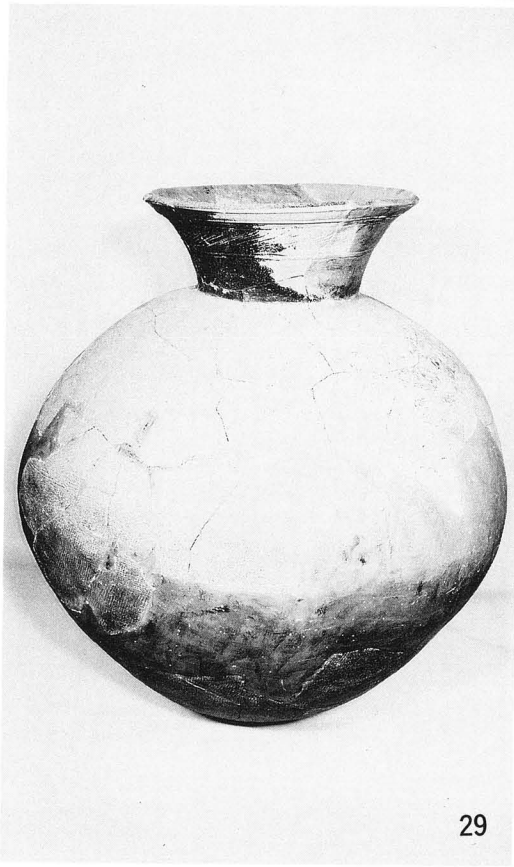
24



14



25



29

28

26

27

30－a

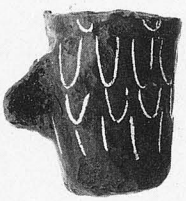
30－b

30－C

30－d

30－e

31－a



31－b

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第24集

柳谷古墳

―津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告１―

昭和63年３月31日発行

発行　津山市土地開発公社
　　津山市教育委員会
　　岡山県津山市山北520

印刷　津山朝日新聞社
　　岡山県津山市田町13